

た北京政府によりて送られたる海關顧問なりき、而かも其目的の分明なるに拘らず、王妃とウエベル夫妻の關係益親善となり、遂に李鴻章をして腐心十年辛くも防ぎ得たる朝鮮露國の關係は成立するに至りぬ、豆滿江陸上貿易の條約成立したる後に於て、王妃は漸く袁世凱の不遜と干涉を避くる能はざるに至りぬ、大院君が飄然として清國より歸り、虎視眈々として雲峴宮に雌伏するを傍觀せざるを得ざりしも亦此結果に過ぎず。

國を鎖したる英雄は其脚下に眠りつつあれども何時起き上らんも知る可らず、二國の強隣に加へて一國の強大と接壤交際を爲す、王妃政府を包圍せる外交關係は益復雜となりぬ。

### 其の三

豆滿江陸上貿易の條約は豫期せられたるよりは甚だ迅速に調印せられ、又豫期せられたるよりは極めて緩和圓滿に繼續せられたりき、蓋し北京政府は愛理條約以來露國を怖るること甚しく、又英國の警告と使嗾は益露國の南下を恐怖せしめたりしを以て李鴻章は屢朝鮮主に勸むるに露國關係の危險なるを以て

したるに拘らず、王妃は陸上貿易の特約を締結し、密使をウラジオストックに派遣して益親善保護の交誼を謀りぬ、蓋し彼は露國によりて朝鮮の進歩強大を計りたるに非ず、王妃其政權を擁護せんか爲めに露國の勢力を利用せんとしたるに止れるのみ。

是時に當りて英國は領事アストンを遣はし、佛國はプランセーを以て京城に駐在せしめ、米國はシルを送りて總領事とし、各國の國旗は漢城に立てられ、朝鮮は世界關係の一に數へらるるに至りぬ、仁川釜山元山の三港を開いて通商自由に行はれ、信仰の自由は保證せられ、耶蘇教漸く行はる、税關、電信、軍事も次第に外人の指導を受くるに至りぬ、而して王妃の勢力は益堅固となり、袁世凱獨り傲然として宗主權を持せんと計れども、王妃は已に列強監視の下に於て共同保護を得たれば、袁世凱對王妃の間に於ては漸く惡感となりつつあり。

王宮に於ける雜人の勢力は全盛を極めたり、卜者、巫女、僧尼專横を極め、祈禱宴遊日として之なきは莫く、國力の濫費巨額を累ね、宮中の威嚴頽破し、風俗の卑穢なる奢侈淫汚、王宮の榮光全く地に委し、府中の政務は外族交るゝ權勢を掌握

し、謀求虐政全國の百姓を苦塗に泣かしむ、王妃の政治は虚榮を極めて且つ墮落したるものなり、其外交に於て聰明なるに比して其内政の治蹟は全く惡徳腐敗を以て充たされたり。

日々長夜の宴を張り、祈禱歌咒の樂に耽りたれば晝は勞疲して睡り、夜は歡呼して遊ぶ、太子幼にして常に其宴樂に従ふ、太子曰く日出則眠、日入則遊と、以て當時王宮の狀態を推測するに足る。

李範晋は歌娼に巧みなるを以て王妃の寵愛を被むり、寢具を犯すも人間ふもの無し、李禧寅は卜筮を以て王宮に出入し、神靈君は巫女の長たるの故を以て宮廷の神の如くに尊重せらる、百僚の官を獲位を圖るもの皆な此等維人の門によりて成功す、閔應植、閔泳、閔泳、閔泳等は猛虎の如く良民の血を絞り、百姓の油を吸ふて止まず、曾て黨禍を掃平し、王宮の腐敗を廓清したる大院君の功業は悉く殘滅し、更に前古に未だ曾て見ざるの腐敗と虐政を見るに至りぬ、而かも遂に之を改革し、之を破壊する無くして十年の歲月を経過したる所以は、世界列強の擁護に頼れり、恰かも王妃は列強の交際を利用して此十年太平の經過を得たるなり。

## 其の四

事大外交の隨喜者たる王妃は、袁世凱と大院君との間に和親を加ふるに至りて自主獨立論者となれり、清國は露國と王妃の親善を加ふるに従ひ、袁世凱の威歴は益激急となれり、袁世凱の干涉益大なるに従ひ、王妃は露國との親密を圖るに熱注せり、朝鮮外交は恰も數多の情夫に包圍せられて嫉妬の喧嘩を呈出せり。米人デニーは李鴻章の尤も信賴せしものなり、彼は王妃の外交顧問に送られしが、間も無く彼は袁世凱の態度に快からずして、眞先に自主獨立を絶叫する發起人となれり、彼は其著「チャイナ、インド、コリア」に於て袁世凱の陰謀を忌憚無く表し、朝鮮の獨立を唱導して清國との關係を破壊すべく力めたりき、而かもデニーは王妃の爲めに之を著述したるものにして、其目的は袁世凱反對に過ぎざりき。

是時に際して清國及其代表者袁世凱の勢力回復策は最早王妃と絶縁し、大院君利用の外に妙計無きなり、大院君の蟄居は袁世凱の訪問によりて漸く何等かの存在を次第に實現すべく見えぬ、適ア「ガニスタン」事件は英露の間に於て葛

藤を生じ、英國は突然巨文島を占領せり。

巨文島事件は露國をして同様の行動に出でしめんとせり、日本の對朝鮮外交も睡眼より起きて漸く活氣を帯び來れり、而かも該事件はアフガニスタン事件の落着と俱に自ら消滅せり、今まで世界の一隅に於て僅かに國命を保ちたる朝鮮半島も世界の關係によりて意外の影響を受くるに至りしは畢竟世界勢力の接近に外ならず。

#### 其の五

甲申事變に對する日本の行動は、花火の如く日本黨と稱したる青年黨の失敗は寧ろ慘刻と謂ふべき有様なりき、僅かに天津條約によりて清國の專横を制したるのみ。

天津條約以來朝鮮に於ける日本の勢力は微弱にして只だ對等の修交を爲すと云ふに過ぎず、金玉均、朴泳孝の亡命客は或は小笠原島に放たれ、或は北海の漂客となりて憐むべき境遇にありき、斯くの如き退嬰の外交政策は獨り朝鮮に對するのみならず、世界に對しても然らざるはなし、而して英國巨文島を占領する

の報傳はりてより、デニール、リゼンドルの徒清國暴慢野心を呼唱してより日本の人心は漸く征韓論以來の急激なる論調朝野の間に行はるゝあり、防毅令事件に至りて日本の態度多少の變改を見るに至りぬ。

曾て朝鮮の外交は二個の強隣に交はるの政策に過ぎざりき、一旦露國と修交の約を結むでより三個の強隣となれり、而して此三個の強隣は各勢力を朝鮮に扶殖すべき氣運に遭遇し、彼其各得んと欲する機會と形勢に於て各異なる處あり、故に當時朝鮮半島の狀勢を目してバルカン半島の國勢と相比照するに至る。日本は朝鮮に於ける袁世凱の行動、并にウエベルの勢力に相比して甚しき懸隔を生じたるを醒覺し、進んで對等の地位を占めんと欲し、漢城に於ける日本公使の活動は漸く注目を惹くに至りぬ、而かも王妃政府は日本の近世的發展に就て何等の尊敬を喚起せざりき。

#### 其の六

朝鮮人は生れながらにして外交に巧妙なり、朝鮮の婦人は先天的に政事を好む特性あり、王妃は其外交と政事とに尤も聰明敏慧なる朝鮮人の典型なり、彼は

王宮をも開放して不取締の絶頂に至つても敢て意とせず、又政堂の政務は悉く其族黨に委して族閥の私腹を肥やすを好めり、斯くの如くにして太平を保てる所以は實に外交均制の力なり

檻中に囚はれたる猛虎は屢起きんとすれども未だ放つべきものなし、大院君は最早忍耐し能はずなれり、彼は袁世凱と相約して尤も善良なる口實と尤も好都合なる機會に於て王妃政府を顛覆すべき内亂の企を謀りぬ、彼は此内亂を鎮定すべき責任を清國によりて實行し得んには、内亂の發露は何時にても出來得べく準備成りぬ、適ウニベル公使は本國の命によりて歸朝したり、王妃の頼りて以て袁世凱の専横を防制したる露國公使は一年有餘漢城を空ふして去りぬ、大院君に於ては露公使の歸國は好き間隙なり、彼は此時を利用して内亂を企たてりき。

東學黨の變亂は則是也。

東學黨の變亂は實に大院君と袁世凱の密約によりて教唆せられたるものなり、彼等は此變亂を利用して清國の軍隊を招致し、其一は之によりて王妃及其政

府を顛覆するとの目的を遂行せんと企てたることなり、其の一は之によりて露國の勢力關係を制肘して清國の權力を卓越ならしめんとするに在り、而して此企劃が甚しき誤算を來すべき不正式の性質を帯びたることは猶ほ恰かも壬午の亂に對する清國軍隊の出勤と均しき結果を見たり。

袁世凱は功名に急なる率直なる人物にして、其勇敢豪壯深く李鴻章より愛せらる、彼は其本國の勢力を代表し、漢城に於ける卓越なる勢力を以て自己の功名に歸し、傲慢なる態度は彼自ら頗る高しとせり、若し王妃にしてウニベルの如き露國を代表せるものと益親善ならしめば、彼は所謂中國の權威と自己の虚榮を永遠に把持し難きを見て、遂に大院君と均しく其忍耐を破りて意外なる損害を招くに至りぬ、大院君は然らず、彼は其忍耐を破るべき責任を袁世凱に歸したる以上は、内亂を利用して政權の回復を謀るにあるのみ。

彼等は之が爲めに日清戰役を發生するに至るべしとは全く想像だに及ばざりしならん、彼等は王妃とウニベルに對して宣戰を布告したる積りなりしに、眞個の戦鬪は沈黙したる、退守せる日本によりて行はれんとは意外の珍事たりき。

國際の利害は測らざる間隙と機會によりて破らるゝ東學黨の日清戦役に於ける壬午の亂の天津條約を産出したると均しく清國に於ては二者皆な朝鮮より起れる外交の大損失たりき。

### 第三次の攝政

世界の列強は半島の門戸を開放する唯一の口實として朝鮮の自主獨立を唱へつつあり、尙ほ之を明白に解説せんと企てたりしは日本なりき、清國は其一面に於ては自主獨立の邦國の如く答へ乍ら二千年間の藩屬關係を失はざらんとせり、故に壬午の亂に成功したる勢力は甲申の變後に失はざる可らずなりぬ、漢城に駐在せる袁公使は其面前に於て自主獨立として交際しつつある外交團中に於て彼獨り任意に宮廷に出入し、恰かも公使の名ありて總督の實を行ひたりき、故に甲午の戦局は彼に取りて意外の産物にして、大院君も王妃も俱に意外の潮流に漂泊したる結末となり、前後十二年間半島王國は其支關を開放して其勝手を閉鎖したる奇觀を呈し、幾回のシスターを發生したるも一に清國の擾亂的外交の罪によらずんばあらず、半島最終の英傑が血を以て奮闘したるも清國の責なりと謂はざる可らず。

只だ大院君に取りて東學蜂起の結末が日本によりて暫時の執權を胎匿する

に至りしは、恐らく彼の夢想だも想到せざる處なりしなるべし。雲岫宮に入らせ  
る謀士が日本人にして王妃の擁護者露國公使ウエベルが日本の勢力に左袒せ  
んとは王妃も亦た想像だも及ばざりしなるべし。

尤も甚しき意外なるは大院君を教唆したる袁世凱の目的全く相違したること  
となりき。彼は大院君を擁して王妃を壓迫せん爲めに軍隊派遣の口實を共謀的  
に煽動したり、彼は曾て兵力を漢城に送りて大院君を拘送したる前例を襲踏し  
て王妃及露國勢力の増進を制止せんと企てたるなり、只だ其の狂言筋書を逆用  
して名を南韓の暴徒に借りて天津條約の範圍を脱せんが爲めに出兵の要求を  
強請し、其兵力を漢城の城内より遠く牙山灣に集注したるが如き、如何に東學黨  
の變亂が主として袁世凱の外交計劃によりて企てられたりしかを想像し得ら  
る。

若し袁世凱の心事を推想すれば彼は王妃に代ふるに大院君を以てし、執權の  
功名を大院君に與へ、ウエベルの不在に乗じて露國親善黨の關係を撲滅せんが  
爲めに隠謀的外交を企圖したるのみ、而して天津條約の責任を避けんが爲めに

兵力を牙山に上陸せしめて内亂鎮定の責は朝鮮に負はしめんとしたるが如き、  
日本の利害を無視し、世界の手前をも憚らざる粗大放漫なる外交企劃と謂は  
ざる可らず、其出兵の一條よりして日清互に國交を斷絶するに際し、彼は、共謀者  
たる大院君を日本勢力の下に委し、其目的たる王妃及親露黨をして韓清國交の  
破棄を聲明せしめざるを得ざりしが如きは、意外の失敗なりとす、而かも斯くの  
如き失敗は國際の利害を尊重せず、世界の大勢に順從せざる外交の違算にして  
清國は壬午の變と均しき誤算によりて同一の失敗を繰回したるなり。

此事件は朝鮮に於ける外交關係の第二期發展時代なり、朝鮮王國が三千年間  
の歴史的藩屬の連鎖を破壊して世界よりして自主獨立の待遇を明かにしたる  
は實に此事件の賜物なりとす。

### 日清戰役と大院君

韓南の一隅より起れる東學の徒興は其勢猛急にて古阜、金堤、沃溝一舉して占  
領せらる、全州城陥るに及びて漢城政府震愕せり、江華平壤の精兵を盡して鎮定

せしめんとしたるも、太平十年、謀求虐政韓南の民は寧ろ東學の叛徒によりて民政を願ふの有様あり、長袖能く舞ひ、多錢善く買ひ、王宮の殘夢は太平の曉を告ぐるを知らず、叛徒の勢將さに中原に及ばんとするを見て、恍惚手の措く處を知らずして徒らに驚愕するのみ。

雲峴宮と東學本部の間に於ては秘密の往復頻々たり、半島の原野已に放火の火勢熾なるを見て、私かに拍手欣舞しつつあるは袁世凱なり、彼は王宮の憂慮と王妃政府の狼狽せるを見て、冷然たる態度を粧ひ、救援保護の哀求を待ちたりき、果然時の執權閔泳駿は王命を奉じて内亂鎮壓を袁世凱に求めたりき、彼の不遜も、干渉も今は背に腹代への存亡の時なれば、王妃は遂に三拜九拜して東徒鎮定の爲め出兵を請ふの公文書を袁世凱に致したり、以爲らく東學は雲峴翁の指揮によりて起れり、若し叛徒にして中原を侵すあらば鮮血と殺戮は大院君の手を以て遂行せられん、王妃政府最早全く進退を失ふに至れり、出兵請求の公文は直ちに北京政府の虛榮と誇大を誘發し、出兵を斷行しぬ、出兵によりて日本若し出兵すとも日本は其實力に於て清國を防止せしむ決心無きものと判斷したり。

斯くの如き違算と不用意とを以て出兵したる後に於て、日本は敏活なる行動を取り、數日ならずして一旅團の兵力は漢城政府を包圍しぬ、東學を討伐するが如くに形容しつつ、漢城政府を威喝せるを目的とせる清國軍隊が、牙山の海角より漸く平澤の野に陣を移さんとせる間に、早くも京城及仁川は日本軍隊によりて充滿するに至れり、此形勢に遭遇せる王妃の驚愕は非常なりき、之よりも大院君の意外は甚しかりき、尙ほ之よりも袁世凱の心配は甚しかりき。

時局は益險惡となりぬ、局面は刻々に危険となりぬ、斯る大事件となるべきものならしめば、初より出兵の請求は爲さざりしなりとは王妃及其黨派の後悔したる處なり、又東學の叛旗は煽動せざりしなりとは大院君の考思せる處なり、斯くなりしならんには出兵は尙早なりしとは袁世凱の心中なり、問題は出兵の理由論より轉變して今や爆火を携へて口論を進行せり、不可能なる内政改革は朝鮮政府と日本公使との間に於て論議せられつつあり、雲峴宮邸には幾多の謀客を以て充たされ、大院君の出脚を督促しつつあり、袁世凱は只だ愚昧なる出兵と撤兵の公文書を監視しつつあり、流れたる洪水は氾濫するのみ、兩國の動兵已に

茲に及んで戦争は只た避く可らず。

此中間に徘徊せる王妃政府の困厄は絶頂にあり、東學の叛亂は其實政敵の煽動によりて出来したるもの、清兵の動員は其實袁世凱の強制によりて請求したるものなり、王妃更に日本の大軍に包圍せられて亦た何等の權略も施すに由なし、偏へに日清兩國が兵を撤し去らんことを希ふのみ、日本公使と王妃政府の間には日々公文の往復、委員の來往を累ね不可能なる改革案と不可測の危険は彼此の間に討議せられ、反覆せられ、修正せらるのみ、只だ此切迫せる形勢を支へて平和を繋ぐの道は清國先づ其責を負うて軍隊を撤還するのみ、袁世凱の不遜と野心を制して朝鮮の獨立を尊重するの公使と更迭せしむるのみ、大院君は其利害得失を忘れて東學徒平定の任に當らざるべからず、之を行ふ無くして戦局を避くるの餘地は最早存在せざりき。

清國が出兵したりしは六月、明治二十七年七日にして、日本公使が海兵陸戰隊を率ゐて京城に入りしは六月九日なり、同月下旬には京仁の間には日本軍約八千の兵力駐屯し、牙山成歡の間には清國軍約六千駐在せり、七月上旬より外交交

渉は漸く困難となり、天津條約蹂躪の罪は全然清國に存在するものとして今や一步も讓退せざるは日本の態度なりき、七月十九日に至りて平和の維持に一條の望を繋きたる清軍撤回も全く斷絶し、天津に於ける増兵の計劃戰鬪の準備益急なるの光景あるを以て、遂に出兵を要求したる王妃政府に向つて最後の公文を送致し、同月二十一日日本公使は軍隊を率ゐて王宮に參内し、清國の軍隊を強力によりて驅逐して以て朝鮮の平和を保ち、國政を改革し、日本軍隊によりて領土の保全を期すべき王命を受けたり、是れ則ち日清戰役の最初の行動なり。

大院君は其作らんと期したる機會は來らずして、彼は期待せざる機會に乗すべく要求せられたり、人生の運命は屢狙撃と咄嗟の間に於て消長す、彼は袁世凱と懇懃なる手を握りし其約交を以て大島圭介に轉交せざる可らず、彼は東學徒の毒矢を以て王妃を射るべく企てたりしに今は却つて日本軍の彈丸を借りて東學徒を射るの逆運に誘はれたり、彼は雲岷宮にありて沈思默考を重ねたるもその進退を決するの妙案を見出し得ざるなり、然れども其心血を貫く野心は空しく此變局を傍觀し能はず、彼の幕下には攝政の光明近づきたるを望んで大院



君の起立を觀誘して已まず彼自らも光明の存在を見て亦た起立の念を禁じ得ざりしなり。

彼は斯くの如くにして起てり、十年間蟄伏したる雲峴宮より出てて王宮に向ふや群衆は潮の如く集り、英雄の風姿を見んとて雑沓を極めたり、彼は其半面に於て歡喜の情抑へ難きものあれども其半面に於て憂慮の念を禁ずる能はずして王宮に參向しぬ、一生彼の尸を横たへて之を鞭つ乎、我の骸骨を以て彼の冷罵に委すの外重ねて相見ざるを期したる王妃は依然として宮中に在り、彼は其前後に於て黃龍旗を立てずして日章旗に擁護せられたる不思議の運命が果して何處まで彼を乗せ行くやを感懷せずして已まず、政權のもえ行く火光を見て兎にも角にも走るは彼の運命なり。

王宮は日本軍隊にて守護せり、王妃は存在せるも彼の周圍を飾れる雜多の徒輩は悉く驅除せられ、逃亡せり、王妃黨政府は忽ち顛覆し、閔族は皆城外に逃散せり、新政府は王宮の軍機務所に於て合議的に議定せらる、國王は王妃の生命を保障するためには如何なる讓歩と條件とを顧みず、幸に大院君の參内を引止めて

攝政の位地に立たしめたり、政府の中樞に當れるものは王妃黨にもあらず、大院君黨にもあらず、當時稱して開化黨と唱へたる雜流の輩なりき、大院君は彼が攝政の權を握るよりは先づ王妃の存在を好まず、故に巨大の寛大を以て王妃の生命を奪ふことを敢てせざる代りに、廢して庶人と爲すの議を行はんとしたりき、然れども彼は自己の運命を他人の手により開展したるもの、又彼の部下には國太公よりも尙重んずべき日本勢力の下に於て集合したるもの多し、遂に此議も亦行はれざりき。

彼は此一事に遭遇して深く後悔したり、晉に讐敵を亡ぼし得ざるのみならず其面前に於て十年の恨怨を雪ぐの手段さへ行はれざるに於ては、何故に雲峴宮より王宮に來りしかを憤りぬ、彼は王宮に止ること十幾日にして歸り去れり、其後に於て彼は攝政の實權を獲て、王妃を倒すの機會もあるべきを想像したるもの、如し、日本軍は清軍のために破られ、日本の勢力は同時に朝鮮より退去すべし、豊臣氏の精銳を以てすら、明軍のために退軍したるを以て、今回も亦た清軍によりて驅逐せらるるに至らん、然れば今の王宮に安座し、頼り無き攝政に就かん

よりは次の機會を待つに如かずと彼は始よりして清軍の勝利を信じ、日本策士の遊説や、日本勢力の擁護によりて起つ心の算無かりしと雖も、日本軍の手を経て王妃を王宮より放逐し得べしと想念して七月二十一日王宮に參内したるなり、而かも王妃は放逐せられざるのみならず、彼の冷刻なる口唇を開いて國太公との會見を祝したるが如き、彼に於て不快の念禁じ能はず、又雜然たる機務所に於ては思慮なき改革論の喧々たるを見て、嫌氣と不快に堪え兼ね、遂に齋巢に飄然として歸り去れり。

志事と相違ふ是れ大院君の境遇なり、彼は一旦雲峴宮より出でて王宮に入りたれども、四圍の光景は殆んど意を滿たすもの無し、さりとて再び王宮より雲峴宮に還りたれども、時勢は彼の期待の如くに回轉せざれば、進んで王宮に立ちて勢力無き攝政たらんか、退いて寂寞なる雲峴邸の閑居を繼續せんか、彼が滿身の覇氣を以て煩悶するも無理ならず。

戦局は着々進行せり、七月二十九日には牙山成歡の清軍は大敗し、九月十六日には平壤陥略し、同月十七日黄海の海戦によりて清國の海上權力は威海衛に退

守するに至れり、十月より十二月の間に於て南滿州の大半は日本軍に進路せらる、蕞爾たる日本軍は遂に敗亡して朝鮮半島より敗退すべしとの想念は獨り大院君のみならず、朝鮮の王室も人民も均しく想像したりき、若し大院君にして滿足なる政權を獲て、彼の讐敵を滅ぼし、彼の腹心を重用し、彼をして攝政の實權を行はしめば、彼或は一切の情誼を棄てて東學徒を鎮壓し、清國に戈を取りて戦ひしや知る可らず、然れども日本帝國は大院君の執權を保證するため、大兵を動かし、巨財を投じて戦闘したるに非ず、故に大院君の進退は假令朝鮮政策上には重大なる關係ありとするも、彼の進退によりて政策の變化まで爲し能はざりき、果然彼は見込違の觀察と不満足の政權の腹癥やしとして、東學徒を煽動して韓南より京畿、黄海に反抗せしめたり、彼は其愛孫李垞鎔をして王位を繼承せしむるの熱情を抑ゆる能はずして、屢其端緒を開かんと企てたりき、然れども斯る方策は朝鮮の平和を持し、自主獨立の王國をして益國際の禍亂を誘起する私憤私闘に外ならず、之を當時日清二國の戦局中に於ける大院君の行動として其識見狭小にして尙ほ李朝五百年史を通じて痼疾となれる朋黨の私闘たるに過ぎず。

寧ろ其窮厄の間に處しては死尸の如くに沈黙し其機會を捕ふる毎に自己の勢力を開展し其外交均勢の操縦に大膽なる辭令に巧みにして人目を幻惑する偉大の手腕ある王妃に比すれば大院君の一生は愚昧なる野心の結晶に止まり實際の變化毎に身を誤るに至りしも當然なり。

奇抜なる法令新進せる制度異彩を放つの人材登用細密嚴肅なる法理と燦爛詳周なる行政の組織舊慣の勢力を無視し歴史の連鎖と調和を滅絶せる新政治は戦火の側に於て白刃を提げつつ日本勢力の下に發布せられ又實施せられつつあり不調和にして不丁解なる此改革政治は不安の念を發せしむのみならず不快に堪えざらしめたりき然れども弱小の民は之を遵奉するの外之に反抗し能はず大院君をして景福宮より雲岷宮に去らしめたりしは半ば新政治の奇怪千萬なるに避易したるの形跡無きにしもあらず而して此状態を目撃し乍ら獨り賞讃の辭を呈し服從満足の意を表したりしは王妃一人なりき大院君は其反對者の最初の一人にして王妃は其賞讃者の最初の一人なりき大院君は之を以て失意となり王妃は之を以て得意となれり。

### 甲午の改革 (二十七年の改革)

民力の實狀に調和せざれば文明も禍災物となる國勢の實況に副はざれば進歩も痛苦となる吾人は後世に至りて甲午當日の改革を追回すれば其滑稽なる其不調和なる其形式のみに走れること恰かも文化の尸骸を展列したる心地せずんばあらざるなり。

景福宮内に於ける最高級の政務機關たる軍國機務所は事の善惡物の利害を論せず苟くも其名の改革にあらしめば新制度となり新法令となり勅令と法令は日々競争の如くに濫發せらる先づ舊來の六曹衙門は廢せられ判書參判の名は同時に廢止となり近世の内閣制度は造作も無く改正せられたり長官たる大臣より次官の協辦政の務參與たる參議及局課の事務は分類組織せらる軍事警察税制及地方の制度悉く新法の下に改革せり日本帝國が二十餘年間に必死の力を盡して改革したる文明政策は渺たる軍國機務所の一隅に於て僅に數日間に於て成功したり該所に於ける改革家は我維新の西郷大久保木戸の大政事

家の企て及ばざる敏腕と果斷とを以て半島の政治を改革したり、斯る拙速なる政治が而かも曾て夢想だも考へ及ばざる朝鮮人の手を以て施行せらるるが故に、朝鮮國民は全く仁政と善政の饗應に飽食し、彼等は文物制度の嶄新なるに驚嘆したるのみならず、其多量なるに食傷し、暫らくにして甲午改革のために胃腸の壞血を引起しても尙且つ改革は矢の如く行はれぬ、如何に文明は人類の幸福なりとは云へ、新法は福音なりとは云へ、滿腹には有害の毒味たらずんばあらず、只だ驚くべきは三千年來安眠しつゝある歴史的政治の城廓を悉く破壊して、之に充つるに、之に代ふるに曾て見ることも無き新法を以て彼等を慰安せんとの大膽なる改革を以て充滿したりしことを、彼等は自ら文明の先驅者なりと思へども、其實は政治の暴風なり、彼等は眼中に於て王妃も無く、大院君も無く、勿論日本軍隊が疾風の如くに清軍を討滅するが如くに、改革を以て八道の人心を風化せんと企てたるなり。

改革者は颯風の如くに舊朝鮮と戦闘せり、日本軍は清國軍と戦火を交へつつある間に大院君と王妃は争闘の準備を爲しつつあり、而かも此改革に對して王

妃は忍耐して歡迎するかの如く賞讃せり、大院君は反抗して不服を唱へつつあり、彼等の國家は三百年來の大事件に遭遇し、其利害休戚の繋る處極めて重大なるに拘らず、彼等の國民は強大の藩屬より脱して獨立の戦闘中なるに拘らず、上は王宮より下は一平民に至るまで、又彼等の英雄も凡庸も、自己の權勢を謀るの外に何等の慾望無く、改革に反抗するも謳歌するも均しく自己本位に過ぎざるは昔しの朝鮮人も今の彼等も少しも異ならざるなり。

甲午の改革は餘りに急激にして國狀と民力をも考慮せざる不調和なる改革なるにせよ、日本は多大の兵力を損失し、許多の軍費を消耗して、彼等を屬邦より救済せんとしたる大恩誼ある戦闘なり、所謂其國政の改革も其救済の目的に出でたる好意に外ならず、若し彼等の内に於て祖先以來の屈辱と醜態を挽回せる好時機なりと醒覺する愛國者あらしめば、彼は善隣の好交を感謝す、自國の發展と獨立のために干戈を取りて日本軍と俱に暴慢なる清軍に敵抗すべき筈なり、然るに彼等の國王は痛苦の思を爲して戦局と改革を觀望し、彼等の國太公即大院君は東學の餘勢を招致して改革政府の威信を妨害し、彼等の民衆は惡感を以

て新政府を迎ふるが如きの状あり、斯る状態を以て朝鮮人の心事を推度するに彼等は獨立の建設に何等の志望無き國民なることを了解し得らるゝ、只だ甚だ思な<sup>る</sup>は日本なり。彼は半島王國を屬邦より脱却せしめて世界進歩の政治教育を興へることに餘りに多くの努力を爲して何等の感謝をも得ざりき。

責任ある内閣を立て、宮中府中の別を明かにし、誅求虐政を改め、世界の進歩せる人類が幸福として享けつつある新制度の建設も、彼等に取りて官吏となり、政權を得るの方便たるの外何等の意味なき上に於て數十年來一國の長老たる大院君にして之を以て立國の基と爲さず、國運新興の機會と思はずして只だ一の政權集統の機會に利用せんと欲する慾望を棄つる能はざるに至りては寧ろ氣の毒なりと謂ふに過ぎず。

彼は雲峴宮に歸りて戦局の勝敗を觀望しつつある間に於て、改革の下に於ては各種の人物集りつつあり、人材は事變毎に發生す、彼は三十年前の時勢と人材とのみを想像したれども、改革政府の下に於ては金宏集の如き剛健なる政事家もあり、朴泳孝の如き急激にして見識ある人物もあり、安烟壽金鶴羽の如き策士

もあり、彼等は大院君黨にもあらず、又王妃黨にもあらず、今や日本勢力を中心として漢城政界に現れたるものなり、大院君が尙ほ戦争の勝敗と王妃の輕重を打算しつつある間に於て、彼等は大院君と漸く其距離を遠かりつつあり、其或者は漸く王妃の下に集らんとするの光景となれり、大院君を推重して王妃を制肘したる日本も漸く其順序を變化しつつあり、而かも尙且つ大院君は攝政の殘夢中に低回せり。

内に於ては王妃の勢力漸く増進し、外に於ては清國の敗蹟益著大となるを見て、大院君の決心は漸く動きぬ、彼の野心は益燃へ上れり、然れども此決心も野心も殆んど機會を失して了はりぬ、彼は東學徒を煽動したる責を明かにして其巨魁全奉準を誘引し之を新政府の絞首臺に上らしめたり、彼は反對したる改革政治にも隨喜し大雅量を開いて新政府を包容せんとせり、彼の幕下を收攬して政府に推擧したり、若し都合好く時局と調和し新政府を味方とし、日本の勢力を利用し得んには彼は其胸中に收めたる國王を廢し、王妃を放逐し、王位の繼承は其愛孫に譲らしめんとまで企てたりしも、機會は早く去つて空し、彼の思立は雲峴

宮裏の想像にして終れり。

之に反して王妃の活動は眼醒しかりき、彼は日本の元勳たる井上伯の來韓を  
迎へ、日本公使を引見し滿腔の赤誠を披表するかの如くにして日本公使の訓諭  
的奏上、忠告的説法を聴聞し、且つ贊同し、且つ賞揚せり、文明典章の權化とも云ふ  
べき井上伯、嚴肅詳密なる井上伯の奏上に對して、彼の態度は直に日本公使の同  
情を買ひ得たり、彼は直に日本政府の良友なることを能くも表白し得たり、日本  
元勳の下に走れる政權の飢餓者、熱狂せる獵官者は、自國の運命を放棄して日本  
公使の下に集合せり、内閣會議は日本公使の接待室に在り、朝鮮の王宮も日本公  
使の客室に移轉したるが如き一時の状態なりしにも拘らず、彼の女性政事家は  
沈黙して日本元勳の權威を崇敬せり、急湍直下の改革に加へて文化の權化の神  
は來りぬ、宛ながら朝鮮は戦火の血祭りに法文制度を以てしたる光景なりき。  
斯くの如き王妃の態度は暫らくにして王妃の生存と其回復の伏線たりしな  
り、日本公使は雲峴宮を敬遠して景福宮を對手とせり、大院君が起つて漢城の政  
界を瞰視したる頃には、日本勢力と王妃の連絡は最早動かす可らずなりぬ、此光

景を見て漢城政客は日本公使館に走り、且つ景福宮にも走りぬ、やがて彼等は雲  
峴宮を全く忘棄して王妃の下に次第に多く集合しぬ、是れ朝鮮政事家の常習な  
り、漢城の政界は古昔より此の如し、彼等は國の命運を測ることは極めて拙劣な  
る技手なれども、權勢の輕重と順逆を算ふるには極めて敏捷なる技師なり。

先づ王妃の下に疾驅したるは朴泳孝なり、曾て王妃黨によりて殺戮せられた  
る開化黨の殘物は日本亡命より歸來奮怨をも忘れて王妃の下に隨從せり、彼は  
女性なる代りに人心を收攬するに圓滑なり、表情的なり、朴泳孝の王妃黨に入籍  
したるは大院君に對す最初の宣戰なり、最大の發火なり、彼は日本政府と縁好あ  
る朴泳孝を利用せんが爲めに入籍を歓迎し、朴泳孝は政權を獲んが爲めに王宮  
の太陽を崇拜しぬ、金宏集も安爛壽も悉く王妃黨に入籍したり。

利害得失の外に於て朝鮮人は何等の理想も無く、情誼も存在せず、彼等の間に  
於ては曾てより仁義忠孝の教無きにしもあらず、然れども近世の朝鮮人は仁義  
忠孝よりも自己の生存と利益を重大なりとするの教訓を受けたり、一方に於て  
は井上伯の文物典章は最大急行を以て促進せるに際して、一方には早くも政權

爭奪の戦場を築きたるが如き、若し志士仁人ありて此光景を目撃したらんには其國運の傾頽せる所以を首肯すべし。

朴泳孝の王妃黨に歸順したるに對して日本政事家は彼が亡命十年世界の大勢に通曉し、國運挽回の愛國者たるべきを期待したるに相違し、其王妃より給與せられたる壯大なる小安洞の邸宅に安坐美食し、政權を獲るや得々として權勢の收獲に急なるを見て、其臍腑甲斐無きを浩嘆したるものもありき、然れども是れ善く朝鮮人を了解せざる誤なるのみ、彼は王妃と提携して顯重の位に上る、内閣大臣や得意満面の状あり、彼は王妃によりて政府樞要の地位を以て満足せず、漸くにして日本公使の干渉を唱へ新政府の獨立を叫び日本の指導を煩累なりとして竊かに日本の勢力に對抗せんと企てぬ、是れ彼の打算に非ずして王妃の打算なり、王妃は日本の勢力に對して安心せざるなり、彼は自己の位置に就ては十二分の保證を得たれば、日本勢力以外に於て彼は尊重すべき國際勢力の存在を豫想せり、故に朴泳孝をして政務の當面に立たしめ、日本勢力の獨占を攻撃せしめつつ、早くも閣僚間の暗闘を使喚しぬ、是れ則ち首班の大臣たる金宏集との

軌轢なり。

朴泳孝金宏集の軌轢は引いて日本勢力内の軌轢なり、故に暗闘の潮流は早くも日本人間に胎胎せり、王妃は其手品師にして、彼は日本と絶縁せんが爲めに少くとも日本の干渉を去りて王妃の全勢力を形作らんが爲めに、自己の黨派に自ら離間中傷を投じて此大波紋を作らんとせり、狡智深遠なる女性ならずや、形勢は斯くの如くに進めども大院君は依然として憤慨と不平を抱くのみ、彼は憐むべし王妃及朴泳孝の連鎖を破壊せんが爲めに、策士金鶴羽を暗殺せしめたり、彼は依然として暗殺を以て政權爭奪の最大利器とせる蠻勇を有せり、蓋し金鶴羽は久しく金玉均朴泳孝等に隨遊して日本の形勢に通じ、其雄辯と氣魄は尋常に非ざる才物なりき、朴泳孝の志を成さしめんが爲めに王妃の誘引に應ずべく朴泳孝を勸誘し、爾來其中間にありて朴泳孝の幕中に參與したる策士となれり、大院君は朴泳孝を重視せず、然れども王妃黨の勢力が最早隆々として昇るを見て深く朴泳孝の加盟を惡み、遂に力士をして暗殺を遂行せしめたりき。

暗殺の嫌疑は直ちに大院君を襲へり、事實は豫想の如く彼の部下たる金國善

韓喜錫、鄭祖源等を捕ふるに至り、而かも其首謀は愛孫李容鎔に在りとなし、高等法院は設けられ、李容鎔は喬桐島に十年流刑となり、其餘は嚴刑に處せられたり、而かも當時滿州慰問として旅行中にありし慰問使の一行中、朴準陽は歸着直ちに捕はれて死刑に處せられたり、是に至りて大院君の勢力も亦た失墜して、彼は寂しき雲岫宮に憤慨の餘生を送るのみ。

### 王妃の權勢回復と外交術

日清戰役の終局は之を朝鮮よりして其結果を見れば恰かも甲申事變の終局則ち天津條約と均しきものあり、天津條約は壬午亂後に於ける清國の獨占的勢力を制限したる効力を有せり、日清戰役の終末に於ける露佛獨三國の干涉は朝鮮に於て日本の獨占的勢力をも制限したる効果を有したりき。

王妃及王妃黨が其勢力を回復するに至りし重なる原因も亦た此國際關係の變化によれり、所謂三國干涉によりて戰局を結びたる頃には、朝鮮に於ける日本の勢力は已に王妃の政略によりて漸次排斥を受けつつある時なりき。

山の如く積み立てたる改革案は、日々雨の如くに發表せられたるも、其實死文の配違と同じく、只だ新政府の名を飾るの形式に過ぎず、井上伯來りて更に倍加の急速力を以て新法を發布するに至りしが、早くも三國干涉の勢力は王妃に於ては好個の外交問題たりき、彼は朴泳孝を引誘して政府の樞路に置き、一面は大院君派の勃興に當らしめ、一面は日本勢力の壓迫を防かしめ、更に内閣の同僚等を教唆して、黨争を惹起さしめて、彼は日本勢力の前に叩頭百拜し乍ら、日本勢力を發展を制せんが爲めに早くも露國との親交を温め、其公使ウエベルとの間に特別なる外交上の友誼を繋ぐに至れり、ウエベルは善く此關係を利用し、王宮に於ける政務も次第にウエベルによりて指揮せらるるの實狀を呈するに至れり、彼の外交に於ける聰慧なる手腕は驚く可き好成績を示したり。

彼は曾つて袁世凱が老大帝國の餘威を以て王宮の政務を干涉したるに際して、彼は露國の勢力を利用して牽制したりき、三國干涉の主要なる露國の勢力を利用して日本の急激なる改革政治と其權力を牽制すべく企てたりしは、彼に於ては外交の實驗なり、試験濟みとなりし成功的方略なり、恐らく是れ朝鮮傳來の



慣用手段なり。

(184)

露國公使ウエベルのみ王妃の味方となりしのみならず、貞洞俱樂部と稱せる各國人社交の機關は、期せずして外交及政治の相談場なりき、米國代理公使シル、佛國領事ブランセー、朝鮮政府に雇聘せられ居るゼネラル、リセンドル、ゼネラル、ダイ、技師ミウレンス、テット、及サバチン、其他宣教師アンダーウード、アッペンゼー、ラー等重なる會員たり、朝鮮人中には朴泳孝派と稱せられたる徐光範、徐載弼、李完用、李采淵等は之に參會して政治運動に誘引したり、王宮よりせばウエベル公使の勢力は其右翼にして、貞洞俱樂部は其左翼たり、而して其幹部るべき朴泳孝及其一派は是時已に次第變化し、朴泳孝のみ全く孤立の状態に陥りて始めて彼は王妃より敬遠せられ、排斥せられつつあるを醒覺せり、彼が此惡夢より醒め來りて其周圍を觀望したる頃には、王妃の直屬たる閔族すらも大半彼自ら引拔推舉して王宮に出入するの地位にありしを見て、彼は眞に呆然たらざるを得ざりき、彼は亡命より王宮に歸順して得意の境に在るや、奇異なる國權回復を主張して、以て日本の惡感を買ひ、其錦陵宮にして且つ新政を喜ぶや、大院君を排斥し、其

(185)

孤立に至りて始めて王妃の術中に陥りたるを知るが如き、彼は朝鮮人中に於て珍らしき愚物たるを免れず。

戰役中に於ける日本勢力は幾回の變化を受けたれども、國際政局の變化斯くなりたる以上は、嶄新奇抜、多様の改革も固より改變無きを得ず、此影響として日本の元勳井上伯の態度も自ら變化せざるを得ず、井上伯の歸朝は實に其表示なり。

日本公使の歸朝は王妃に於ては欣悅歡喜を以て迎へらる、彼は嚴格なる干渉好きなる急激なる改革者たる日本公使を送別するため、空前の大園遊會を開催し、稱して獨立紀念祭と唱へ、政府首班の大臣をして昌德宮に於て井上伯を主賓として内外人六千人を招待せり、獨立紀念祭とは妙絶なる題目なり、彼等は日本の戰役によりて朝鮮の獨立を得たるを慶祝し、併せて其感謝を井上伯に致したるを意味せるなり、然れども同時に已往の如くに日本が獨力を以て干渉せざらんことを諷刺し、井上公使が已往の如くに王宮及政府を監視せざらんことを諷したる也。

(186)

日本公使井上伯の歸國は戰役中に於ける改革を撤回せんが爲に非ず、朴泳孝及金宏集の軋轢を調停し能はざりし爲めにも非ず、大院君を雲岷宮に押し込めたるために氣安めんために非ず、王妃及大院君の爭鬪休止したるが爲にも非ず、其實は三國干涉以來露國勢力の發展は早晚漢城に於て次第顯著となるべきを豫想し、本國政府と緊要なる協議を遂ぐべき爲めなりき、而かも彼は其歸國に際して其衷心を慰めたる獨立紀念祭ありしに拘らず、朝鮮人の政治的能力と外交術の巧妙なるに深く失望の心象を感得したりしなるべく、恰かも統監政治の創業者たる統監伊藤公が其退任に際して同様の感想を自覺したりしと均しく、彼は國家の大計に相伴ふて深大の憂慮を抱いて歸國せり。

漢城に於ては一の勢力の空隙は、他の勢力の補充なり、朝鮮人は瞬間の空隙をも利用するに努力す若し彼等をして權勢の開拓に勤勉なる此心を以て、彼等の國力と民力の増進に勉勵せしめば、半島王國に驚くべき進歩と強大を來たすなるべし、井上伯の歸國は前年ウエベル公使の歸國に乗じたる大院君及袁世凱の共謀と均しく王妃及ウエベル公使の間に其力的盟約を連繫したるなり、斯くの

(187)

如き臨時的政變が其過去に於ても、其後に於ても、屢國際競争の紛局を挑發し、又朋黨の軋轢を激甚ならしめたること殆んど常態なりとす。

此瞬間なる空隙も、王妃に取りて一大空虚なり、彼は此時期を利用してウエベル公使親善の關係を益深厚ならしめ、貞洞俱樂部に對しても盛んに黨與を出入せしめれば、人心漸く日本勢力に離反し、就中朴泳孝の一派は擧げて貞洞俱樂部に投入參加せり、朴泳孝の愚なる今更ら王妃の狡獪を憤み、自己の孤勢を挽回せんと企てたるも彼の命令に服従し、彼の企圖に參與するものは僅かに李圭完、禹範善等數三子に過ぎざりき、彼は王宮の守衛たる訓練隊第一大隊を以て王宮を壓迫し、政敵を倒さんと企てたりしも之を保護すべき日本勢力は、屢彼等の演劇的政變に利用せらるるを爲さざるが故に、彼は煩悶の末日本有志の聲援を利用して此企謀を成就せしめんとしたりき、而かも王宮の警眼は早くも看破し、却つて王妃によりて機先を制せられ、彼は不軌罪を以て再度の亡命に走るの已無きに至りぬ、王妃は彼を驅逐したるのみならず、名を城内の公安に借り、各國使節に向つて共同保護の前提として外兵の入城を求めんとはせり、驚く可きは彼の

外交術なり、彼は日本公使の偉大なる勢力の空虚に乗じて、朴泳孝を放逐したるのみならず、朴泳孝不軌の企謀を過大に吹聴して、各國の利害を以て日本勢力を制肘せしめ、更に進んで列國共同保護の下に朝鮮の獨立を保證せしめんとせり。若しウエベルにして此計劃に賛同せしめ、ウエベルをして計劃の主謀たらしめば、朝鮮の運命は或は此方法によりて指導せられしならん、而かも當時露國の極東政策は進取を方針し、半島を以てバルカン半島と均しく列強互制の下に置くを欲せず、進んで獨力南下の侵略を企圖したりしを以て王妃の共同保護は貞洞俱樂部の空想として終りぬ。

朴泳孝の亡命は四面皆冷笑を以て送れり、而して漢城政府に現れたる二個の新事實あり、其一は各國黨の勢力増大となりしとなり、其一は金宏集派の出勤したることなり、是れより先き金宏集は朴泳孝によりて排斥せられて失意の境ありしが、朴泳孝不軌の説により國王の命によりて重ねて政府に入り、朴泳孝に代りて政府の中樞となるべく命せられたり、彼は直に其命に従ひ、朴泳孝放逐の任に當りぬ、宮中府中を別にし、責任内閣を立てて舊弊を改めたる當時の状況は、尙ほ

且つ斯くの如くに走馬燈の如く大臣の任免黜陟履行はれ、宮府混合の弊少しも改善せられたるを見ず、戰役以來改革進歩を以て朝鮮に致したる日本の絶大な努力は、朝鮮政事家に取りては只だ彼等の政權争奪の茶番狂言に過ぎざりき。金宏集に與へられたる國王の信任は、彼を以て政務の主要地に置かんために非ず、朴泳孝を放逐せしめたる責任を負はんが爲めなりき、何處までも老獪なるは王妃なり、越を迎へ、楚を送り、恰かも娼婦の花客を送迎するが如く、彼は自己の都合のために、政治を運用す、金宏集も亦た日本公使に辯明のため、尙ほ存残せる日本勢力に申譯のために用ゐられたり、金宏集は朝鮮人中學識あり、剛直果斷、朴泳孝の比に非ず、而かも形勢が如何に變化すればとてウエベルの下に走り、貞洞俱樂部に参加するが如き人物に非ず、其経歴と性格は群多の政客を統率して内閣の首班に當るべき人材なり、而かも其系統よりせば王妃の下に立つよりは大院君と近親なり、朴泳孝を倒すの爲めに彼は今ま政堂に立つに至りしも、王妃を去りて大院君に近けば其位置危ふく、大院君を棄て王妃に従へば尸位素餐の位を保つに過ぎず、況んや王妃直系の黨與は悉く去りて外國使節と外國人の下に

在り、彼も亦た願みて其無力なるに嘆息せざるを得ざりき。

井上伯は暫らくにして歸任せり、伯の齎らし來れる日本政府の方略は之を前日に比して一轉したるを覺ゆ、蓋し日本の地位然らざるを得ざりき。

井上伯は歸來朴泳孝の亡命も、不軌罪も全く措いて議せざりき、ウエベルの態度も、貞洞俱樂部の存在も全く評論せざりき、彼は専ら王妃の歡心を求め、王妃の勢力を憐憫し王室の藩屏たる外戚及貴族の名譽と勢力を興すべきを勸告したるまでなり、數月前に於ては王妃は日本公使の歡心を買ふを以て自己勢力の最大便法としたり、數月後に於ては日本公使は王妃の歡心を得るを以て日本勢力の最善手段としたるなり、國際干渉の變遷、世界政局の推移、東方に於ける列強利害の變化の影響とは云い乍ら、絶大の戦火を以て占有したる日本帝國の政策及勢力の消長も茲に至りて激變なりと謂ふべし、強大勢力の消長と相呼應して盛衰する朝鮮の政況よりせば、此の如き結末が鮮血革命、クーデターを以て屢其争鬪を代表するあるは免れざることも也。

日本公使の歸任を待つて政權を回復せんと期待したる大院君の失望は甚し

かりき、而かも井上伯は幾くも無くして辭任の旨を傳へ、後任者として三浦梧樓を紹介して去りぬ、其去るに際して井上伯の跡を追うて閔族の子弟は日本留學として、又將來の王室藩屏の任を盡すため日本に留學せり、日本よりせば王妃の排日政策を拘制する外交的典物なりしならんも王妃よりせば日本勢力の退守を證明したる裏書なりき。

是に至りて日本勢力に縁故あり、信念あり、庇護あるものは全く其首領を喪失して稍變形したる舊時代に復活したるなり、只だ僅かに殘されたる金宏集も亦た兩端の一端にも立つ能はざる形勢となりぬ、日本軍隊によりて守衛したる王宮守兵は王妃を守る平壤隊と更替せり、日本人と近親なるものは漸く官職を奪はれたり、日本より、聘用したる顧問は或は去り或は存するも俸酬のみを受け居るのみ之に反して貞洞俱樂部は非常の人氣を以て盛況となれり、ウエベル公使は隠然外交團の覇權を握れり、甚しきは露國軍隊によりて教練すべしと説くものさへあり、日本公使館は寂寞として人の往來稀なり、續經せる三浦梧樓は公使館を以て寺院と心得へ、亦形勢の傾くを知らざるもの如く粧へり、彼は文物

を好み形式を愛し、熱情に富める井上伯と相對照して、好個の外交官なりき、彼の冷靜は凡べての王宮政事家をして油断ならしめたり。

王妃の權勢隆々として天日の如く昇るのみ、井上伯最後に歸任し王妃に謁するや、妃曰く、我閔族は曾てより日本親善の唱導者にして又實行者なり、日本と和好を結ぶ可く最初に主張したるも我閔族なりと彼の口舌は密より甘き味あり、彼は二十年前に於ける事實を記憶し、日本の元勳をして王妃黨たらしめんとせり、惜いかな此女性にして髣髴あらしめば、彼は世界の強大をして全く迷宮に陥らしむるの術數を行ひしならん、而して彼は遂に此術中に自ら陥りて亡滅せり。

井上伯公使の任を辭じて漢城を去らんとするに際し、伯は朝鮮政事家が自己政權の爭奪の爲めに、屢過激なる政變を容易に發生せしむるを深く憂と爲し、王妃及大院君の間に於て湮滅す可らざる橋梁の存在を撤去せしめんが爲めに、彼は朝鮮政事家に向つて調和共力を勸奨して已まざりき、李竣鎔を放囚して喬桐島より招き、閔泳駿を特放して清國より歸還せしめたるが如きは、其一例なり、井上伯の此周旋は大院君及王妃に對して未曾有の好感を興へたりと稱せられた

り、而して斯くの如き好感も、井上伯の誠意も、久しからずして消滅し、幾月ならざるに半島の王宮は空前絶後の悲劇を以て包まるるに至れり、遂に鮮血を以て大院君及王妃の狂闘を發生したるは、抑も亦た朝鮮の運命なるかな。

### 孔德里の謫居

東學の教徒を煽動して王妃及其黨與を絶滅せんと企てたりしは大院君の目的なり、之が爲めに彼は第一次攝政時代よりも、高大なる權威を得べき抱負を懷きしや明かなり、已む無くんば清國軍隊の保護によりて王宮の變革を企圖したり、若し當時の形勢をして大院君の胸算の如く成功せしめば、彼の政治は假令近世的文明政策と相距る遠きにせよ、亦彼の外交は列國の利害を均制して巧みに之を操縦し能はざるにせよ、一個の方針ある、系統ある趣義ある統治を行ひしならん、而かも世界の大部分は半島の英雄によりて支配せられず、世界近世的政治は孤立したる衰區を制限せず、亞細亞に於ける列強の勢力發展は朝鮮半島に超越的行動の自由を許さず、故に彼は一旦意外の政變と意外の好奇に驅られて王妃

及其黨與を壓迫したりしも、是れ一時の出来事に過ぎざりき。

彼は奇珍なる新法と不格好なる改革が雨の如くに濫發せるを見て不快ならざるを得ず、國王は彼を迎へて國太公の大權を興へたるも其側面に於て王妃の安坐せるを見て不平ならざるを得ず、不満足なる事件は續々として彼の眼前に發生しぬ、朴泳孝の如き凡庸なる一公子が攝政者の如く大權を帶有せるかの如く舉動せるを見ても彼に取りては不平の種なり、況んや彼を擁して政變の先頭に立てたる日本が一變して王妃と握手せんとするを甚しく憤りぬ、其再變して王妃の勢力を庇護するに至りて、彼は遂に滿腔の不平を忍耐すること能はずして雲峴宮に歸り至れり。

然れども彼は口舌の外交術の上に立つものに非ず、政權を獲るために屈從と耻辱をも満足するものに非ず、此一事に至りて彼は尋常の朝鮮人よりも大なる處あり、若し彼に教ゆるに自國の國民を強大に導く崇高なる理想と、自國の位置を安全なる大勢に従ふ世界的眼孔を以てせば、彼は朝鮮國民に國民的事業の新紀念を作りしならんに、惜いかな彼は尙ほ鎖國時代の朝鮮人を代表し、彼の行動

の雄拔剛果一世を聳動するの大氣象あるに拘らず、時勢と背反し世界の大勢と分離し、進歩文明と反立するが爲めに、屢政權を動かすの機會と立場を有するに似ず、屢落魄失意の逆境に陥るに至れり。

彼は朴泳孝と王妃を惡むの餘、刺客を放つて金鶴羽を暗殺したり、其罪跡の顯然たるに及むで李峻鎔の元凶を糺明せらるるや、夫人閔氏をして王宮に追りて死刑を止めしめたり、李峻鎔喬桐島より放還せられて金宏集稍勢力を回復するや、機會來れりと爲し、一舉して王妃を倒さんと謀れり、而かも事皆な齟齬して煩悶の情遣る處無く雲峴宮より孔德里我笑亭に去れり。

我笑亭は城外一里漢江の濱孔德里に在り、白蓮山脉南下して江畔に盡く處、起伏せる丘陵松林參差たり、老樹路を夾むで平坦なる大路麻浦街より分れて直に我笑亭に行くべし、麻浦西江一帶の水村西南に廻り、漢水緩く縈くり、帆影去來し、鷓鴣狗吠高く、人事を終へて此處に閑居せば、人生自ら高潔也、靜閑也、彼は六十翁にして權勢の大を忘る能はず、今や大不平を懷にし、怒れる猛獸の讐敵を索むるが如くにして我笑亭に入りぬ。

雲峴宮より孔德里に去れる猛獸は未だ讐敵を索め得ずして臥せり、漢城の王宮に於ては一大低氣壓の流去したるなり、王妃に取りては大なる安眠期を得たるなり、彼は其晨に於て水村の漁歌を聞き其夕に於て暮砧の急なるを耳にして、黃山谷の詩集を讀み、又十年前の遠遊を追回して蘭花を描いて消閑せり、時々此門を叩くものあれば是れ風雲を呼び政變を相手とせる策士なり、彼の野心も休せざるなり。

王宮よりは我笑亭保護として三十名の巡檢を送りぬ、是れ我笑亭に眠れる猛獸の睡中より醒め起きるを制せんか爲めなり、政變を好む謀士等の來訪を誰何せんが爲めなり、大院君をして茲處に牢囚せんが爲めなり、利害相闘ひ、愛憎相戦ひ、互に極端に至らざれば休止せず、王妃の此監視は猛獸をして寧ろ讐敵を索めしめたる飢餌とならしめたりき。

野心と復讐は大院君の生命なり、王宮にして彼を再び動かすこと無からしめんと欲せば、三十名の巡檢、三百名の守兵と雖も、彼の自由を奪ふこと能はざるべし、往年王妃其族閥を引援するや、彼快々として自邸に還へり、楊州より徳山に遊

ひ、又石坡山莊より我笑亭の間に往來し、殆んど十年にして壬午の變ありて、彼も亦た第二次攝政の位に上りぬ、清國に拘送せられ保定に留る四年、雲峴宮に閑居すること殆十年にして日清の戦役起る、彼亦た政變に際會して第三次の攝政に就かんとして自ら自邸に退居す、今や形勢全く非なり、彼は人生の長壽を保ち、四面王妃の敵手によりて監視せらる。

彼は六十年間の生活中に於て、又三十年間の長き政事生涯を追回し、祖宗の遺業を恢宏にし、將さに朋黨殘滅の爲めに消えなるとしたる王業を中興したる當年の功名に對し深く浩嘆に堪えざるもの如く、而かも未だ曾て受けざる侮辱と壓迫と貧困と戦ひつつ、彼は今日の苦境を脱するの信念を以て、其愛孫李垓鎔の身上に安全を得んことを願ひ、若し王朝の血統を繼承し得るが如き好機會來らんには、彼は自己を以てしても重圍の内より脱却すべく期したり、彼は政權の争闘より一步を超越し、最早長久の戦闘に疲勞し、只だ雲峴宮の血統者を得ば、彼は幽冥に安眠すべく感懷せり。

最後の大院君及最後の王妃

内は歴代の黨禍を鎮め、外は鎖國攘夷の志を遂げて、我の外に權勢無く、強大無しと誇りし三十年前の大院君は、今ま寂然たる孔德里に在り、而かも出入を誰何せられ往來を拘制せられたる囚人同様の境遇に在り、古より、盛衰消長は世の習とは云ひ乍ら其子を王とせる國太公として憐むべき境涯なりと謂ふべし、

彼は一年有餘の間に於て、急激なる改革政治を見て以爲らく、是れ輕薄なる日本黨が日本勢力に媚ふる有害なる政治なりと、故に彼は所謂文明政治に愚弄せられんよりは寧ろ高く處して雲峴宮に安坐すべしと想へり、彼は亦た白面の書生朴泳孝等と相對して國事を議するを以て自己の本面目を辱しむるものとして敢て之を一笑に闕却せんと想へり、而かも白面の書生等に愚弄せられて愛孫の危うき運命に傾かんとするに當りて甚しく憤り且つ驚愕せり、彼は如何なる政敵によりて包圍せらるることあるも、決して其一身を拘壓せらるるが如き事あるべき筈なしと信じたりき、然るに王妃の勢力は舊時に回復せらるるのみならず、

ならず、國土を開放して交はる世界の強大は悉く王妃の親友となり、甚しきは日本公使井上伯すらも王妃の擁護者となり、外族閔氏の子弟は日本の良友として遊學するもの輩出したるを見て彼は愈自己の勢力を發揮すべき機會なしと疑ひ、異常の煩悶を起し、此境遇を脱すべく決心したり、

彼は重ねて鎖國攘夷を行はんが爲めに決意したるに非ず、若しくは國太公の權威を振はんが爲めに決心したるに非ず、吾人は是時に於ける大院君の心事を斯く判断せり、

彼は他の朝鮮人と均しく眼前の利害に敏捷にして國家百年の大計を謀り、永遠なる國利民福の基礎を作くと云ふ高大なる信念あるに非ずと雖も、彼が享けたる血統と、彼が爲したる功業は、李氏王朝の命脈を永く保つべき最大の責任あることを自覺しありしことは眞實なり、且つや大院君の性情は他の朝鮮人と均しく權變に富み機略に長じたりと雖も、彼が一生の異彩として放ちたる各般の企劃も一に其峻刻にして熱烈なる感情によりて極端なる斷行を爲し得たることなり、彼は孔德里幽囚中に於て非常なる決心を爲したりき、



是より先き井上伯去りて後漢城の形勢は日々變化を來たしぬ、日本の勢力は王妃の權勢と反比例を爲して墜落せり、王宮に於ける露公使の勢力は太陽の如く輝やき露國はツエベルによりて半島王國を獨力以て保護するかの如くに尊重せらるるに至り、貞洞俱樂部は別個に大勢力を發揚し、日本の警告と補助によりて改革せられたる諸政は殆んど中止せられ、日本公使と親善なりしものは次第は遞免せられたり、恰かも漢城外交團は王妃に向つて日本の無勢力なるを證明したるを以て、王妃は低落せる物品を高價に買収するの無益なるを今更ら了解せるが如くに、日本によりて忠告せられたる改善の政務も、王宮に於ては冷笑熱罵の下に葬り去られ、日本によりて訓練せられたる軍隊及警察も危險物として解散せられんとし、一年前に於て喪家の狗よりも甚しく零落せる王妃が今や強猛威嚴ある主人公と變化し、日本勢力の排斥を實行したりしかば、沈黙を以て公使の本面目と吹聴したる日本公使三浦梧樓の感覺を刺戟して已まざるに至りぬ。

三浦公使は曾て外交官たりしことも無き、武骨一片の人物なり、彼は武官より

退職してより、佛道に歸依したるのみ、故に世話好きにして如何なる劇務をも細大干興せざれば腹の虫承知せざる井上伯の後任としては恰かも急湍の激流を下りて平靜なる江水に來るが如く、漢城の外交團も殆んど相手とせず、亦た王宮よりも凡庸なる無能公使として閑却したり、偶彼王宮に參内して唇を開いて奏上すれば曰く、本公使は佛を好み經を寫し、經を讀むと、斯くの如き公使は王妃の眼中に於て一笑に付し去りたるならん、一笑に付し去りたる故に、日本勢力の排斥も容易に企てられ、亦速急に實行せられたるなり。

大院君をして孔德里より起つて、其終生の政敵を倒すべく決意したるは、實に此形勢に對する瞬間の決心なりき、三浦公使が沈黙を破りて大院君の參内を擁護したるも亦た瞬間の決心なりしが如し、侮辱を洗ふの決心は遂に三浦公使をして國家の訓令を待つ能はずして行動せしめ、亦大院君をして内外の形勢を測るに至らざらしめたり。

人誰れか順逆を知らざらんや、而かも甚しき侮辱を受くるに至れば順逆と得失とは問ふ處に非ず、況んや一國の大父にして謫囚を受くるに於ては發して王

母慘死の變あるに至らしむ、昔者燕山王其大妃を逐うて虐待す、時人遂に大妃のために燕山王を殺害し殺害したる臣僚皆名節として表忠せらる、大院君の憤悲は終に沈黙なる日本公使との間に於て政變の黙約を成立たしめたり。

當時日本公使と大院君との間に於て黙契したる條件なるものを知らずとも、日本公使は王妃によりて破壊せられつつある最近改善の回復に在り、半島王國が清國の藩屬より脱して自主獨立の邦土となれるに至りしは、實に日清戰役の恩惠なり、王宮は如何なる口實と理由あるにせよ、此善隣の好誼と恩惠に對して尊重すべき義務あり、又破壊すべからざるの誓約あり、故に其破壊行為の責を問ふことは三浦公使が本國政府の訓令を待たずして大院君の參内を庇護したる理由なり、彼は國際の辭令よりも、本國の形勢よりも、日韓關係の道德的權威は當然王妃の如き破壊者を討滅するの權利ありと信じたるなり、彼は外交官として餘りに自國の利益のみを尊重するために、彼は自國の周圍に存在せる國際の關係を考慮せざりき。

王妃の日本勢力排斥は急轉直下の勢を以て行はれたり、而かも日本黨と稱せ

る朝鮮政事家は盛んに排斥の甚しきを告白し、彼等は自己の失意と迫害を免れんが爲めに、日本公使に告ぐるに、排日行動の激甚なるを以てしたり、當時王妃の行動は日本勢力の排斥を斷行したるに相違なかりしも、彼等が哀訴するが如く又彼等の注進せるが如く、日本勢力の全部を破壊したるには非ざりき、漢城に於ける政事季節の常態として極端なる風流、激甚なる利害の衝突が恰かも眼下に急迫するの光景を呈することあり、而かも斯る機會を利用せる朝鮮政事家の極端なる行動は、屢意外の外交事件を誘發するを常とせり、當時に於ける排日行動も亦た斯くの如くにして行はれ、又十月八日事件も斯くの如くに發生したり。

蓋し井上伯再度の來韓に際して王妃懷柔の方針を専らとし、閔族薦戸の方略は、日本勢力の威信を保つ手段としては頗る惡結果を發生したり、王宮に於ける判斷は井上伯の方略を見て日本勢力失墜の弱點を明白にしたり、日本は獨力を以て半島を保護し得ざるの實狀に立ち、今や日本勢力を對手として何事も進行し能はざるの實境に在りと看破したるが故に、井上伯の歸國と新公使の沈黙は、確かに日本勢力を排斥し得べき時期なりとして着手したるなり、若し日本政

府にして戰役に於ける多大の努力と扶植の効果を保持せんと欲せば、日本は朝鮮と利害關係の深大なる列強を相手として獨力以て朝鮮保護の任に當るべき妥協を爲さざる可らず、然らずして反覆常無く表裏定り無き朝鮮政事家を信じて幾何の體面を保ち、幾何の勢力を保留せんと企てたりしは日本政府の誤なりとせざるを得ず。

(204)

露國は因より三國干涉の効驗に乗じて極東膨脹の企圖を急きつつありたり、半島に於ける親善の關係を利用して軍事上及經濟上特種の利益を獲得せんとはしたれども、名譽ある日本の戰捷に全力を傾けて破壊を企つる程には至らざりき、従つて朝鮮に於ける日本勢力が或程度に存在することは露國の敢て反對せんとしたることに非ず、歴史的古今の關係は説くまでも無く、日本民族の繁殖せる好個の殖民地たることは露國及世界の認むる處なるが故に、半島より全然日本勢力を驅逐せんなどは、事實露國の實力に於て不可能なるのみならず、其代表者たるウエベルと雖も然かく行動したるに非ずと雖も、ウエベルも亦た朝鮮政事家に利用せられ、ウエベルの親善露國の強大は王妃をして利用せらるること

(205)

と多く、之が爲めに一面に於ては排日行動を急ならしめたり、貞洞俱樂部の如きも必竟二三外人の好奇的功名心と利益とによりて連結せられたる團體に過ぎざりしも、多數の朝鮮政事家は自ら推度して、自ら判断して列強皆な日本勢力の失墜に助力すべしと爲し、滔々として各國勢力を綜合して以て彼等の政權運動に利用したるなり。

當時漢城外交團の位置は極めて幼稚なりき、露國はウエベルを以て辨理公使の資格を與へたりしのみにて、其他英國は總領事として外交事務を執らしめ、佛米獨皆な重要な資格を有せず、極めて低き地位ある外交官に過ぎざりき、而かも漢城の政界に於ては然らず、恰かも列國は日清戰役日本勢力の過大なるを制止せしめんが爲めに重大なる外交關係を保有し、樞要なる外交官を送りて之が任務を遂行すべく、共同的に計劃せられたるかの如くに反響したるは何ぞや、是れ皆な朝鮮政事家が古昔より今に至るまで屢繰り返へしたる傳來的外交手腕に外ならず。

斯る狀況によりて行はれたる日本勢力の排斥行動中尤も重大に日本公使の

感情を動かし、日本の新勢力の下に膨脹したる日本國民の感情を挑發したりしは、日本軍隊によりて訓練せる軍隊の解散せられんとしたることなり、又日本が尤も善良なりと信じ、尤も好意を表したりと信じたる改善の政務を休止して之を冷笑の下に破棄したることなり、更に甚しきは日本と親善なる官吏の重なるものを暗殺し、刑戮せんとしたることなり、斯く排斥せられるに至りて、日本公使は之を防止する手段を盡すに決意したるは實に其結果と其手段の不穩當なるにせよ、日本の名譽を尊重し、其勢力を代表せる公使の措置として首肯せざる可らず、其行動が猛烈激急の如くありしと雖も、其目的とする處は自國の勢力を破壊せんとせる行動を防止せんとしたる迄なりき、日本は毫も自ら進んで獨立を侵害し、朝鮮の平和を攪亂せんとしたるに非ず、其獨立を保證せる改善の政務、其平和を維持せる善良なる交誼の存在を保持せんが爲めに大院君の參内と執政を補助すべく、決意したるなり、所謂十月八日事變は其決意の出現に外ならずと雖も、該事變の内容、發生の狀態に就ては實に朝鮮國內に於ける二大政事家の争鬭的狀態に過ぎず、則ち該事件の中心たる王妃の殺害の如きは大院君の初より

企圖せる手段に外ならざるなり。  
政權競争の結果として、若しも其競争が王宮に於て行はれたる時に於て、國王若しくは國王の家族血統者が殺害せられたるの例は李朝に於ても少しとせず、況んや王妃と大院君の政權争鬭は前後三十年間繼續したる猛烈なる争鬭なり、其智略前朝未だ曾て見ざる女傑たる王妃と、剛氣峻嚴空前の偉人たる大院君の争權狀態に於て十月八日事件の發生したるが如きは少しも奇異なりとするに足らず、見るべし壬午の兵亂に際して多數の亂民は一宮女を王妃と誤り、之を宣化門前に曳き來り、公衆の前に於て殺害せんとしたるに非ずや、大院君は行衛不明なる王妃を以て尸骸として假葬を舉行したるに非ずや、然らば十月八日事變が王妃の殺害事件を以て中心とせられたるが故に、王妃殺害が日本公使の目的なりと判断したるは大なる誤謬なりとす、又た日本國民を以て猛惡なる人類の敵と叫びたりしが如きは甚しき見當違なり。

朝鮮に於ける政權狀態によりて推測するも、大院君が王妃を殺害したるは通常的事件なりと謂はざる可らず、況んや孔德里に於ける大院君の境遇よりして

驚く可き決意を以て王宮に參内したる以上は、世界に於て餘り比例無き事變を發生したるは毫も怪しむるに足らず、三浦公使は大院君の參内に有力なる助力を與ふることを約したり、日本勢力に信頼したるものは擧げて大院君を推して王宮の改革を計るべく一致せり、彼等は自己の新運命を得んが爲めに、日本公使と大院君の間に連絡を作り、二者の結合を作成し、二者の勢力を合力して政變を實行すべく促進せり、蓋し此企謀は二者俱に防守的位置に立ちたるものにして其企謀をして豫期よりも早急に舉行したりしは此中間者促進引導の力によらずんばあらず。

日本公使は此企謀の實行に就ては政府の訓令を得んと欲し、更らに熟議を要するため、其部下をして東京政府に參向せしめたりき、而かも機會は直ちに追りしため、東京政府は何等の方略を議するに先つて發動しぬ、大院君は此企謀に就て二個の條件を附したりき、王宮に無事參内し得るに至れば王妃を處するの責は單獨に負ふこと其一也、愛孫李竣鎔をして政務に干與せしむること其二也、彼は最早自ら權勢を左右する功名を放棄したるなり、彼は日本勢力の下に於て

は李竣鎔の生長と功名を獲んことの熱望を有したるのみ。

大院君起つて政變の局に當るべく決意したる事も、又日本公使が大院君の行動を援助すべく決心したりしことも、事變前數日のことなりき、此中間に在りて劃策したる重なるものは李周會李斗璜禹範善等なりき、彼等日本公使に向つて速かに決行せざれば日本勢力の全部を喪失すべしとなし、大院君に向つては直に斷行せざれば雲岬宮の生命は殲滅すべしと慫慂したりき、彼等の奔走と劃策は成功し、事件は十月八日未明を以て決行せられたり。

該事件は餘りに急激に實行せられたるが故に、王宮に於ては殆んど手を拱して大院君派の強力參内を防止するを得ざりき、當時の光景を叙したる吾人の手記に曰く、一帯長蛇の漢水洋洋として社南に至りて擴がり、龍山麻浦に至りて三角洲を爲す、北漢山脈西に走りて仁王山となり、一脈伏して又起る白蓮山なり、山の西麓松樹丘を掩ひ、楊柳道を挟み、塞村荒邑其の間に散在す、鷄鳴狗吠の聲を聞くべし、征客若し杖を曳て南大門を過ぎ町餘にして青松白砂の丘原を一陣にし、將に麻浦に至らんとして西南の方丘溪野灣樹影垂らんとし、行々畫様の好趣

致を擲すことあるべし、此間一莊あり、人煙遠く離れ時々草荊る韓少年の樹蔭に日の閑なるを樂みつゝあり、此處稱して孔德里と云ふ、半島の老英雄茲にあり、彼に取りて三千里外の配所の旅なれども、半島の政權者は狗吠の一聲すら虎嘯狼鳴の如く聞ゆなり、古來英雄社稷興亡の際に處して配所の月を眺めたるも實にかくありけんかし。

孔德里は大院君の別莊にして、彼が政權失敗の第一期に於て臥したる舊邸なり、孔德の名は孔子の德なりとの義なりとも云へり、都近しと雖も丘陵庭園となり城外の一幽溪也、朴泳孝昨秋暫く茲に足を駐め、大院君今亦配所の生涯を送る、都は事毎にうるさしとは老雄が校洞の雲峴邸に於て人に語りしところなり、清國保定より歸つて十餘年の間不平失望落々として此邸に送りしが、今春去りて孔德里に入るや校洞の邸草門前に長へに秋風軒下に吹き、終日一客の來往するものなし、偶暗黒の微閃幽冥の石火相和して李峻鎔喬桐島より配所を放たれて孔德里に入りてより、政權者の嫉妬は此里を斷つこと能はず、老英雄と彼とは金總理と脈を同ふせりと稱し、江原鐵原の匪衆は彼等の密謀なりと言はしめ、彼等

は八道に秘密の命令を下しつゝありと風聞せしめ、孔德里の暗夜には草徑たどるの政客ありと聲言せしめ、彼の爲め暗殺を行はんとするの刺客は城内にありと唱へしめ、天下をして孔德里は疑獄の源泉と信せしめ、蛇を打たば死までに撃たしめんとするものあり、余輩孔德里の邸内が今やまた不運の風雲中に取り圍まれんとしつゝあるを見て深く老英雄の日月を悲ますんばあらず。

國王陛下は賢明の主なり、偶時に政事の内事に立ち障り、國政の妨礙を宮中より滲出せるもの多くは寵臣嬖兒の爲すものあり。

陛下近頃孔德里に憂色あり、廷臣に下言せらるゝに曰く大院君は雲峴宮邸に還らしめざる可らず、孔德里にはよき生涯はなしと、雲峴宮に還り探偵の間に生活し敵國の中に老生を送るは大院君の好むところに非ず、雲峴宮邸は老英雄に取りてナポレオン帝のセントヘレナ島なり、英人を殺さゞれば涉ること叶はず、老雄今や校洞のヘンナ島に還らしめんとしつゝあり。

而して大院君の窮貧憐むべきものあり、固より貧と窮とは大院君少年の節會つて市井に於て知る、七十年の生涯中前半期十年間を除くの外彼に取りて蘭書

を賣りて産を得るも窮中の商事なりとぞ聞へたる。

今年我政府三百萬圓を貸すや、其内三十萬圓王室費となり四萬圓王族費たり、大院君も其の典に預るべきなり、而して今に至るまで此典を得ることなきは亦政權の變後是非もなしと憐むべき事ならずや、去れば大院君の貧や日に窮し堂々一國の王父の身を以て衣食の嘆あらしむ、吾人は是にて筆を止むべし、今後の孔德里は壯絶の詩趣光景に記せざる可らざるものあればなり。

是より先き井上伯歸りてより韓廷形勢の全く一變し、政權を宮中に收め日本の亦た爲すなきことを察して深く露公使に倚り、十月三日に至りて日本に親交あるもの悉く排斥せられんとする議宮中に起り、大院君異志ありと稱して孔德里の警戒嚴重を極む、亦た一臂の力を閔派の爲めに盡したる農商工部大臣金嘉鎮も免せられ、芝罘より歸來せし閔泳駿は六日歸來匆々隠然露公使及王妃の間に斡旋するところあり、此の日亦た訓練隊を解散し武器を押收し、露國黨樹立の準備に取り急がり七日に至り宮中より軍部大臣安翺壽を使者として日本公使館に遣はし、訓練隊解放の議を計らしむ、而して宮中内部の動靜は着々歩を進め

金宏集以下十名餘を暗殺しクーデターを行はんとするあり、危雲密として迫り七日に至りて日本及其親交ある朝鮮人士は殆んど重圍の中に陥り、彼我を制するか我彼を制するか機一髪の間在り、是に於て三浦公使勢已に迫れるを見三日以來謀議せし宮中の奸徒排斥の企圖を實行せんとす、私かに急電を發して仁川に下れる岡本柳之助を呼び孔德里に向つて老雄の決心を促がし、一面には日本諸有志を集め八日の曉天を期して景福宮に入りて老雄を擁し訓練隊に従ひ王側の姦邪を拂ふことに盡力すべきことを求めたり、八日事變に關しては世異議なきに非ずと雖も、當時吾人同志者が世に發來せしもの當時の彼勢を詳述せしを以て之を轉載す。

九月下旬より上旬に亘りて宮中より政府に向ての攻撃は前述の如く實に猛烈を極め、恰も洪水の堤防を壊決して市邑田宅を押流さんとする勢なれば、日韓人共に非常の恐懼を懷き其の勢の到る處如何と憂慮せり、宮中が斯く傍若無人の暴斷に出でたる今日までも一の疑問に屬すと雖も、竊に探り得たる所によれば同年七月上旬朴泳孝氏を處罰せんとしたる際既に宮中と露公使と

の間に内約出来たりと聞けり、右内約の起りは閔妃が何卒して日本の干渉を絶ち政權を宮中に收復し、閔を採用せんことを熱望し其意を近臣に洩されたるに近臣等李夏榮、李學均、玄興澤、李範晉、李允用等之を露米兩國公使に謀りしに、露公使よりリゼンドル氏を以て左の意見を内奏したるに在りといふ。

一、閔妃と閔族とは一體なり、而して閔族と日本とは歴史上決して相容れざる事。

二、日韓兩國は隣國と稱するも、其の間に大海を隔てあれば露韓兩國の接壤相隣するに若かず、故に地形上より之を觀るときは日本より露國に親むべき事。

三、露國は世界の最強國にして、日本の如き之と比較するに足らず、右は廣く例證を擧ぐるまでもなく、本春遼東半島還附一條に就て其の事實を確むるを得べし。

四、露國は決して朝鮮の獨立を害せず、又内政に干渉するを好まず、故に露國に依頼して其の保護を仰ぐときは極めて安全にして、且つ君權は舊に依り充分に施行し得べし。

右は一二朝鮮人の密報に屬すと雖も、其後閔妃は常に人に向て日本と閔氏とは兩立すべきものに非ず、縦令土地の若干を他國に失ふとも日本の仇を復せざる可らず。〇〇國は世界の強國にして日本の比に非ず、且つ君權を保護すとの約あれば之れに依頼すべし」と云はれたる由屢々漏聞えたる程なれば、露公使の密奏は蓋し事實なりと、信せらる。

然るに井上公使の再渡の爲め其の計畫を中止したるに、今は同公使既に歸國の途に上りたれば、昨年来隠忍したる、宮中即ち閔妃の鬱憤一時に迸發し、事機を失はずして其の目的を達せんとしたるものと推察せられたり。

是より先き韓人の時世を慷慨し、國家の危亡を訴ふる者漸く多し、皆曰く宮中の意は先づ訓練隊を解散して政府の爪牙を奪ひ、金總理以下を殺害して純然たる閔族政府を再立せんとするに在り、又曰く宮中には既に結托し露國が朝鮮の君權を保護する代りに、威鏡道の一港を露國に貸すの密約を爲せりと、而して彼等の意之を匡濟する唯一手段として大院君の入閣を望むに在り、其人々を概別すれば、現政府派朴泳孝、其他宮中派外の人々にして、其中李周會氏



等熱心に之を主張し大院君と氣脈を通じ密かに運動したり。於是杉村岡本の兩氏は大院君の輕舉禍に罹らんことを危み、九月三十日頃竊に鈴木順見氏を孔德里の別荘に派して之を探らしめたるに、同君は國家の危亡に瀕するを慨し奮激自ら禁する能はざる様子に見受けたるも、敢て自ら起たんとする色なき旨歸報せり。後數日を経て大院君より堀口九萬一氏を経て國家の危亡を述べ是非とも三浦公使に面會したき旨を傳言せり。其言鑿々時弊に切當せりと云ふ。依て三浦公使は大院君を援助して時弊を匡濟して、朝鮮の宗社を扶護し、且日本の威信を維持する一義に付先づ杉村氏と謀議を定め、十月十三日夜岡本氏を招て共に謀り陽に歸國の告別と稱して岡本氏を孔德里に派して先づ大院君の決心を確め、同君果して出力匡濟せんと欲するの意堅くば同君との約束を定めて之を援助すべしと、岡本氏は左の約案を懷にして孔德里に赴きたり、其の和譯は左の如し。

一、太公は大君主を輔翼して、専ら宮中事務の整理に任じ一切の政務には干預すべからざると、警告文の趣意を遵奉し王室の事務と國政事務と判然區別

を立つべし、宮内府の勢力を擴充して國政事務を侵蝕するが如きは斷じて爲すべからず、隨て太公は政府官員進退に容嗟すべからざるは勿論一切の政務に干預すべからざること、

二、金弘集、魚允中、金允植の三氏を首とし、其他改革派の人々を擧て要路に立たしめ専ら政務に任じ、顧問官の意見を聽き大君主の裁可を経て政事の改革を決行し、獨立の基礎を鞏固にするを期すべき事、

三、李載冕氏を宮内大臣に、金宗漢氏を同協辦に復し、宮内府の事務を擔掌せしむべきこと、

四、李竣鎔氏を三年間日本に留學せしめ、其の材器を養成すべき事、但毎年夏期に歸省差支なし、

(註)李竣鎔氏は嚮に王后陛下に對する不軌罪を以て流刑に處せられたる人なれば、大院君の入闕は世人より王后陛下に不利ならんとの疑惑を招んことを恐れ特に之を遠けたるなり、

同五日岡本氏は大院君を訪ひ夜に及んで歸れり、當時氏の語りし所に據れば、

同君は子載冕孫峻鏞の二氏と列座し、入闕の決心堅固欣然約束の同意を表し自ら筆を執て同意の旨記したりと云ふ。翌六日岡本氏は歸國の途に就くと稱し仁川に赴けり時に形勢日に切迫したるに付其朝杉村氏は金總理大臣を訪ひ、同七日朝金總理金外部の兩大臣を訪ひ其意見を叩きたるに共に國家の危亡に瀕したるを慨嘆し、此際匡濟の道は唯大院君を煩はするの一方ある旨を痛言せりと云ふ。尤も當時金總理金外部は既に辭職の決心を我が公使館に通じ來りたる由なりし、而して七日午前には宮中より軍部大臣安嗣壽を派し我が公使館に來りて訓練隊と警察官との争鬪(此争鬪は二回にして宮中より訓練隊解散の口實を作る爲め煽動したること事實なり)を口實として同夜之を解散し、并に閔泳駿を宮内府に再任せられたき旨を三浦公使に傳へたり。安氏未だ去らざるに、第二訓練隊長禹範善氏亦來館し、三浦公使に面會して危急を訴へ、且つ解散に先ちて大院君を奉じて事を擧げんとする意を示したるより公使も禍機の切迫せるを察し大院君の入闕は此時を失ふべからずとなし、直に杉村氏と謀りて同日午後其趣きを在仁川の岡本氏に報じ、即刻引返して大

院君に面會し同君をして入闕を決行せしむべき旨を通じて、其夜半岡本氏は麻浦に歸來り同地より孔德里に赴き其意を同君に致したる處同君は翌八日未明に入闕せんと決意し、遂に訓練隊に護衛せられて目的を達したり。之を内にしては宮中の團結既に成りて城壁已に築かれたり、之を外にしては露米公使の應援あり、宮中派の眼中に日本なきこと既に久し、然るに七月中旬遑然井上公使再渡の報而かも三千の大兵と共に再渡するの報に接したるより、宮中には再び危懼の心を生じ頓に運動を中止して、只管同公使の來着を待ちたりしに同公使の來るや兵卒を引率せざるのみか、全く前日と其面目を異にし敢て改革の進行を強促せず、専ら親和説を執りて啓誘を務めたりしが爲め、宮中には表面には調子を合せて我に傾向の姿を装ひたるも、閔妃の慈悍なる豈眞に我を信せんや、彼は日本人の己れを喜はざるを知れり、又閔氏と日本とは到底兩立し難きものと信せり、隨て日本公使の方針を一變せしは露國を憚りて一時の權宜に出でたるものなるを察したり、是に於て日本を制して自家の勢力を保つ唯一政策は露と親交を固くするに在りと覺悟したる

が如し、故に閔妃は表面には日本と親交を装ひながら、陰に宮中の勢力を鞏固にして、之を政府に推及せんことを務め、我忠告に應せずして、閔臣を黜陟し、僅に金宏集を有名無實の總理に復したるも、魚允中を斥けて、沈相薫を擧げ、金嘉鎮を罷めて、李範晋を以て之に代へ、李允用の警務使を復し、安調壽を軍部大臣に任じ、洪啓薫を訓練隊長に任じたる事は、財兵警の三實權を宮中派の手中に收めたる計畫にして、漸く宮中の勢力を政府に及ぼし、政府をして孤弱無援、使する自在の境遇に陥らしめたるものと謂ふべし、又不時の大赦を行ふて、閔己下諸閣並に閔派數十人の罪を赦し、且泳駿の歸國を促したるが如きは、專恣泳駿驕横、眼中日本なきの舉動にして、當時國王陛下には、竊かに近臣に向て再び閔氏跋扈の世に戻るかと云はれて、嘆息せられたりと聞きぬ、斯くて井上公使は九月十七日を以て、歸朝の途に上り、同二十一日仁川を出帆せられたり、同公使が仁川を發せられたる後、官中と我公使館との交際は次第に冷却し、一時屢々出入したる宮内官吏は一人として、我公使館の門を窺ふ者なきに至れり、而して之と同時に、宮中より政府に向て漸く攻撃を始めたなり、第一の攻撃は財

政に向て爲されたり、抑々昨年度の財政は、魚度支大臣仁尾願問官の意見を聽き、辛ふじて之を立てたるものなり、豫算に於て歳入總計四百四十六萬圓、歳出三百四十萬圓、差引剩餘金六十六萬圓あるべき筈なるに、實際に於て歳入に七十餘萬圓を減じ、歳出豫算外に於て多くは無益の舊兵を再置せし爲め、九十餘増加したるが爲め、差引五十餘萬圓の不足を生ずべき都合なればなり、故に之萬圓をも整理せんが爲め、更に改正豫算を議定したるも、宮中の反對強く、竟に國王の裁可を得る能はず、加之宮中よりは既に前年度に溯つて三ヶ月分の經費を強求し、又度支部の收入中目覺ましきものは、一の相談もなく之を王室財産に組入れ、所謂屯田驛田及紅蔘等より徴する諸税は、舉て之を王室財産となし、尙進んで造幣事業をも之を宮中に屬せしめんと計畫せられたり、右等破壞的攻撃に對して、政府は毫も抵抗する能はず、措手して破壊に任ずるの外なき有様に陥れり、第二の攻撃は、新制度に向て爲されたり、是れより先き宮中にては既に官吏任免の實權を專握し、各部判任の小吏に至るまで概ね指命に出でざるはなかりしが、其後官制に拘はらず、次を越えて進級せしめらるゝに付き、

内閣より屢々故障申立つるも聞届けられず、又詔勅法令等の天降り多くなり、初めの程は内閣に於て之を拒み或は體裁を改めて副署したるも、宮中は之に満足せず九月二十九日遂に宮内大臣の副署を以て勅令第一號内閣大臣の副署したる勅令は既に五十號以上なるに拘はらず、發布せられたり、第三の攻撃は當路の大臣に向て爲されたり、今や宮中の勢力は殆ど政府を壓倒し、其手足を緊縛して全く動く能はざるの窮境に陥らしめたるに拘らず尙之を弱めんと欲し十月に入りて金嘉鎮を罷の命吉濬を遣ぎて義州觀察使と爲せり、尙は内閣の參謀として有力なれば宮中より目指す所の燒點に立ちしなり、第四の攻撃は日本將校の訓練したる軍隊に向つて爲されたり、同軍隊は京城に二大隊八百人にして訓練隊と稱し、朝鮮第一の強兵なり、宮中には初めより之を嫌忌し、嘗て近衛兵に充てんとの奏請ありしも國王峻拒之を許されず、其後洪啓薰を以て聯隊長に任じたるも、大隊長以下固より洪の下風に立つものに非ざれば洪の任命は有名無實なり、故に宮中に於て訓練隊解散の議起りしは勢の自然なり云々とあり。

七日午後九時孔德星に至りて大院君を迎へんと欲するものは、漢城新報社に集り、直ちに光化門に至りて形勢を見んと欲するものは、巴城館に集れり、當時我勢力の扶植により有志の入韓せるもの百餘名あり、此夜半島の積衰を救はんと欲し、我帝國最初の宣言を貫かんが爲めに慨然として集れるもの六十餘名なり。

三々五々漢城新報社に集まる一群は、十時任意に出發して龍山に向ふ、陰曆二十日の巴月天心にかゝり、街巷冷寂として故都の杵聲を聞くのみ、終日雜沓を極めたる南大門市街も行客稀にして轉た有志の感懷を漏らすの私語影より影を追ふて去る、南大門を過ぎ龍山路に向ふ、偶醉漢五六に遇ふ、一官妓を携へ蹣跚放吟して來り、誰何して曰く、絡繹旅裝して何くに行か、某等笑叱して曰く、東學黨龍山に來れり我等之を撃退せんとすと、醉漢等呵々として笑ひ去る。

岡本柳之助は仁川より急歸して龍山に有志の來會を待ちつゝあり、有志一行の會するもの五六或は七八或は十餘、或は麻浦の丘徑より或は社南の江路をたどり、或は萬里倉より來り已にして六十餘を數ふ、會合の場は漢江の濱に在り、月色娑婆として照らし、漢江の蒼波社南の平郊淡霧低迷たり、江上の舟客蓬窓の下

に在りて太鼓を叩き漁歌を悲吟するあり、村老竊歩して來り此の意味ある會合を窺ふものあり、雁聲江畔の平砂に落ち、柳影は蒼茫として人影を掩ふ、階上には有志黙坐して密議するあり、階下には腕を撫し短褐劍を帯び酒を傾け肉を割き眼光炯々意氣大に昂る、六十餘の壯漢沈黙なれども激昂の氣殺伐たり微笑して大息するものあり、横臥して明日の事を談するものあり、江畔の石垣に倚りて沈思するものあり、榻上に横坐するものあり、大月を仰いて霜滿軍營を吟咏するものあり、柳樹の下にビールを傾くるものあり、暫らくにして傳令は移りぬ、勃然として起ち丘陵をたどり孔德里に至りて大院君の邸下に謁せんとす。

龍山の間道より萬里倉の西丘を横ぎり、三騎者するもの誰ぞ覆面黒衣の長軀先生誰ぞ亂髮蓬頭の若武者誰ぞ、美表寬服するもの誰ぞ、行々韓村の巷間を過ぎ憤激せる狗吠怪視せる村翁恰かも梁山泊の小英雄も斯くありけんかし、一丘を越へて前面に當りて楊柳道を夾むで幽暗たる處五六の行客あり、肅歩して前進し來る、前者之を誰何すれば今しも孔德里より來れるもの、大院君已に公等の芳志を待つこと久し、僕等をして迎へしめたるなりと、共に拉して孔德里に向ふ、長

軀紳士衆に議して靜肅動搖なからしめ、且つ三四の壯漢をして前面に急行せしむ、暫らくにして躍りて行進すれば一邸屋あり、松丘東北に流れ杉樹西南に環立す、邸内間として人聲なし、大月西に斜にして草上の露征衣を洗ふ、衆を分ちて邸の周圍に在らしむ、是れ邸裏十餘の巡檢ありて守衛せるを以て其の動靜を待たしめたるなり。

默然として門に立つあり、睨視して巡行するあり、聲なきも驛あるが如く、形勢動くも動かざるが如く、若し詩趣あるものをしてあらしめば、虫聲の聞ゆるぞ憐なれ、外門を守る十餘の巡檢は抗せずして沈黙を守りしを以て異事なくして諸有志始めて邸内に入り徒跣して邸上に至る、大院君欣然として迎へ家僕皆出で來る、岡本柳之助等有志者の聊か邸下の志に添ゆるところありて來れるを告ぐ、大院君曰く多謝々々、而して悠然大變革の迫れるを知らざるもの、如し坐談百湧、滑稽出沒、傍には撒を草じ立談、坐談、大笑私語亂雜の間に規律あり、百事自ら整ふ。

八日午前一時を過く人あり、大院君に薦む門を出づるの期至る御用意如何大

院君笑つて小童をして冠を取らしめ衣服を被さしむ、小童誤りて反對に被せんとす、大院君曰く亦た天下の變を知るか、已に衣冠を用意し了るや、大院君俄かに曰く明日の事陛下に參謁して家國の大事を奏す、此の如き常衣を以て宮中に見ゆべけんやと、然れども禮服悉雲峴宮にあり、宮は孔德里を距ること二里、今や如何ともなすべからず、暫らくして大院君曰く宮中の禮は吾能く其の罪を謝せんのみ、而して吾壽ありて屢國變に遇ふ明日の事覺悟なかるべからず、大笑して便通せり、某等來りて時已に二時を過ぐ、邸下急くに非ざれば千載の機を失はんと、是に於て日韓の有志輪を擁して門を出づ、偶愛孫李峻鎔出で來り祖公をして獨り行かしむ可らず、大院君滿面朱を迸らし訓諭して曰く汝暫らく止りて大勢を待て、ア、老雄尙ほ愛孫を思ふなり。

大院君の轎孔德里の門を出づ有志數十名之に従ふ、孔德里の柳楊交垂るの處に至り、岡本柳之助衆を集め大院君に代りて語りて曰く邸下諸君の志を多謝す、然れども今日の事只だ護衛に在り宮中に於て暴擧する勿れと衆喝采して朝鮮萬歳と呼ぶ、麻浦街路より城外の一邑峴に至りて止つて訓練隊の來るを待つ、曉

風漸く吹き揚花麻浦龍山の諸邑は冷白たる北斗の星影に眠り、落月將さに漢江を呑まんとし、鷄鳴諸々に起り狗吠東呼西應す、蕭々たる秋曉の天も多趣を極む、待つこと一時餘にして一騎あり疾驅して來り報じて曰く訓練隊道を誤つて別路に出づ、邸下急走して西大門に來れど、大院君頗る憂色あり。

疾走して西大門に至れば、白衣の隊一列銃劔を立て整然として待つは訓練隊なり、大院君の至るを見て兵士皆禮す、日本兵士も亦た誤りて別路に出で未だ來らず時に天已に明けんとす、諸面の督促矢の如し、西門の市場に來れる市民は事の意外にして、兵氣の尋常ならざるを見て大に訝るものあり、已に城門に掲出する國太公入城の文を讀むで變事起らんとすと、俄かに家に走りて狼狽するあり、大院君切りに事機の失するなきやを問ふ暫らくにして履響並々迫りて西門に來る四百の日本兵士一號令の下に整列す。

訓練隊の一部先づ進み、日本兵士亦た動き、大院君の駕亦た行き有志者之に従ひ、訓練大隊日本兵士大隊尾従し、總隊驅け足となり西門より光化門に至る廿町の間、洪浪の捲き寄せたるが如くに疾驅し去る。

光化門に至りて天已に明け、異變あるを見て市民等沓至して見る。大院君の輜已に光化門を過ぎ去り、後隊未だ入らざるに、内部衙門と城壘の小路より軍部大臣安駟壽訓練隊隊長洪啓薰手兵四十餘を率ゐりて横撃し、洪啓薰疾走して大呼して曰く、汝等入る勿れと訓練隊驚散せんとして、漸く集りて城に入る。此の紛擾の間、洪啓薰亦た殺さる。

已に光化門を經過せる一部の兵と有志者とは勤政殿康寧殿を過ぐ、一守兵の備番するものなし。大院君は暫らく勤政殿に在りて國王の允許を待つ。此の時砲聲光化門外に響き、又た東北に砲聲聞ゆ。初め兵士の一部が泰光殿を経て乾清宮に赴くの間、於てゼネラルダイは守兵六十餘名を指揮して我を砲撃したるを以て、訓練隊と日本兵とは其力之に應じ、端なく一場の戦鬪を開く。此の日固より我に戦ふの初志に非ざるも、彼已に守るの氣なくダイ等二三の洋人等は蒼皇色を失して逃げ去り、守兵服變して悉く散逸す。

進むて雍和門より入る。殿宇多く破頽し、雜艸離々として生ず。廷臣等宮中の觀を脩めざる。こと幾月、池畔に一兵卒の倒れたるある銃を枕にして死す。乾清宮の

内已に靜まり、五六の官女は變を避けて別宮に環坐し、深く幽愁を帯びて在り。髮鬢亂れ、白粉落剃し、顔色憔悴たり。長夜の宴より起きて、夢尙ほ覺めざるが如し。國王陛下は泰然床上に安在せしが、今朝來の事變を聞かせられて心を安らめ、王世子傍に在りて喞然たり。半島の風雲を一起一伏幾びか掌中に上らし、幾度か悲劇を負ひ玉へる閔妃殿下は何くに逃亡せられしか知らず、多年默泣して恨を思ふ。韓國の有志者は宮より宮に搜索せしとぞ。後人曰く、朝王妃殿下は床上より起きて變を聞き、蒼皇驚愕出づるところを知らざりしが、憐むべきかな紛擾の波濤中に投入せられ、干戈の下に倒れ、血痕殿床に迸散し、一朝の間に王樹花落ち、北岳の松濤は或は悲しむが如く、或は喜ぶが如くに吹嘯せしとぞ。

大院君は勤政殿より泰光殿に移り、變の定まるを待ちたりしが、午前八時半勅使あり、速に參内すべしと大院君則ち雍和門より入りて乾清宮に至り、國王陛下に謁見、宮中の奸臣久しく李朝の王權を僭越し、將さに大禍に至らんとす。故に太公赤誠傍視する能ずして、今ま陛下に相見ゆと、陛下亦た直ちに閣臣を招き、革政の任に當らしめらる。

日本公使三浦梧樓午前九時王宮の變事聞き參内して陛下に謁見し、國太公の參内革政の已に已む能はざるを陳ぶ、李載冕宮内大臣となり常に王側に座す、暫らくして露公使ウエベル米國公使シル等參謁を告ぐ、陛下紛擾の際なるを以て暫く謝絶せんとせらる、二公使變際なるを以て特に謁見を求む、且つ曰く日本公使已に參内せりと聞希くは陛下之を允るし玉はんことを、遂に謁して變革を激奏せんとして大院君の孫子李載冕傍に在るを見て去る。

金宏集、趙義淵、權滌鎮、金嘉鎮、寺參内して變後の政務を計る、權滌鎮警務使となり、趙義淵軍部大臣となる、李允用、李完用、沈相黨、朴定陽等生平閔妃に接近せしものは自ら畏れて宮中の微召に應せず、俞吉潯内部大臣代理となり、金宏集諸事を計る。

王妃の所在につき市民異議紛々、或は逃亡せりと云ひ、或は殺されたりと云ひ、二三日を過て決せざりき、其の日日本公使歸るや各國公使は袖を列ねて日本公使館を訪ひ來りて、日本人民が紛亂中に在りて刀を抜き劍を帯びたるもの宮中に亂入せしことを詰り、日本公使の意志を確めんとす、三浦公使平生寡言沈黙致

然として曰く、若し日本人士ありとせば余之を處するの道あり、他事に至りては日本公使の知るところに非すと、之を聞いてウエベル憤慨激昂顔色に顯はれたりと云ふ、各國公使要領を得ずして去る。

即日韓廷先づ揭文を出す曰く

近日群小墜閉聰明、斥賢用奸、維新之大業、將中道而廢、五百年之宗社、一日而危、予生于宗親之家、不忍坐視、故今欲入闕輔翼大君主、遂斥群邪、成紹維新之大業、扶持五百年之宗社、以安爾等百姓、皆安其堵、守其業、勿敢輕動、若爾百姓若兵、辨有沮我行、則必有大事矣、爾等悔無及

開國五百四年八年八日

國 太 公

内閣更迭して金宏集總理大臣となり、内部大臣には俞吉潯代理となり、度支部大臣には魚允中、法部大臣代理張博となり、學部大臣は徐光範となり、外部大臣は金元植元の如く、内閣總書は權在衡となり、警務使は權滌鎮、軍部大臣は趙義淵となり、農商工部大臣は鄭秉夏となり、大院君の一派を以て組織せらる、而して政務の多くは金宏集と俞吉潯の方寸より出づ、大院君約を守りて政務に預からず、愛孫



李峻銘は日本に留學せしめんとし、嫡子李載冕を擧げて宮内大臣となし、局長の更迭大變なし、宮中に於ては王妃被害の已に掩ふべからずとなるや、先づ王妃を廢して庶人となさしめんとし、遂に又た嬪に貶して國喪を發せず、市民は尙ほ大院君の威望を見て雪行の遷移を待ちつゝあり、國王陛下は王妃の被害せるを以て別に王后冊立を欲せられ、且つ皇帝國の年號の新稱を命せらるゝと雖も、列國の異議ありて行はれず。

八日事變日本政府に移報せられ、且つ王妃殺害の報至るや、朝野痛驚せりと云ふ、而して其の變亂に日本人士の加入せるを聞いて驚愕し、三浦公使其の謀略に助力せりとの報に接して其の急激處理の策を失したるもの尠からずとなし、政府は二三の武官並に法官を遣はして形勢を調査せしめ、狼狽し敢て事變の顛末を考究せず、三浦公使以下四十餘名の本邦人を退韓せしむるに至れり。

是より先き韓廷は百事緒に就き、愈内政の革新を計り、始めて王室の獨立と内閣の責任を見たるを喜び、赤誠を表して日本政府の助力を求めたり、その間ウエベルの如きは屢謁見を求めて王城守備を獻策したりと雖も、一も行はれず、且つ

一面には仁川碇泊の軍艦に命じて、公使館守備として兵四十を召び、米國公使を懲罰して米兵の入京を求めて示威的運動をなさんとしたれども、兵力未だ足らず、而して本國の命亦た來らず、僅かに亡逃の閔族及其親交の輩を其公館に留めて時機を待つものゝ如し、思ふに八日の變たるや、實に意外にして平地の噴火を起したりと雖も、恰かも閔妃自行はんとしたる機會と企謀とを大院君に與へたるものなれば、其反動の結果として慘烈を免れざりしを知るべし、王妃は自ら井戸に陥入せり。

十二日より義和宮行衛不明なりとの風説起り、米露將さに義和宮を奉じて國王を廢せんとすと、是れ一場の虚聞にして其の實義和宮は露館に行ひて饗宴に預かりしと云ふ迄なりき、紛擾の餘波未だ定らざるに三十餘の有志者は亦た大院君の後に從へるの故を以て廣島に送らる、同志者及び三浦公使が日本に退去せらるるとの報告に接して漢城政府の失望は言語に斷へたり、我居留民は電報を以て留任を願ひ同志者の爲めに宴を開き、國租界開けてより無き同情を以て三十餘名は十九日京城を發し、廿一日仁川より廣島に送らる、次いで三浦公使杉村

書記官外七八の官吏も送られ、所謂廣島獄なるもの起れり。

當日の是非曲直は棺を掩ふて定まらんか、然らざるも半島の運命は遂に當日一片の涙ある志ある日本有志の面目を回顧するの時至らん。

此事變の結果として已往三十年間彼上り、此下り、一消一長したる二大權勢の一が滅亡したる慘刻なる大事實は寧ろ朝鮮人民よりは世界をして驚愕せしめたり、漢城外交團は該事變の共同責任が日本公使及日本國民にありと爲し事變の成行に就て悲觀を呈したりき然れども大院君及其一味は王妃の殺害を了し、王妃黨を王宮より斥け、内閣は金宏集によりて組織せられ再び日本勢力の下に政權を統合するに至れり。

大院君は國太公の名を以て天下に布告するに王妃を王宮より去らしむるは宗社安泰の計なりと爲し若し國王にして之を拒まば、彼は國王の頭をも取らんとするの猛斷に出でんと決したるものの如くありしかば、彼は一舉して王宮を支配する二十年前の時代に立ち返へりし感想を有したるべし之に反して日本政府は事の成行に驚愕し、極端なる變革の實況を調査し、遂に該事件に參與した

る三浦公使以下四十餘名を廣島監獄に拘致しぬ云云。

若し十月八日事件をして大院君の參内と政權の變革に止まらしめば、日本は自ら其責を引くの必要無かりしなるべし、又通常の政府變動にして止まらしめば日本は三浦公使が援助を與へたる行動は、日本の努力と、然的地位を回復せる正當の行動として左まで國際の疑惑と反對を受くべきものに非ざりしならん、而かも王妃の殺害せられたるに至りて、其責を明かにすべき苦境に立ちたるなり、想ふに王妃殺害は大院君の眞實なる熱心なる警復的目的にして寧ろ大院君に取りては已往の重望をも放棄し、將來の慾望をも棄てて、只だ彼は自己の受けたる侮辱を酬ゆるため、雲岬宮の生存を計るため王妃を殺害するを以て起ちたるものなれば、三浦公使の行動は其目的と手段を混入し、爲めに國際の非難を受くべき形勢となれり。

三浦公使は大院君の重望と變革の責に當るの決心を利用して、援助を遂行し、大院君は日本公使の勢力防止の目的を斷行するの企圖を利用し、茲に王宮内の悲劇を演出したるものなり。

王妃は十月八日午前變亂中に於て殺害に遭へり、彼は事變の前夜三更訓練隊の出動を探知し事の急なるを知り、直ちに王宮の守衛を嚴にすべく、外人ゼネラルダイ、ゼネラルリゼンドル、洪啓薰等に命じ且つ急使を日本公使に馳らして王宮保護を請はしめたり、彼は如何なる危急の場合に於ても沈重なり、多智なり、狡猾なり、聰慧なり、日本勢力を冷刻なる程度まで排斥を企て乍ら、大院君の兵力を擁して參内するを日本公使によりて防止せんと有したらんには彼は、ウエベルは甚しき横着なる機先の方略ならずや、若し露國公使にして多少の兵力を備へによりて王城の護衛を托せしなるべし、而かも日本軍隊が大院君擁護の疑十分有るが故は彼は之を逆用して自己安全の好手段に利用したるなり。

王妃の救援の求は彼を其死より救ふ能はずして寧ろ其最後の悲劇を早急ならしめたり。

彼の周圍には彼の愛寵せる群臣を以て充たされたり、就中忠厚なりし鄭秉夏は假令如何なる事變の到來するにせよ王妃の身上の危害の加はる可き筈なしと極言しぬ、王妃は數回差し立てたる日本公使の救援者は徒らに時刻を刻々に腔

費し、最早天明に近づきたり、彼は最早運命の次第に迫りつつあるを見て王宮より避け去るべく用意したるも、悲しむべき運命は彼を拘致して動かさず、彼の寵臣と重臣は只だ茫然として彼等の危険を避くるの外には忠節も殉難の志も見えざりき、其長夜の宴に侍りて歌唱の間すら相待せる寵幸の臣、利益福祿日夜宮殿の恩愛に馴れたる官宦巫女の輩は申す迄も無く一位一爵彼の恩寵の餘恵を被むる幾多の臣僚は銃聲を耳にし皆徒然逃奔しぬ、彼の最後まで身を以て掩ひ、變亂に處して殉死したるものは宮内大臣李耕植一人のみなりき、寵臣中の異殊なるものの内聯隊長玄興澤は彼の最後を見て逃げ去りぬ、年少より王妃に寵用せられ近頃まで貞洞俱樂部に往復したる王宮の參書たる李學均は侵入者に捉へられ其生命の救済に代ふるに王妃の所在を自ら請ふて引導したりき、若し大院君派の軍隊及壯士等が光化門外に於て守衛の一隊によりて横撃せられたるに際して、勇敢なる防備と忠節なる指揮者によりて防禦したらんには、侵入團は勢中斷せられて孤立したるを以て、容易に大院君派の入城を制止し得たりしならん、而かも約六百の兵勇は雍和門内に在りて、數十名の侵入者を防ぎ得ざる

のみならず、交戦僅かに三十分にして潰散し、乾清宮をして侵入軍に委し去りしが如き、王宮忠節の士全く存在せず、所謂天下の勇兵と稱せる平壤兵の軍氣と兵力も亦た價值なかりき。

國難に際會し、兵亂に遭遇すること前後三回、其列強の代表者をして常に此女流の外交に利用せしめ、幾多の政事家を操縦すること小兒の如く聰敏なる一代の女傑も、遂に終生の政敵によりて悲惨の最後を遂ぐるに至れり、若し彼をして王宮の家庭に圓滿和樂の花を咲かしめ、賢明良淑なる女徳を以て其舅父氏の功業を後昆に残すに内助せしめ、其外族をして友愛共力の下に於て甚しき政權に干與せしむる無からしめんには、大院君は喜んで攝政の權を棄て、李王朝の中興の業を成したるならん、然るに事皆な意外に動き、彼は其最後に至るまで政權を愛すること其良人と其家庭よりも甚しく、良淑なる徳操を破りて無賴奸慧の徒を愛寵し、雜流を集めて王宮の尊嚴を喪失し、其外族に偏重して王族の零敗を喜びたるが如き、李王朝をして衰亡を速かならしめたりしは一に彼の失徳に由ること多からずんばあらず。

然れども彼も亦朝鮮人なり、朝鮮女流の賢明なるもの殆んど斯くの如く、其家庭の位置を棄てて政權に交渉するの狀態は一般朝鮮婦人の性情なり、彼は朝鮮婦人を最大に發輝したるものなり。

然れども其國交の利害を遠觀し、外交の輕重を諒會して強大の力を利用したる手腕の如きは、殆んど敏慧なる美妓が無能なる情夫を役遇するが如く、前後幾回の政變毎に存亡休戚の患あるも、善く之を制し、之を引導して王朝の外患を防ぎ得たるの功業に至りては、決して其功業湮滅すべからず、王妃の讀書を知るもの曰く、彼は時として讀書に耽けることあり、其愛讀の書史は尤も左史傳なりと、彼は烈女傳や、大小學を知らずして、春秋左史を愛讀したる乎、然らば其血脉中に於て終生忘る可らざる權勢の慾火を以て燃へつつありしも、亦知るべきのみ、亦雲上の尊位を以て兵刃の下に最後を遂げたりしも、亦知るべきなり。

大院君は國太公の名を以て參内し、日本公使及び事變の真相を知らんと欲し、王の安寧を祝せんが爲めに、各國代表者は參内せり、大院君は國王の側に在り、政變の局に當れるを各國使臣に告白し、併せて各國との親善に何等の變更なき旨

を以てせり。

漢城市民は大院君兵力を率ゐて變革を行ふことを聞き、數萬の群衆は鐘樓街より光化門に集團し、事の成行を觀望せり、政府は金宏集を以て首班の地位に立たしめ、形勢直に靜平となりしを以て群衆は安堵せり、彼等は早くも王妃の變を傳へたるも、冷然として他人の如くに看過し、憤起して以て王宮の凶變を回復せんと欲するものを見ざりき、彼等は王妃の變を悲まんよりは重ねて凶猛なる變亂の來襲を怖れたり、然れども王宮も官衙も市中も殆んど平日の如くありき、只だ王妃の最後に對する世界の注意は漸く重大となり、日本公使と各國代表者との間に於て來往頻々として何事か論議折衝されつつあり、沈痛なる冷氣を以て掩殺したるが如く、大院君及新内閣は頗る活氣を失へり、蓋し王妃の凶變は公表せられざるが故に此凶變の責は如何なる形式、如何なる變化、如何なる刑罰を以て、如何なる方面に現はれ來るや、是れ外は漢城外交團内は王宮に至るまで、亦内外官民を通じて洗ふ可らざるの疑懼なりき。

三浦公使以下此事變に參與したる日本人は日本政府より召還せられて廣島

(240)

(241)

獄に投せられたり、然かも審査の末何れも證據不明の故を以て放免せらる、日本政府の此處置は痛く朝鮮政府を失望せしめ、大院君は自ら事實の責を負うて雲岷宮に退隱せり、一代の英雄も其往事を追憶すれば、功蹟の大小、事の得失、皆な一片の雲夢となり、了りぬ、彼は孔德里より起つに當りて熱涙を帯びて其愛孫の身事をのみ附托し、亦自ら政權を掌握するの野心を放擲したる如くなりき、彼は過去三十年間忘る可らざる讐敵を滅ぼしたるを見て、心中無量の欣懷に堪へざるかの如く、以て終生の怨を晴らし、茲に一生の政事的生涯を終はりぬ、

彼は其執政の始に於て偉大なる權勢と功業を立ててより、李朝以來、恐らく朝鮮開國以來の威望を得たり、而かも二十年來の政治生活は多くは失望を以て經過したるに拘らず、彼は王妃の存在の爲めに奮闘し、忍耐して今日に及べり、今や其政敵を失ふに至りて彼は其興宣君たりし舊邸に退居しぬ。

彼の退隱は日本に取りては重大なる打撃なりき、金宏集内閣に於ては殆んど其外廓を失ひたるの觀ありき、王妃の死と俱に外族閔氏は土を捲いて重來するの勇氣無かりしも、王宮に於ては無邪氣なる青年王子と伶俐なる國王は、幽憤の

涙を濺ぐことあるも、漢城外交團は王妃殺害の如き野蠻的行動の責任者あるを知らざるにあらざるも、内外の事情と形勢は必しも此頼り無き内閣を破壊し得る他の勢力存在したるに非ざりき故に昔日の大院君に依て王宮政治の威信を立てんと欲せば必しも難事には非らざりき、而かも退居せる大院君は、最早一代の公生涯を放擲したるなり、彼は遂に雲岷宮より一步も出動せざりき。

若し大院君にして彼が巨大の氣象を以て、王宮の中樞に立ちたらんには、漢城に於ける外交關係は、必しも彼に於て最大なる危険に非ざりしなり、然れども彼は最後鮮血に飽き、權勢に厭き、勢力を好まず、只だ一個の愛孫を安全に殘存すべく、遂に永久政治生涯より退去したりき。

(242)

## 大院君の末路

其上

英雄の末路は東西古今其轍を同うするもの少からず、其生存中に於ける功業赫々として萬衆の眼目を驚かすあるに似ず、又其性行が凡庸を超越して衆人の

上に耀くに相反して其終末の寂寞零落冷索なる光景は、恰かも天非凡を刑罰して斯くの如くならしむるに非ざる無きやと疑はしむ、大院君の雲岷宮退隱後に於ける亦た斯くの如きのみ。

大院君の政事生涯は前後通じて三十餘年間なり、其の攝政の初期に於ては、彼は事實に於て朝鮮開國以來空前なる大帝王なりき、其政令と其權威は克く國內の人心をして收攬統合し、其外に對しても果斷勇猛一世の人士をして啞然として其政令に服従したるが如き、遠く祖宗の威望より超越し、又昔者新羅大王をして顔色無からしむるあり、王妃と權を争ふ前後二十年間に於て、壬午の變亂は疾風の如く王宮と政府を顛覆し、一代の人心をして大院君の雄姿を崇拜せしめたりき、清國に拘せられて保定に留る四年、清國より還りて自邸に閑居すること八年、一旦東學徒を使喚して内亂を起さしめ、日清の戦火を産み出して身亦其渦瀾中に投入し、百敗百變、遂に鮮血を以て王妃と相見るに至りぬ、其半島を包圍し、朝鮮に壓倒せる世界の、大勢は重ねて此英雄をして永く雲岷宮に退居せしめたり、巨人も亦た大勢に葬らるゝ、大勢は洪濤の如く、英雄は巨船の如し、彼は逆潮に猛

(243)

進して終に亡びぬ之を回想すれば其浮沈盛衰を論せず三十年間常に一代政權の中心となり或は一國權争の對手となり其事業と其動靜は屢國際の間に重大勢力として重視せられたるに拘らず其末路の振はざる其最後の寂寞なる轉た老雄の爲めに一掬の涙を濺ぐを禁じ能はざらしむるものあり。

彼は其初政に於て國力と民力を統一したりと雖も彼の思想と人格は時代を開拓し之を指導するの卓見と深慮ありて然るに非ず彼の性格の非凡なる其行爲の偉大なりし爲めに凡衆をして彼の下に集合歸依せしめたるなり故に其半途以後王妃の如き後傑によりて攪亂せられるや彼は其爲し得たる大業を回復して之を繼遺せしむるを爲さず其破滅と混亂とを問はず後半二十年間政敵と奮闘するを能事としたるよりして見れば其末路に於て何等功業の榮光を享くる無く全國の民衆は只だ非凡なる英傑の悲境を記憶するに止るのみ。

#### 其中

彼はエマニウエル帝の如く高潔なる愛國者を有せず又我黃門侯の如く敬虔なる臣僚の崇拜を有せず其前半に於て行ひたる事蹟が已往王侯宰相の爲し得

ざる程の偉大なる權威を現はしたりしに似ず其後半期に於て屢失意と逆境を免れざるは何ぞや彼は雲峴宮より出でて昌德宮に入りてより景福宮より去りて雲峴宮に歸るまで終に自國の周圍に存在せる列強の形勢を了解せざりき世界の進歩發展勢力是れ國家及國民の強大となり文明と幸福を得る最大の指導なり彼は之を知らず之を學ばず只だ一意専心に巨大なる政權を執らんことを企てたり故に幾回の政變は皆な強大の干渉によりて失敗し幾度の功名は世界の趨勢と背戻し全く其目的を達し得ざりき。

彼は世界を相手として鎖國攘夷を決行したるに非る也王宮と國民を統御したる彼の霸氣は實に鎖國の主義を固執したりき而るに其後半に及んで彼は眼中王妃の外何者をも存在せざるが如く其十月八日事變に於て王妃を倒すや彼は全く一生の勇氣も消沈し慾望も忘棄し政治生涯より直に退隱したり若し此人にして深遠なる哲理を解し高大なる理想ありしならんには其退隱後に於て甚しき冷寂を以て終りと爲さざりしならん彼は其後半期に於て全く政權の回復に煩悶し其曾て爲したる功業は夢の如く消へ失せ亦た自國の運命と自國の

興廢に就ては殆んど何等思慮無きものの如くありき。

其の下

英雄大志を懷き大事を企て功業半途にして倒る、ナポレオンのセントヘレナに客死する、南洲翁の城山に最後を送る亦時勢の罪に非ずして英雄の罪なり、其時勢を了解せず、國勢を顧みず、好んで時勢の爲めに葬られ去る大院君の末路の如きは當然なるのみ、然れども彼は其政敵より最大なる侮辱を受けたるにより、又彼は祖先以來五百年の王業を中興したる偉勳に對し其婦女子のために最大なる痛苦を被むれるを憤り、自ら鮮血と俱に終らんと決心するに至り一片の意氣に至りては實に壯とするに足る。

彼と王妃は大石の如し、若し彼等をして合力し一個の大圓石とならしめば、半島王國に發生すべき波瀾は或は強大國も尙且つ之を制するに難かりしなるべし、而かも其一は深く海底に沈葬し、其の一は破碎したり、是に至りて雲峴宮は時勢の外に立ち、功名の外にある一個の梵刹となり、大院君の末路は亦其梵刹を守れる山僧の如くなりぬ。

李竣鎔の亡命

乙未の事變は其性質頗る演劇的に企てられたるに拘らず、壬午の變亂より其關係區域は擴大せられたりき、而かも復讐を舉行せんとせる貞洞俱樂部乃至閔家の黨派は、次第に金宏集内閣を包圍し來れり、油斷もあらば漢城は忽ち填火の下に投下せられんとするは當時の光景なりき。

雲峴宮に退隱せる大院君は、最早世の功名を忘れたれども其愛孫李竣鎔の事は忘ること能はず、彼は自己の遺業を繼ぐべく、彼の真正なる血統を承ぐべく、雲峴宮の生命を保つべく、恍惚として乙未の冬日本に送くり去らしめたり。

彼は國王の父なり、李載冕は王の兄なり、王妃の血を洗ひ、王妃の怨を雪ぐべきものは李竣鎔に外ならず、彼は早くも機會を見て、其復讐の洪波が澎湃して金宏集内閣を沈滅したる數月前に於て日本に亡奔したるなり。

彼は其乃祖をして偏愛せしめたる程ありて其風采沈勇にして果斷あり、年少なれども毫も輕薄敏慧なるを見ず、其日本に寄寓するや大院君遙かに書を日本



政事家に送くり、彼の指導と保護を念々として推托したりき、彼は其乃祖の如く、讀書を好まず、終日客を引いて時事を談じ、亦好むで政事家を歴訪して形勢を談じ、當時流寓せる朝鮮人と異りて酒色を近づけず、其悠々として宏大なる邸舎に安居し、王侯の態度を持すが如きは、頗る彼の人望を重からしめたりき。

彼は其乃祖が英傑なりしが故に、歴過去の政變に遭遇して意外の出來事に出會したり、青年の身分にして大將の印綬を得たるが如きは、其一例なり、又彼は酷だ乃祖の英風に似るあると稱せられ、王位僭奪の名義人として、企望者として王宮より嫉視せられたること幾回なりしや知る可らず、彼は王妃乃祖の間に終生拭ふ可らざるの怨讐を築き、其争鬭の極、屢激甚なる變亂起りし毎に、彼は乃祖の形となり、影となりて、漢城の政界に現はれたりき、彼は半島の王座を犯せる慧星の如く不安の種なりき、果して彼は其祖父の血脉を繼ぐの英傑なる乎。

彼の漢城を脱して東京に奔りしは、實に虎口を脱したるの想あらしめたり、雲峴宮をして暴風の政變の危難より脱却し得たりしものは、實に李峻鎔の亡命によりてなり、若し彼をして安閑と校洞に在らしめば、王宮よりの復讐は必ず彼に

注がれしならん、雲峴宮は三百年前の燕山君と均しく復讐の血を注がれしならむ。

彼は東京に奔命したる後、東京政事家は大院君の愛孫なるの故を以て、彼を遇するに王族の子を以てし、又英傑の孫なりとし、東京政府は彼の生活を助くるに相當の補助を以てせり、彼は英國遊覽の途に上り、ロンドンに留ること一年餘にして日本に歸りぬ、歸來房州の海村に寓すること、實に九年間なりき。

朝鮮近世の歴史は實に罪惡を以て充たされある不道德の歴史なり、學問も、門閥も、外交も、文學も、皆な朋黨の系統と其争鬭の資料に利用せられざるはなし、尤も甚しきは復讐に次ぐに復讐を以てするが故に、恩怨遠く幾代に亘り、鮮血流竄、刑罰黜陟一として争鬭に外ならず、而して最近に至りて王宮の二大政事家によりて之を代表し、四十間之を王宮に於て發したるに至つて、其累の及ぶ處も極めて大なりとす、李峻鎔にして若し愛如として漢城にあらしめば、彼は其殺されたる王妃黨を代表せる王世子によりて復讐的争鬭を宣告せられたりしなり、而かも飄然去りて海外に走りしは、雲峴宮に於ては最善なる安全の計なりき。

王世子は年少にして且つ聰明ならず、然れども其母を葬るべき最大の祭物は雲峴宮の覆滅にありしならん、思ふに憲宗大王崩去以來、二個の政事家が互に其權を争ふ四十年間の末に於て、慘殺されたる王母の愛兒たる王世子は極めて寛好なる王子として存在するに當りて、退隱したる王父の愛孫は尤も敏捷に遠く海外に逸し去りぬ、半島王國の治安が、此反對せる二個の事實によりて保たれたりしも亦多しとす、彼は其祖父と祖母に永訣し、且つ其母にも生別し、恰かも英雄の神の如くにして日本に浪遊せり、王宮の十年は彼の生存を亡ぼさんが爲めに無量の苦計を廻らしたるに拘らず、彼は十年後に何等の惡刑をも避けて其故山に歸りしは實に日本の恩惠也、然れども彼が歸來せし頃は彼に寄與せし英雄の願は最早存在せざりき。

### 大院君の死

最愛なる孫兒は日本に奔れり、大院君は彼を送くりて、曰く汝は桓公の如く十九年歸り來らざるべしと、爾來冷索たる光景が石坡書院の窓軒を見舞ふのみな

らず、王宮は移されて外國公館にあり、國王は其世子を携へて囚人の如くにして外人の館宅にあり、彼の朋友は或は海外に奔り、或は殺戮せられ、或は潜逃して見えず、漢城の政權は悉く露人の手中によりて廻轉す。

王妃黨が暴風の如くに荒掠したる後に於て、残れるものは露國の通譯者、北道の僥倖者のみ、日清戰後始まりて僅かに三年にして文物制度が夢の如くに流失したるのみならず、王宮より政黨に立ちたる人物も、亦た全く變易したるは甚大の變革なりき、雲峴宮にありては李竣鎔日本に亡命したるの年を以て大院君夫人閔氏逝去せらる。

大院君大夫人は王妃と均しく閔族の出なり、其子の爲めに王妃を推舉したるは此大夫人なりき、彼は珍らしき程溫良貞淑なる女流なりき、大院君及其近族の間に於て黨禍の爲めに骨肉相害したること再三ならざりき、其四十年間に於ける轉變悲慘の間に際して彼の苦節痛忍は實に想像するに餘りあり。

彼は其良人たる大院君と、其愛兒たる國王及王妃との間に立てり、彼は其義理ある庶子李載先と、其凡庸なる長子李載冕との間に立てり、彼は其外孫たる王世

子と其愛孫たる李峻鎔の間に立てり若し人の母にして木石の如く已に愛憎樂苦を超越せしめは四十年間の變化も左まで彼の心を動かすに無かりしならん而かも彼は其溫良なる女流の身を以て長き過去の變革を忍耐したりしも其愛孫李峻鎔と決別してより最早雲峴宮の太陽は輝く能はず其年彼は非凡なる良人を殘して去れり彼は敗殘せる一家を興すべき一縷の望すら得ずして眠りぬ。彼女の死は雲峴宮に於ては恰かも落日蕭々として傾くが如く今や王宮も雲峴宮も黄昏の殘照裏にあり愚昧なる李載冕ありと雖も老雄大院君の寂寞を慰むべきものは何物もあらざりき彼は是よりして全く人生と相離れ社會と相分れ彼は四十年間の生涯を回顧すべき尤も悲慘なる境涯にあり。

大夫人の逝去は大院君に取りて精神的死の宣告なりき彼は社會より離別され王宮よりは絶交せられ其愛孫とは永久の訣別を爲し只だ老末の寂寥を慰め暗慘たる雲峴宮の太陽として一縷の光明たりし良妻を失ひしより彼は亦た其愛讀せる黃山谷詩集も擲ち去りぬ狎親せる家臣の願を容れて鬱氣を散じたる蘭石の揮毫も机上に對して尺牘の朋友として學びたる金秋史の書帖も皆な悉く放擲せり斯くの如くにして一代の英雄も只だ今は幽冥に赴く冷かなる一路の行脚あるのみ。

彼は是より其健康を害すること甚しく其顔色を飾れる覇氣は已に喪失し其談話を活かす鬱絶なる言語も其雄才大略の氣象を包める堅剛なる姿勢も最早頹衰しぬ彼は自ら衰耗したるのみならず社會の要求も彼に向つての要求も只だ一死のみなりき彼は憐むべき冬の長き一夜病牀に何事か思案しつつ忽ち其孫李峻鎔を招き七律一首を示して曰く蒼穹より落來せる洪濤を聴くの想あらしむ且つ曰く我命旦夕に迫れり死して其尸を孔德里の青邱に葬るべく遺言しぬ臨終に至りて屢其亡へ中の愛孫を連呼して絶命せりと。

此時李峻鎔は日本より英國に旅行しロンドンの客棧にありき王宮は恰かも慶運宮に定められ大韓の國號に改め皇帝の尊號を發唱し清涼里に於ては王妃の山陵を造營し第三の王子英親王誕生ありて王宮は漸く數年の悲雲晴れ漢城の太平も幾何か小康を保ちたるの頃なりき英雄骸骨と化して今や孔德里の北邱に國葬せらる時に光武元年正月 日なり。

王宮と雲峴宮

國王、外館より還宮あり、慶運宮は規模小なれども漢城の外交團によりて周圍せらる、恰かも是れ當時の朝鮮王國と朝鮮王の外交状態を形容したる好個の事實なり。

朝鮮内外の政務に干與し、超越せる權力を有せる露國は漸く地歩を緩退し國王は此機會に乗じて各國の利害を均衡にし、各國共同の親善と保護を以て朝鮮の獨立を立てんと企てぬ。

慶運宮は其周圍に於て各國を控へぬ、英國はブラオンを以て、佛國はソンタクを以て、米國はアルレン及サンズを以て王宮との間に親善の關係を繋ぎぬ、王宮は各國との交誼を連結し、若くは代表せる式部官政治を以て平和の望洋々たるあり、是に於て王宮の造營は着々擴張せられ、園丘墳は築かれて國王親ら天を拜して皇帝を稱し、獨立門を作り、王妃の陵を營み、年號を改め、國號を新にし、王宮は今や變亂の源たる大院君の死を送くりて、宮人嚴氏を入れ其誕生の第三王子

を迎へ、和氣霽々として慶運宮に湧き出てたり、斯くの如き尊榮と太平とは此近世に於て未だ曾て見ざる處、漢城の市民始めて鼓腹の喜びを爲せり。

之に反して雲峴宮は此光榮よりは全く閉鎖せられ、王宮よりは全く其血統の連鎖を存するのみにて一切の交際を杜塞せられたり。

雲峴宮の不運は益傾けり、大院君の死に次ぐに李政鎔は其翌年を以て逝去し、李載冕夫人は亦其翌年を以て逝去せらる、宛ながら、雲峴宮は墳墓の如くに不運を以て訪問せらる、喩へば累々たる墓畔に於て天末の秋風に悲しむ烏鶻の啼くが如く、廣宏たる校洞の雲峴宮に於ては溫良玉の如き李載冕の一人を擁して其父母と妻子の墓畔に立たしめたるの實境にあり。

王宮と雲峴宮との關係は寧ろ絶交と謂はんより王宮の壓迫なりき、刑罰なりき、復讐的討伐なりき、極端なる人事の不運に加ふるに財政の困厄は尋常ならざりき、平民の子として其父母を祭るに一代の家産を傾くは朝鮮の風習なり、而かも雲峴宮に於ては比年相次ぐに祭祀の大禮を以てし、國太公の祭祀も僅に其形狀を行ひしに過ぎざりき、王宮よりは僅かに血統の宗禮を致したるのみ。

當時雲峴宮の財産五百萬と稱す而して一年支ゆる一宮の費二十萬を要せり、王宮よりは管だに扶治秩祿の及ぶ無きのみならず、雲峴宮の財産は漸く掠奪を被むりぬ、此掠奪は實に王宮の指揮によりて行はれ、英親王各王族の間に於て思ひ思いに分配せられたり、王宮は此壓迫を以て満足せず、更らに一年二十萬元を以て雲峴宮費に充つべき代りに、雲峴宮の宮屬財産は之を宮中に轉管することとしたり。

二十萬元宮費は甚しき好辭にして、其實は雲峴宮の全財産を詐取するの巧言なりき、天下の好人物と稱せられたる李載冕は固より此壓迫に抵抗するの勇氣無く、其會て大院君の巨大なる手中に收めたる幾多の良田と珍寶は王宮に滔々轉失したり、されば校洞の宮邸は軒傾き、壁破れ、溝壑の間塵穢累積するも之を掃清する無く、大厦の傾くの光景は往々行人をして大院君の盛事を追懷せしめ轉た其蕭條たるを見て流涕せしめたりき。

第二公子李致鎔ニ逝く、子無し、長公子李竣鎔は亡命して異域にあり、且つ嗣子無し、雲峴宮の血統將さに絶えなんとす、依つて李載冕後夫人を迎へたり、只だ雲峴

宮の財産益傾き、零落の狀態益甚しくなりぬ。

雲峴宮の悲慘は寧ろ亡滅なりき、恰かも大院君の昔時興宣君の時代と相似て、其傾衰の狀を見て數三の舊臣等が、僅かに李竣鎔の亡命より歸りて乃祖の舊勢を回復せんことを期待するに過ぎざりき、是時に際して雲峴宮を訪問せる二個の朋友あり、其一は嚴妃の代人申尙宮なり、其の一は閔族を代表せる閔泳煥なり、嚴妃は王宮に於ける准后の位置にあり、彼は卑しき身分より昇りて貴妃の位にあり、彼は王宮の女性中尤も勢力あり、尤も尊とき位にあれども彼の族人は兩班に非ずして普通の市民なり、彼は英親王の母として王宮の奥殿を支配しつつあれども彼の外族は王宮の族人として甚だしき不似合なる血統なりき、故に彼は宗族たる雲峴宮に對して懇親を結び、其零敗せる悲境に於て深大の同情を表白しぬ、其懇親と同情とは恐らく王宮に於ける彼の位置に光彩を加へ、尊重を添へ、勢力を扶植する賢明なる方略なりしなり、雲峴宮は之によりて王宮との間に幾何の交際を持續し、其極端なる貧困を免るるを得たりき。

閔泳煥は何故に其盛代に於ては政敵の一人なりしに似ず、其失意の時に於て

王宮の嫌厭をも顧みずして屢々雲峴宮を訪問したる乎、彼は只だ李載冕との舊交を温めんが爲なりと云へり、想ふに彼も亦當代に志を得ざる失意の一人なりき。

王宮と雲峴宮は斯くの如き關係を以て大院君死後の十年を經過せり、王宮の尊榮は此間に於て益興隆し、國王は其左右に於て危険なる政争を排除し、王宮内の諸政全く王の親攬に歸せり、王は大院君の奇抜なる決斷と王妃の敏活なる外交方略を併せ得て、其手腕漸く圓熟し、外は世界の列邦と交はり、勢力の衝制克く其規を失はず、内は大小の政事家を懷柔して克く之を統一し、其事實に現はる實權の強固なる、其外交の妙は漢城の外交團をして其敏腕に嘆賞せしめたり、斯くの如き政事家の王宮に存在せんことは恐く其父たる大院君、其妻たる王妃をして幽冥の間より驚服せしめたるならん。

王の十年間に於ける事業中、最も顯著なるは國號を大韓と稱し、王を改めて皇帝と唱へ、各國代表者の面前に於て壯嚴なる大韓帝國式を舉行したりしことなり、彼は内外變亂の間に遭遇し、艱軻不遇の三十年間は内憂外患の活ける政務を見學し、其鬱屈せる孤獨の生涯より起つて此前古無比の光榮を行ひしは、王の聰

慧なる大手腕に依らずんば非ず、爾來彼は各國との交親を厚ふし、各國の利害を利用し、宮廷は恰かも各國代表者を顧問として外交術を發揮したり、王の賢明なる殆んど遺算無く、各國との特別的交誼を保有し、王は座ながら事實上の外交長官として其勢力及び其名譽を發揚したり。

王は其父の如くに外族黨の跋扈を制御するの必要無く、彼は満足の權臣を容易し、使用し、賞罰すること自由なりき、彼は其妻の如くに權勢の發動に急噪ならず、又宮廷の榮華と自己の勢力の爲めに誇大的事件の發生を好まず、自由に王權を擅行し、王權の興隆したりしこと古今其比を見ざるの盛境に達したり。

王宮は太陽の如く輝き、雲峴宮は殘月の下るが如く蕭涼たり、是れ皆な王妃と大院君が政權を争ひし戦後の光景ならずや、骨肉相食む朝鮮王者の常なり、されば王宮が勝者の地に立つて此尊榮あるに似ず、雲峴宮が敗者の境涯に沈淪して憐むべき零落に傾くも亦た權争の得失なるのみ。

## 後の十年

## 其の一

十月八日事變前後の形勢は、之を朝鮮の大局より觀望すれば盲目者の疾走するが如く強大に衝突する毎に變化あり、事變あり、紛擾あらざれば已まず、而かも朝鮮は必ず自ら其衝突毎に革命的變亂を經過せざるは無かりき。

其王宮内に於ける鮮血的變亂の屢發生したりしこと、其變亂毎に文物制度及び政務の全く變革せること實に前古無比の時代なりき、幾多の政事家は此時代に於て或は悲惨なる運命を遂げ、或は一躍して顯榮の身となり、或は海外に亡命し、或は一族皆没落したるが如き、獨り政權の争闘が猛烈激甚なりしのみならず、政事家の盛衰得失の變化も亦た急激なりき、而かも朝鮮半島に對する世界列強の競争的關係の一齊に顯現するに至りし爲めに、半島の形勢は恰かも近世に於けるバルカン半島の國勢と均しく、極東に於て利害を有し、勢力の發展を企圖せる列強は事件毎に重大なる關係を有するに至れり、之を日清戰役前に於ける朝

(260)

鮮に比すれば、前者は半島の國勢は主として日清兩國によりて指揮決定せられたるの有様なりしが、戰後に於ては朝鮮半島に於ける國際關係は遠く世界列強と相關するに至れり、十月八日事變は其端緒を開きたるものにして、其以後十年間極東に於ける大小の事件は悉く漢城外交と干繋せざるもの無かりき。

之を事例によりて評説すれば、日本帝國が朝鮮を以て清國の藩屬より救済して獨立の名を保全したるために、朝鮮に於て獨占的勢力を保有したる期間は極めて短日月なりき、戰役起りてより、翌年十月八日事變前に至る間に於て獨立國の施政改善に努力したる群多の改革も勢力も十月八日事變前には殆んど其根本より喪失しつゝありき、而かも十月八日事變によりて全く之を喪失するの已む無きに至れり、日本が其冒險的改革と其冒險的外交とによりて一年有餘の努力を喪失したるに至りし所以は、極東に於ける世界政策の影響なりしと雖も、亦た朝鮮政事家によりて悪用せられ、誘惑せられ、欺瞞せられたる日本政事家の責も多しとす。

(261)

## 其の二

開國以來未だ曾て真正なる獨立國を爲さざる朝鮮をして獨立自主の地位に立たしめ、亦獨立の價値を了解せず國民的自主の目的を知らざる朝鮮人をして自主獨立の政務を行はしめんとしたる日本の好意は、何等の好感を喚起する能はず、亦多大なる日本の努力も何等の効蹟を發生する能はずして休止しぬ、日本の行動は一面に於て朝鮮半島の獨立を保全するに力めたりしと俱に、他の一面に於ては日本は優越的勢力を保有せんとするにありき、而かも朝鮮に於ては其好意と其努力を擧げて水泡に歸せしむるに至ると同時に、日本の世界に於ける地位は此優越的勢力を保有すると許さざるの形勢なりき、内外の狀勢斯くの如くなるに當りて十月八日の事變あり、日本が此事件に聯帶の責あるを負うて朝鮮半島より退却するの已むなきに至りしも知るべきのみ。

露國の朝鮮に於ける勢力は寧ろ公使ツエベルの個人的勢力によりて重大視せられたるものなりき、一千八百八十年慶興貿易條約締結以來ツエベルの王宮に於ける名望と勢力は、殆んど袁世凱と相對して讓る無かりしも、露國は自ら國家の行動として獨占的地歩を占有する行動を企劃せざりき、日本及清國の露國

に對する恐怖と疑懼は、寧ろ朝鮮をして露國の強大を利用し尊重するに過重ならしめたる傾向を有したるか故に、王宮の政事家は屢清國の干涉を牽制するため故らに露國代表者と特種の親善を厚ふするの政略を取らしめたり、日清戰役後に於て日本の勢力を制肘したる政略も亦此と同一なりしなり。

然るに露國は日清戰役の終局に乗じて極東政策に多大の進取發展を爲し、三國共同の權力を利用し、戰後數年間に於て平和手段を以て滿州横貫鐵道布設の權利と并せて其沿線に於ける軍事上及政事上の特權を獲得し、進んで關東省の租借、ザルニ市の建設、旅順口の軍港及要塞を造築し、南下の政策と相應じて太平洋上の海上權をも擴張したり、此極東政策の發展は、宛なから期待したる強大利用に腐心せる朝鮮王宮をして歓迎せしめ、十月八日事變後に於ては朝鮮に於ける露國の勢力は恰かも事變前の日本と均しき地歩を占有し、其南下政策が事實として滿州に發現せらるる迄、露國は專斷暴橫の行動を半島に恣にしたり。

國王をして金宏集内閣の監視より脱却して自國の公使館に行幸せしめ、進んで財政、軍事に干涉し、露國公使をして單獨朝鮮を指揮保護せしめたるの狀態に



至らしめ、ツェベル公使の權威は往年井上公使の權威よりもより過大ならしめたりしは、露國の滿州經路に前驅したる外交的行動なりき、露國は斯くの如く半島に專横を極めるが如くにして其實滿州經路を擁護せしめたる一種牽制外交なりしと雖も、抑も王宮政事家が一時日本勢力の發展を制せんが爲めに、又此新勢力によりて自己の權勢を謀れる誘發無くんば露國と雖も然かく行動し得ざりしなり。

(264)

十月八日事變以後一年有餘の間に於ける露國の行動は甚しき暴横を極めたり、財政の監視軍隊の教練は云ふ迄も無く、特權の獲得、政務の干渉と壓迫は朝鮮政事家をして漸く反抗せしむるに至りぬ、國王露國公館より慶運宮に還り、皇帝及大韓の尊號を自稱し、盛んに王宮の外形を尊嚴にせんと企てたりし時は、早くも露國の壓迫に反抗したる時なりき、米國人士が朝鮮王宮に出入し、米國人の個人的勢力が王宮に加はりしは、則是時なりき獨立協會なる政社を創立し、王世子を以て協會の總裁に仰ぎ、過激なる政論を對議し、遂に協會は全力を注いで露國の暴壓を非難するに至りぬ、而かも此政論は王宮と米國人の煽動によりて行は

(265)

れたり、王宮は露國勢力に反抗せんが爲めに米國勢力を利用して之を牽制せんと企てたりしも、米國の利害關係は、日本の獨占勢力を制するために露國勢力を利用したるが如く深大ならず、然れども漢城に於ける米國公使及び布教、教育に従事せる米人等は、此機會に乗じて利益と勢力の擴張に汲々たり、之が爲めに露國の行動は益非難せられ、朝鮮人の露國に離反するもの漸く多く、其露語通譯を以て一時宰相よりも權勢ありし金鴻陸が白晝市民のために市街に於て惡罵せられ、肉泥的慘害せられたりしが如き、露國公使は之を目撃して救護をも爲さざりしが如きは、恰かも日本が金宏集の末路を庇護し得ざりし時と類似するあり、露國勢力の失墜は斯くして下り、斯くして退却せり。

是時に於て露國の南下政策は益發展せり、滿州鐵道は急速に着手せられ、ダルニ市の建設は宏大に造築せられたり、南北滿州に於ける廣大なる區域は、露國の軍事及財政の負擔を激増せしめ、旅順要塞及ダルニ市建造の巨費は益露國の國力を極東に傾注せしめたり、而して此經路に對する日本の地位は露國に於ては甚だ怖るべき地位にあり、若し日本の實力にして大ならしめば、朝鮮半島より突

進して露國の勢力を中斷するの運命となるべきは露國政事家の夙に注目せる  
ところなり、而して日清戰役後日本が露國の壓迫を忍耐し、其屈辱を雪かんと欲  
する國民的熱情は事件毎に日本の言論と國民の行動に顯表せらる故に露國は  
茲に朝鮮半島より勢力を撤退し、朝鮮半島に於ける日本の地位を尊重して以て  
南北滿州經路の警線を緩ふせんことを企圖し、遂に日本と協定するに半島より  
財政軍事の權力行動を撤退し、日本の商工上の優越なる權利を尊重する暫定の  
協定を締結したり。

此協約によりて露國は朝鮮財政の監督たるアレキセエフ及び多數の軍事官  
を引上げしめたり、露國勢力の此撤退は前陳の如く滿州經路の注集を企てたる  
結果に過ぎざりしも、朝鮮王宮に於ては王宮外交のために露國勢力失墜したり  
と思惟し、國王は自己の政略によりて露國勢力を撤去したりと想念したり、狡猾  
なる米人中に於ては米國の勢力と彼等の盡力によりて此結果を見るに至りし  
と爲し、其報酬を王宮に強請したるもの少からざりき。

其の三

朝鮮國王曾て戯れに群臣に謂つて曰く、近頃亡命人朴泳孝を推して朝鮮共和  
政府の大統領と爲さんと謀るものありと、不軌の罪容るす可らず、群臣等色を作  
して其犯罪を糾すべしと奉答せり、依つて其罪證を檢舉せんとす、先づ其隱謀を  
王に告ぐるものは俞箕煥なりとす、俞箕煥に就て糾問すれば、曰く趙秉式より聞  
くと、趙秉式に就て詰問すれば、曰く國王より承聞すと、國王に奏聞すれば、曰く俞  
箕煥より奏上せりと、終に其出所を覈査するを得ざりき。

蓋し國王の機敏なる、已に露國の勢力を驅逐したれば群臣等を制して米人の  
要求と米國の勢力を警戒したる先驅の外交的辭令なりき。  
王宮は今や全く強大の禍絆より脱し、國王は王權の盛大なるを喜び、最早露國  
勢力の敗退を以て朝鮮の獨立成れりと爲し、彼は自由民權を喜ぶ米人の勢力を  
排斥し、此數年間王宮政治に多大の盡力を爲したる米人の團體を敬遠し、特に王  
宮外交の機關たりし獨立協會を解散すべく企劃し、米人と交際せる臣僚を遠ざ  
けたり、米人の要求と報酬の強請に對する王宮の態度は斯くの如く冷刻なる仕  
打なりしに拘らず、米國公使は王宮の此態度に反撃を與ふる程の國際的利害を

有せざりき故に米國公使は直ちに王宮の態度と歩調を一にし、寧ろ國王の名譽と希望を成功せしめんが爲めに、王の善良なる朋友として王宮との親善を保持することに變更せり。

米國公使アルレン及び米國官憲の行動は、米人中に於て悪感を以て背立し、遂に獨立協會及青年團の如きは二三宣教師の聲援同情の外、何等米國勢力の援護を得る無きに至りしを以て、王宮派が遂に獨立協會を解散せしむるに際して多數の協會派は僅かに日本人の援護によりて危険を免れたるもの少からざりき、米人の國際的勢力は初よりして存在せず、只だ間接なる外交の援護によりて勢力を扶植したる也。

然れども米人の社會的勢力は頗る大なるものありき、王宮内に於けるアルレンの人望と米國人の富を利用せんと欲する王宮政事家の射利心は、米人との結託を益堅實ならしめたり、王宮に於ける物質的感化は主として米人によりて輸入せられたり、珍奇なる裝飾、高價なる宴會用の物質、各種の新事物は、米人によりて誘導せられ、王宮に於ける歐州宮廷の形式が、米人によりて感化せられたるが

如き奇異なる現象を呈するに至れり、朝鮮人の輕薄なる、彼等は米人によりて近世的王宮學を學び、而かも東洋の諸港を飄泊せる無賴の外人を以て近世の紳士として待遇し、其不調和なる文物は、王宮政事家の射利心と米人の好奇心とを結合して偉大なる勢力を有するに至れり、而かも此時を以て朝鮮王宮は太平の絶潮に在り、露國も日本も此時に於ては殆んど何等の劃策を施すの閑隙を得ざりき、米國公使館より年少外交官を聘して宮廷の最高顧問と爲したりしも、此時なりき、米人コールプランに委するに電氣鐵道電燈及水道の特權を以てしたるも此時なりき。

米人が其母國の廣大なる國力を標榜し、又時としては母國の先輩が一時唱導したる正義自由の説を吹聴し、大膽なる企業と放漫なる外交論を鼓吹して之を自己の勢力及利益に利用して成功しつゝあるの例は少しとせず、フキリッピュに於ける米人は斯くの如くにして成功し、布哇の合併も斯くの如くにして成功し、甚しきは近時南中兩米各邦に於ける冒險的革命や、演劇的政變に乗じて巨大なる企業の大成功を計るもの、内に米國人の參與せざる無きが如く、彼等は其

母國の政府が其國民の不謹慎なる行動を寛大に付するを尤好き便法として弱小なる邦土乃至半開の地に於て屢斯くの如き行動を遂行するを見る、米國人の跋扈したる邦に於ては、米國人の感化力多大なる地に於ては、必ず不謹慎なる外交論不條理なる自由民權論浮薄なる物質的文化の伴はざるはなし、太平洋新勢力の感化程怖るべきはなし、朝鮮に於ける米人の行動も亦た斯くの如き結果を呈したり。

蓋し朝鮮に於ける米人の事蹟は、曩きにデニーの外交顧問として來聘せられてより、ゼネラル、リゼンドル、ゼネラル、ダイ、コロネル、ミュンスタッド等も聘せられて外交及軍事の政務に參與したりき、日清戰役の終より所謂貞洞俱樂部なる政社的團體起りしより米人は其政事運動の中堅となりて王宮との間に重要な關係を有したり、露國の勢力獨占となるや、彼等は王宮の味方となりて露國勢力の排斥に力め、次いて露國自ら勢力を撤去するや、彼等の一部は民間にありて時々急激なる政治を論議したるも、其有力なるものは所謂米人の特色を發揮し、コールブランは企業に従事し、ハルバルトは言論に關與し、ツンズは宮中の顧問

(270)

(271)

となり、公使アルレンは北米合衆國の利益を代表する行動よりは、アルレン一個の勢力を扶植することに努力したりき、就中年少年なるサンズの如きは一時王宮の厚遇に満足し、其不謹慎なる行爲傲慢なる態度は痛く心あるものをして冷笑せしめたり、朝鮮王國を以て白耳義の如く永世局外中立たらしめんと欲する外交論の如きは、虚榮に飢えたる國王をして隨喜嘆賞せしめたり。

然れども彼の外交論や、企業は、其母國の國力と其富を以て朝鮮を擁護するに非ず、故に王宮は終に満足すること能はず、國王は彼等によりて露國の如く、日本の如く、若しくは昔時の清國の如く、其國家によりて直接擁護せられざるを見て、王宮に於ける對米人策は次第に冷淡となり、次第に無勢力視せられつつなりぬ、是れ當然の結論也。

其の四

北清事變及び其結果は、列國の極東政策に重大なる變化を及ぼしたり、若し清國の形勢にして遂に保全し能はざるに至れば、列國の極東政策は直に急轉直下の勢を以て變化を來たすの危険あり、列國は是を以て共同の兵力を以て事變の

鎮定を計り、清國門戸の開放は列國の清國現状維持の要求なりき。

清國の平和保全及び其門戸の開放に尤も唱導し、尤も努力したるは英米日に對して如何なる強大も重視せざるを得ざりき、日英兩國が盟約する迄に接近したりしは實に北清事變其動機たらざるは非ず。

之に反して露國は此事變の機會を利用し、滿州鐵道工事を速成すべく多大の人員と費用を以て極東南下の幹線と其海門の設備に精力を注ぎたり、其多數の軍隊は滿州の各地に配置し、鐵道沿線の保護と匪徒討伐を名として滿州の支配權を占有せんとせり、北清事變及び滿州の秩序は回復せられたるに拘らず、露國は容易に滿州より撤兵せざるのみならず、進んで滿韓國境に多數の兵力を駐屯せしめたり、則北部に於て琿春を占領して約一旅團の兵力を備へ、南に於ては鳳凰城に一聯隊の兵を駐在して、多々益國境の道路を開き、軍用電線を架設し、軍事警察を置き、ウラジオストツクとガルニ市の連結を拓かんとしつつあり、滿韓國境に於ける露國の行動は、獨り滿州の占有を企てるが如くなるのみならず、朝鮮

半島は最早一大危險を其國境に見るに至れり、朝鮮の平和は斯くの如き威壓的行動によりて漸く危くなりつつあるに際して、漢城に駐せる露公使パウロフは馬山の租借を朝鮮政府に要求したり。

露公使パウロフは精悍なる外交官なり、彼はウニベルの如く久しく朝鮮王宮に因縁ある情誼ある代表者と更迭して來れる新來の使命者なり、彼は曾て北京に駐まり書記官を以て、タルニ租借の要求、拔群の功勞ありしものなり、極東總督アレキシーフは此奇抜なる人物を推舉して漢城に送りたるなり、彼は此要求を成功せんが爲めにアレキシーフの訓令を得て旅順より歸任し、要求の第一交渉と俱にヌクルドフ提督は太平洋艦隊を率ゐて仁川港に來り示威的運動を以てパウロフの要求を聲援したり。

若しパウロフをして北京に於ける如くに成功せしめばアレキシーフの極東經略は殆んど完成せりとも謂ふを得べく、露國の勢力は甚だ雄大なる形觀を備ふるに至るべし、朝鮮半島は一括して露國の勢力範圍に包含せられ、日本は之が爲めに全く海上の權力を制せらるるに至るべきは明かなり、

(274)

朝鮮政府は此要求に對して全く沈黙せり、王宮の如きは露國勢力の撤去以來は王の勢力隆々として高まり、米國人士の卓見によりて局外中立論などに夢みつつありき、王宮の驚愕は寧ろ狼狽を極めたり、國王は此要求を自然的に發表し、政府當局をして病に赴かして以て要求の成行を遷延せしめつつ觀望したり、漢城外交團は此要求を以て朝鮮半島の平和を危からしむるに一致したる意見を有し、特に日英兩國は極力此要求を妨害するに力めたり、若し強ひて馬山の租借を許さざる可らざるに至れば、日本は露國と均しく馬山の租借を獲べしとて朝鮮政府に強請せり、

時の外部大臣朴齊純は暫らく西江の別墅に閑臥しつつありしが、彼は日本の要求あるを見て、別墅より入城し、パツロフに答ふるに馬山租借の獨占主義を非難し、彼此交渉の間に時日を経過しぬ、スクルトルフ提督の示威運動も其豫期の如くに効力無くして一と先づ旅順に去りぬ、パツロフと相對して日本公使林權助は機敏なる行動を以て、遂に露國の要求をして全く其目的の一部を辛ふじて成すに止らしめたり、林權助は曾て書記官として北京にあり、パツロフと亦た相

(275)

對して漢城に相戦ふとは頗る奇遇と謂ふべし、

王宮がパツロフの要求を拒みたりしは、日本政府の援護の力に依るとは云へ、時の外部大臣朴齊純が露國の行動を以て朝鮮の平和を危からしむる一大事件なりとして王宮の意思を動かしたる力多しと爲す、彼は滿州に於ける露國の暴横を知り、其慘烈なる變行を知り、露國の要求を以て併呑侵略の前提なりと信念したり、故に後數年間、彼は日本と提携して國防同盟の計劃を自ら立策したる程の人物なり、

是時に於ける國王の外交術は兩端に向つて進行せり、其一端は其一端と全く背離して走りつゝあり、斯くの如きは王宮外交として決して不思議に非ず、

彼は其作成したる大韓帝國の獨立及宮廷の尊嚴を維持する上に於て二個の恐怖を有せり、其一是露國の行動は滿州より漸く朝鮮半島を侵略するの形勢顯然となりつゝあるを見て、其滿州人を虐殺したる暴虐なる非人類事件を想念し、恐怖の餘り、彼の宗社と民衆の前途に震慄的恐怖を禁ずるを得ざりき、是れ其一也、然れども又日本の勢力が漸く強大となれるに従ひ、彼眼中王宮無き亡命者

が機會を待つて如何なる變亂を企てるや料り難きあり、是れ其の二也而かも此恐怖の裏面に於て彼は二個の福音あるを發見したり、其の一は露國は其政策の裏面に於て、若し朝鮮半島を以て露國の手を経て列強の共同保護の下に置くか、若しくは永世局外中立國と爲し得る必要あるに於ては、露國は自ら先んじて此發言を世界に紹介することあるべし、又其の一は日本、政府は單獨の力を以て朝鮮に於ては何等外交上の活動を爲さざるも、若し亡命者處分案と交換するに商工的優越權を以てせば好むで亡命者處分を實行すべしと、彼は其恐怖を外交的手段によりて消滅せんと計り、此二個の福音を行はんと企てたりしこと數回なりき、此國王の計劃は數年間宮廷外交として多大の努力を費やしたるものなりき。

國王の外交計劃は此二者の恐怖と福音の間を來往しつゝある間に於て、露國は南滿經路に全力を傾注したり、然れども其馬山租借要求が見事に失敗してより日本勢力の發展に頗る警戒を加へたり、特に日英の間に於ける同盟の交約成立して極東に於ける勢力關係に一大變化を及ぼすに至りて、露國の朝鮮に對す

る政策は活氣を失ひ、漢城政府は稍もすれば日本政府の指揮を受くるの場合多かりき。

是に於て露國公使は、佛國公使と提携し、露佛は共力して各種の利權に干與し、日本の行動を制せんと企てたり、一時漢城の市場に放賣せんとしたる、マチウニン名義の鴨綠豆滿兩江及び蔚陵島森林伐採權利は、市場より撤回されて露國政府の用達商アレキシフ總督の出入商人グンスブルク男爵を以て代表經營者として發表せられたり、京城より義州に至る西北鐵道は佛國シンジケートによりて布設せられ、佛國人ロンドンの名を以て其起工式を舉行したり、平壤無烟炭の採掘及其煉炭經營も佛國人によりて特占せらる、又安南地方より多量の米穀を購入する契約も佛國人との間に約訂せり、グンスブルク男爵は龍山に於て毛布及更紗製造の特約を締約したり、雲南シンジケートは三百萬元の借款を引受けんとせり、露佛が提携して朝鮮に一致の行動を取りたりしは、寧ろ滿州經路の外廓を築く牽制外交なりしなり。

之に反して日本の行動は一面に於ては露國政府に向つて、滿州撤兵の要求を

開始し、一面に於ては京釜鐵道工事に着手し、進んで借款の約を結ばんとし、日本臣民の特權及各種の利益を擁護したり、日本より軍器を購入したること、三井物産會社をして開城特産人蔘の販賣特約を成立したること、朝鮮に於て日本人銀行の信用券を流行すること、日本國民の朝鮮に於ける各種の企業は、漸く進取勃興したり、而して日本が英國と同盟したる結果、朝鮮に於ける英國の利益を尊重し、陰然露佛に對する日英の角逐は、滿韓を通じて常に對抗の行動を發現しつつありき。

此列強の對抗的競争を爲し居る際に於て、國王の外交術は主として兩端に連結して其一端の偏重を制するに在りき、故に宮廷に於ける外交官は何れも列強均一の親善關係を把持し、國王は其均衡を乘るの地位にありしが故に彼は表面紛糾せる交渉案件をも圓滑に經過し、獨り宮廷外交の成功に歸するの狀態なりき、然れども斯くの如きは朝鮮の一隅に於ける一時的狀況にして世界政策の變化と利害は、漢城王宮の注文の如く、若しくは國王の賢明によりて自由に左右せられざるなり、今や滿州問題は放火者によりて半島に迫り來りぬ。

(278)

(279)

漢城に於てパツロフ公使は馬山租借以來手を換へ、品を改めて要求を連發せり、就中間島在留朝鮮人民保護委任の如きは滿州經略の進捗の前提なりき、朝鮮政府は冷然として之を拒斥せり、彼は王宮に對して強請し得るが如くに政府に向つて成功せず、彼は非常に焦心せるが爲め、遂に露佛共同の勢力を提げ、日本が獲得したる銀行券問題及び將さに成立せんとせる借款問題に向つて咄嗟し來り、王宮の勢力を假り來りて銀行券の授受禁止及び雲南シヅケートより借入金金の契約を成立せしむべく企劃し、遂に數年間日本と提携の方略を以て外交の本位としたる外部大臣朴齊純をして内閣より去らしめたりき。

朴齊純の辭職は日本公使に取りて大なる損失なり、彼は眞に朝鮮の國土を安全に守るの國是は日本の外に策なきを信じたる一人なりき、彼が露國の南下を憂へ、國王に説くに日韓國防の同盟に腐心したるの功蹟は、日本帝國に於ては湮滅すべからざるの好意とせざるを得ず。

雲南シヅケート借入金契約は、王宮との約訂なりしを以て、遂に成功せざりしも、爾來露國は空前の大役に干繋せる、鴨綠江森林の採伐及び龍岩浦租借の企



劃を立て、彼の野心満々たるアレキシーフ總督が、茲に日露交渉の發端を要求するに至りて、漢城に於ける外交團は直に日本及露國の對抗を以て開始せられたり。

其の五

露國が滿州に於て多大なる兵力を擁し、宏大なる特權を護得し、且つ加ふるに朝鮮半島を威壓するの行動を益擴進するに於ては、當然極東の平和は保持し得べからず、日露の間に干戈を以て交はるに至るは自然の成行なりと謂ふべし。

是より先朝鮮政府は清國と通商條約を締結し、清國の要求によりて義州市開放の意あり、然るに露國は久く放棄したる鴨綠江上流地森林の採伐に着手すべく、先づ其經營に必要な地點として龍岩浦を撰定し、茲に多數の軍隊を駐在せしめ、廣大なる地域を設定し、朝鮮政府に迫りて其租借權を要求したり、鴨綠江森林の伐採は露國の特權なるが故に敢て不思議とするに足らずと雖も、其滿州に於ける露國軍隊の行動を以て推測すれば、龍岩浦租借の要求は公々然と滿韓侵略の野心を包藏せるものなり、是に於て朝鮮政府は一面は義州を開放して各

國の貿易市場と爲し、一面は此要求に對して狼狽畏怖して容易に應せざりき。

露國の要求は猛烈なりき、パウロフは外部に日參して要求の成立を迫り、彼は最早凡べての反抗を物とも思はず、全力を注いで要請したれども、朝鮮政府は終に應せざりしを以て、彼は終に内藏院卿との間に特約して租借權利の獲得を計りぬ、如何に王宮は政府の上に立つとは云へ、國際の公約を宮内によりて成立したるを見れば、アレキシーフよりの訓令が如何に急激なりしかを推想するに足れり、是時に於て露國は世界の視線に分明なる滿州の中腹よりは表面的撤兵を實行したるに拘らず、滿韓國境に於ては益兵力を増加せり、鴨綠江森林の伐採を保護する爲なりと稱して九連城、鳳凰城及龍岩浦には殆んど一旅團の兵力を備へたりき、斯くして日本を屈服せしめばアレキシーフの極東帝國は滿韓の大部分を包含せる領土を建設せしを得しならん、然らざるも日本は滿韓交換論や、中立地帯設定位にて外交上の勝利を制し得べかりしならん、而かも此豫想は全部誤りしたために、日本は依然滿州の全撤兵を迫り、又漢城に於てはパウロフの租借要求に反抗したり、東京政府とペテルブルグ政府との間には交渉の往復歩一歩

難局に向ひつつあるに際して漢城政府は日露の間に挟まれて何事も均衡より離れ去らざらんが爲めに彷徨的態度を以て経過したりき

國王は其初に於ては頗る樂觀したりき、假令露國をして龍岩浦を租借せしむることあるも、一方に於て義州市を開放する以上は、鴨綠江一帶の國境は列強の合兵を以て露國の專横を制することを得べし、故に大なる危険の漢城に發生せざる限り、又露國をして極度の憤怒を發せしめざる限りは、宮廷の特許によりて租借を約訂せしむるも不可ならずと、依つて内藏院卿李容翊と森林會社の代表者グンスブルク男爵との間に於て非公式契約を成立したりしなり。

蓋し國王は朝鮮唯一の外部大臣なれども、彼は國交を以て只だ利害の交換と心得、又世界の大勢より打算して外交の得失を計るに非ず、其の曾て亡命者の巨魁幾人を倒すを得ば全羅の一部を割讓して報酬とすべしと發言したることあるの外交家なり、故に宮廷の尊嚴を直接損傷する無くんば、龍岩浦を擧げて露國に割讓するも、左迄朝鮮の平和を害したりとも思はざるなり、獨立の體面を傷けたりとも想はざるなり、國王の樂觀と反比例を以て日露の兩代表者は格闘しつ

つあり。

漢城政府が殆んど喪心せんばかりに日露の兩端より攻撃せらるるに當つて、國王の感覺を刺撃したる論調の傳はるあり、そは滿韓の交換論是也

滿韓交換論とは滿州に於ける露國の優越權を承認する代りに、朝鮮に於ける日本の優越權を承認する妥協なり、是れ國王の唯一の外交術たる均衡を根本的に破壊するものなり、善く泳ぐものは溺る、餘りに外交の手段を弄するものは終に外交のために亡ぶ、國王の憂慮は龍岩浦租借よりも滿韓交換論なりき、彼は日露の強大を對手として掩壓し來れる低氣壓より脱却せんが爲めに、又日露何れよりしても過重の負擔を荷ふ無くして此局面を経過すべく焦心せるに際して、滿韓交換論の如く、若しくは中立地帯を定めて勢力圏を設定せんとすと云ふが如く、外交の危機は日々に迫り來りぬ。

露國は極力を盡くして外部に強請すれども、大臣の更迭に次ぐに不在を以てし、不在に次ぐに調査を以てし、遂に要領を得ざるを以て、龍岩浦租借の經營は、着々歩を進め、森林伐採は任意に實行せり、鴨綠江の上流及下流の沿岸に於て、露國

は恰かも其領土内に均しき行動を遂行しぬ、是れ日本に對して巨大なる侮辱なり、示威なり。

是に於て日本も亦た農商工部より許可したる平安北道森林採伐權を有する日清シンジゲートの經營を庇護し、義州市開放の聲明を迫りて該地に領事を駐在せしめたり、義州及龍岩浦に於ては日露は勝手に經營し、平和的妥協の望は漸く無くなるのみなり、ペテルブルグ政府と東京政府との間に於て前後一年餘に亘りて極東平和の保持を期待しつゝ、幾十回の交渉を累ねたりしも、終に空前の大兵を動かし未曾有の大役を發生するに至れり、若し彼のアレキシーフ、ベンゾラの徒をして此空想的帝國主義と投機的外交計劃を夢みる無くんば、又自然なる要求と不條理なる事業を起さしむる無くんば、又何等利益の成算なき宏大なる森林經營を發起する無くんば、或は滿韓交換説も成立したるやも料る可らず、中立地帯を定めて日露勢力の區寰を協定するに至りしやも知る可らず、然れどもパウロフの行動、グンスブルクの運動を以て朝鮮半島の平和を保つは固より、不可能なりき。

其の六

國王露國公使館より還宮せらるゝや、景福昌德二宮に還御するを欲せられず、荒れ果てたる慶運宮に入らせらる、慶運宮は曾て其祖宗李成桂の造營したる發祥の宮城なり、彼は其吉縁をトして居城を茲に定めたるのみならず、外交團の大部分は其周圍米英露佛獨の公使館は北西南に列在すにあるが故に恰かも王宮は各國共同保護の下にあるが如く、屢事變に際會したる國王の境遇として安全の思あらしめたり。

王は還宮後間も無く露國が其獨占勢力を撤し去りしを看取し、列國何れも朝鮮に獨力の行動を爲す無きものと信じ、王宮の造營、王妃陵の營役、並に皇帝の稱號を唱へ、年號を改め、國を大韓と稱したり、彼其乃父大院君の快活なる氣象を享け、又其妃閔后の外交的能技を訓練し、世界の列強が朝鮮半島に尤も閑却したる機會に乗じて、王の權勢を擴大ならしめ、朝鮮の獨立を強大ならしめたり、王の前に於ても、其後に於ても半島の黄金時代は實に此時なりき。

彼は列強の空虛に乗じて成功したりしを以て、以爲らく一國の獨立も、王朝の

尊榮も強大を制する外交宜しきを得ば餘り困難ならずと、故に彼は親ら其手腕の尋常ならざるに自惚れ、一時的成功を以て立國の基を作り得たりと爲し、頗る得意なりき、然れども列強の空虚なりしは、寧ろ半島よりも重大なる事件と緊切なる北京政府との交渉に餘力無かりしが故に、一時的状態に過ぎざりき、京仁鐵道の布設、西北及び京釜鐵道の布設權の要求、嶺山採掘權の競争、工業上の特權等、列國は昔日の如く王宮政事家と陰謀の聯帶者となり、若しくは漢城人士と政争に従事するが如きこと之れ無き代りに利權の要求は頻々として提起せられたり。

利權の要求と成功には、漢城政事家を酔はしむる利益の附帶せらるゝあり、王宮に於ても均しく是附帶の利益に向つて動きたり、國王は列強が昔時の如く鮮血を以て買いたる外交の特權を棄て、利益を以て勢力を争ふを見て甚だ御し易しと爲せり、彼は以爲らく列國にして嶺山鐵道埋築製造の如き經濟的要求を以てせば列強を制して王權をして益隆盛ならしむる易々たるのみ、列強の要求するものは必しも悉く之を與ふるに非ず、假令之を與ふるも彼等は利益の要求

を提起する毎に別樣利益の提供を以てするが故に寧ろ彼等を利用し、又彼等に利用せらるゝのみと、王の外交術は只だ王宮の安全にして尊榮なるにあり、王の最大目的は何等の危險無くして皇帝及宮廷の安寧を保つを以て獨立國の尤も誇れる最初の事業と思惟したり。

王は外交に巧なり、事實上の外交長官なり、然れども、彼は世界政策を達觀せるものに非ず、彼は漢城の外交團によりて世界の形勢を知れり、然れども彼は自國の國力と其地位とを知らざるなり、其王權擴張に成功し、其獨立に空前の壯觀を飾れる時代を経て、彼は列強が競争的に利權を獲んとするを見て、利權を以て列強の均勢を制せんと企てたり、故に彼は米國人の要求せる雲山の金礦、漢城市の電氣鐵道及水道權を特許して米國の勢力を利用せり、彼は英國人の要求せる殷山及遼安の金礦を許したり、佛國人には西北鐵道の布設權、平壤無烟炭の採掘權を許可せり、獨逸商人の金城金礦をも許可せり、露國は餘り半島に於て商工の權利を獲ることに力めざりき、日本は京仁京釜の鐵道布設權のみならず、嶺山、山林埋築、水産等の利權を要求するもの尤も多かりき、王は各國の要求を以て寧ろ王

の尊榮と邦の平和を維持するに便利なりとし、彼は各國の資本を自國に輸入し、外資によりて自國の富を開拓するに便益なりと思惟せり、彼は彈丸と白刃とを以て王宮に鮮血を注ぐが如き危險物に非ざる以上は、各國人の要求と運動は寧ろ歓迎したり。

然れども國王は外資の輸入、外人の利權に伴ふ強大の國民的勢力の侵蝕を輕視したりき、一國の利權を舉げて外國に與ふるによりて、其國家と國民は靈魂無き死尸的狀態に退衰すべきを了解せざりき、只だ此時代に於て日本國民が地勢の便捷と言語風俗の利便あるを以て、多數の移住者漸く増加し、其鐵道の布設により日本國民の殖民勢力益膨脹するを見て、王は憂慮の餘り政府をして條約地以外に外人の租稅を禁止すべく督勵したりしも、亦必竟日本殖民膨脹の防止に外ならざりき。

上下交利を征す、國王の金錢を愛する内外を問はず其私腹を肥やしぬ、而かも愛錢心は利益の利用と分配に巧みなる、屢金錢を以て外交機密を探情し、又外人を使用して不時の功名を博し得たることあり、故に外國の利權要求は王の愛錢

心と外交術に多大の關係あるが故に、王は常に此等要求の提出毎に親ら解決指揮せずんば已まざりし、上下交利、内外交利とは當時の光景なりき。

若し朝鮮と列強の關係をして利權の獲得のみを以て、永久平和に經過せしめば、假令朝鮮の運命は外資の手中に歸するに至るべし、然れども露國の如きは既に滿洲に多數の軍隊を駐在し、漸次半島を威壓するの行勸を取りつつあれば、王の利益分配策も、遂に甚大の利害を有する強國を満足せしむること能はず、日露交渉開始せらるる頃には、宮廷外交は一步を轉進して、一は日本と共力して國防の盟約を結ばんと企て、又他方に於て局外中立若しくは列強共同保護の下に自國の安全を計れるが如く、其表裏相反する外交政策を立てたるが如きは、王の日露に對する外交の秘訣なりき。

彼は露國に對して共同保護の成立を哀求し、日本に對して國防同盟案を以て鼻息を窺ひ、親善を粧ひたり、皆な王の慣用手段なり、二者俱に眞面目なる王の誠意より出でたる外交計劃に非ざるが故に、日本及露國は恰かも王の外交的餌食に欺かれて遂に何等獲ること無かりき、鳴綠江問題漸く難局となりて、王の餌食

も已に腐敗し、日露は之に振り向きさへ爲さざりし、事破れて日露の大役に至つても尙且つ王は往日の成功を夢み、屢外交術を以て自國の運命を作くらんとせしも、事毎に失敗せり、彼は大院君及王妃去つてより、外交に成功したる偶然なる成功を以て國の強大を致せしものと誤解したる也。

日本の危険を防かんが爲めに、屢亡命者處分を企圖し、世界の同情と待遇を得んが爲めに、屢大使及公使を世界に送遣し、宇内の形勢に通曉せんが爲めに、言語の才ある幾多の官吏を愛寵したるが如き、其多智多謀なる固より、凡庸人君の企及ぶ才幹に非ざるなり、而して王の智謀も遂に實力を制し、強力を防く能はざりしは已むを得ざるなり。

其の七

北清に拳匪の兵亂あり、各國動兵して鎮定の任に當れり、之れと同時に韓南に活貧黨起りて諸邑響の如く應ず、機會あれば日本亡命團は變亂を教唆し、聲援するの風聞と疑懼深く、王宮にあり、王以爲らく若し日本にして亡命者を養ふ以上は此危憂去ること能はず、亡命者と絶縁の證據を得ば、國を擧げて日本と同一の

行動を取るも可なり、國土の一部を割讓するも可なりと、故に彼は國防同盟案と亡命團處分とを交換すべく計劃したることありし、彼は亦露國の強大を恐怖すること甚しく、其露館行幸以來如何してか露國の勢力を制するの智慮を盡くし、對露政策として唱へたる局外中立案を喜んで之を行ふために多大の利權を犠牲としたることさへありき、王は日露の國交斷絶する迄、此二個の外交政略は恰かも手品師が二個の種品を以て技曲を弄するが如くに使用せられたり。

日露兩國の交渉は、王の外交術によりて何等緩和の影響無くして益失望的に轉進するのみ、二國は遂に未曾有の大軍を動かして干戈を交ゆるに至れり、戦火將さに開始せられんとするに際して、國王及其政府大臣等は、朝鮮を以て戰場より避けんと企望を有し、宮廷の密使は芝罘に抵り、各國駐在公使に訓令するに、朝鮮は日露兩國の斷交と戦鬪に何等關係なきが故に、嚴正に局外中立を守るべき旨を以て、各國政府に通牒したり、而かも其瞬間に於て王は日本動兵の迅速にして且つ漢城を占領するに速急なるべきを豫想し、一時的苟安を得んが爲めに、少くとも敵國の待遇を受けざらんが爲めに、彼は二三の臣僚に命じて、日韓防禦

の同盟を締約せんとまで企てたりき、何事も彼は彼以外に目的無く、政略なし、故に戦時に對する局外中立の計劃も、日韓防禦同盟の企圖も、必竟するに彼及彼の家族を第一安全ならしめんと欲する希望に外ならず、斯る不眞面目なる自己的外交が、世界政策の變動に際して演せらるるに於ては、直に滑稽を以て終はると知るべきのみ。

果然王の目的は其理由とする處道理なきにあらざりしも、其一も、其二も全然失敗に了りぬ、而して日露の戦火は開かれ、日本軍隊は漢城を占有するに至りて、朝鮮は日本の要求と恩恵とによりて其力の義務を負ひ、又其人民は極めて幸福を以て生業に安するを得たり。

戦闘の経過は朝鮮王並に一般の想像外にも、悉く日本の捷利に歸着し、海陸の戦捷は幾月ならずして進捗したり、王及王の近臣等は戦火の未來に危懼を懷き、或は上海に密使を送くり、或は北京に視察者を送くりて戦後の計劃に奔走したり、其旅順陥落して戦局益露國に利ならざるや、密使を歐州に巡訪せしめて朝鮮の立場に同情を買はんとまで企てたりき、是に於てか知るべし、朝鮮王及び一般

(292)

の人民等は、一國の領土を保持する真正なる價格は外交にもあらず、利益にもあらず、一國の全國民に共通せる獨立精神の存在と事實的國民勢力の強大によりて保持せらるべきを全く了解せず、戦火中に於て、早くも傳來の外交術によりて生命を繋かんと欲する輕薄にして不道徳的なる計謀を行はんとするが如きを一國の見れば、戦火の終局と俱に朝鮮を以て勝利國の保護、監督、指揮の下に置かざるを得ざる所以を了解すべし。

ポーツマウスに於ける日露の平和條約は、其仲裁者にして且保證人たる北米合衆國大統領ルーズベルトの面前に於て締結せられ、朝鮮は純正なる保護國に承認せらる、依つて日本は其宗主權によりて協約を結び、外交の權を制限し、各般の政勢皆な統監の監督を受くべく約定せられたり、時局茲に到りて尙ほ且つ王は黄金時代の殘夢未だ醒めず、彼は越大の勞力によりて得たる戦火の結果を見ること暴民の變亂と均しく、何等の善意の感謝を表する無く、又世界の趨勢をも考ふる無く、ヘーグ平和會議に使者を送くりて半島の獨立を回復すべく企てたり、斯る滑稽なる手段も往時に於ては相手とせられたることもありき、然れども

(293)

日本統監は此企を以て大局を誤る最悪なる行動と爲し、終に其責を糺して王の執政を引退せしめ、王の位を譲らしめ、軍隊を解散し、諸政を指揮する第二次の協約を締結したり、寧ろ此處置は當時に於て頗る寛大なる日本の好意なりとして世界は觀望したりき。

此以外に於て、王は世界に向つて自國の國民は日本の保護を好まざる證明として、儒生及無賴の土班等に内命して反抗的暴擧を企だてしめたり、彼等は其反抗を吹聴して世界の同情ある強國によりて日本の保護權を制限するやも測られずと爲し、斯る無益の反抗を爲さしめたるなり、今や其乃祖よりも聰明、其妃よりも敏腕なる國王は後の十年間に於ける最大なる功業と權威を放擲し、彼が曾て其黄金時代に於て造築したる壯麗なる王宮に於て、太皇帝として退隱せらる、德壽宮は五百年前祖宗氏の漢城に都せし最初の王宮なり、而して今や彼は茲に保護國の先王としてあり、王曾て自ら誇つて、曰く世界に於て外交に巧妙なるもの朕とツピルヘルム二世あるのみと、知らず彼はコンスタンチノールより地中海の海村に落魄したる土耳其前帝と相肖る何ぞ太しき。

## 王妃の一生

朝鮮近世史より王妃の政事的生涯の記録を取り去れば、近世史の大部分は其存在を失ふべし、又最近の外交史より彼の外交史料を抹殺せば、半島に於ける列強の角逐は殆んど暗黒とならん、大院君は公人として巨大なる闘士也、然れども近世の朝鮮を作成し、近世の外交を産出したるものは王妃なり、彼は實に鎖國攘夷を以て中興の建業と心得たる大院君と相對し、二十年間開國事大の外交を發揮したる政事家なり、若し朝鮮に於て世界を知り、文明を了解し、強大を尊重し、近世的國民の狀態と勢力を知れるものあれば、是れ王妃の政治より胚胎したるものなり。

彼の一生はカザリン帝の如き慘刻なる事變に富めり、而して彼の冷刻なる性格と權勢を愛する熱情は、屢其其事變の焦點となり、中心となりたりき、古來女性の權勢を好むものにして、彼と均しく榮誇なる生活を送くり、俗惡なる生存を永からしめば、其周圍に於ける各種の腐敗は、一國をして回へす可らざる變亂を誘



發せしむること少しとせず、彼は其王宮に於て鮮血を見たること前後三回なりき、彼の族藉、黨與、寵人の大半は鮮血を以て葬られたりき、彼は女性の神經特質と弱點を遺恨無く表白したり、彼は近古に於ける兵亂の神の如く、其一生は内外大小の變亂を以て粉飾せり。

哲宗大王を後繼せる年少王妃として驪州より王宮に冊立せられてより約十年間は、大院君攝政の世にして、彼は其間實に冷寂たる生涯にありき、彼は幼にして孤也、其郷里にあつては族父の家に寓し、冷やかなる家庭の間に生長したれば、此十年間王宮孤獨の生活は之に比して餘りに悲しきことに非ず、彼の寂寞を慰めには雲峴宮府太夫人あるあり、彼の族人にして王宮にあるものも少からず、況彼は其愛讀せる左史傳に長夜を更かしぬ。

其一旦攝政太公と權を争ふに至るや、柔和にして沈着なる女性は、深刻なる機略となり、殘忍なる政略となり、猛勇虎の如き巨人と相撃搏して王權の存在を争ふに至りぬ、大院君不平を懷き、楊州に去るや、此機會に乗じて彼の政事的手腕は活動し來り、遂に大院君をして攝政を棄てて、城外に閑居せしむるに至れり、彼は

此時より王宮の王の上に立ち、王を指揮し、事實の大王となれり、彼は其政敵の手によりて建創したる制度を破り、外戚を以て自己の權威を守護し、兩班の弟子を重用し、王宮の榮華を好み、祈禱、燕遊、賣位、賣官、一代の風教も滔々として墮落し去れり、彼は自己の勢力を保持するために、又政敵たる大院君と對抗する爲めに、心血を注いで其黨與を收攬し、其二十年間は強大勢力を利用し、常に王宮の保護者、自己の後援を得るに巧妙なる手段を盡したり、彼は政治を以て朋黨の争具と心得へ、又朝鮮傳來の外交を活動せしめたるに於て、近世の代表的政事家とも謂ふべし。

彼は早く温かなる家庭を去り、久しく他人の扶養に頼りて生長せり、天性聰慧なる上に冷刻なる世態、人情の苦酸を嘗めたるが故に、其王宮に於ても克く王との不和を忍耐し、攝政の專横をも克く忍ぶを得たり、已に權を争ふに至るや、人心の歸服に力め、名門大族の歡心を買ひ、其の一時大院君をして手を拱して何事も爲すを得ざらしめたり、權勢を愛するは朝鮮婦人の特色なり、彼が大院君をして攝政より退かしめたるは王宮に於て寧ろ自然の要求なりしならん、而かも其成

功を以て王妃自ら之を收め得て以て王をして徒らに空位を守らしめたりしが如きは王妃の失徳ならずんばあらず、是より王宮は二十年間王妃及其一族の邸宅に變化し、日常の政務、國際の交修、悉く王妃によりて行はれたり、彼は權勢を愛する餘り、祈禱を喜び、宴遊を好み、卜筮を信じ、其親ら寵臣の近侍を喜ぶに反して、王の身上に嚴密なる拘束を行ひ、宮女の風儀を極端に監視するが如く、甚だ悲しむべき醜聞の屢王宮より發生するも遂に肅清することを爲さざりき、彼は實に代表的朝鮮の女流なり、近世墮落せる朝鮮政事家の代表者なり。

(208)

### 前の十年

金剛山より流れ来る漢江の北流は、古のソシモリを経て本流に合し、五臺山脈より流るる南江は寧越丹陽忠州の沃野を過ぎて江勢漸く大なり、驪州に至つて水勢緩るく且つ廣く江灣を爲す、一帶の楊柳綠髮水に垂れ、驛市櫛比し、處々丹楨紅軒の聳ゆるを見る、此地則ち閔氏の貫郷なり。

閔氏は由來朝鮮兩班の列にあり、然れども名門大閔と謂ふに非ず、二百年前に

(209)

於ては宋尤庵の高弟に閔鎮重なるものあり、爾來尤庵の學系を繼けり、學者屢輩出す、王妃の父は閔致祿と稱す。

閔致祿の邸は京城安洞に在り、妃生れて八歳にして父と母を失へり、母は繼配韓氏なり、依つて閔致祿の家を繼ぐものなし、族人閔升鎬を養ふて嗣かしむ、彼の幼少を知れるもの曰く、彼は幼にして其父母を失ひ、其一家を族人の手に委するに至りし後と雖も、前主公の如くに家政に干與し、諸婢を指揮し、好んで家事に關與せりと、故に諸婢喜ばず、陰に稱して小叔子と言へり、彼は小きき叔母オヤジとして尊敬せられたるも、其機警明敏なる風采行狀は、幼時より煥發したり。

朝鮮の家族制度は絶對的に男系本位なり、故に彼の祖先と血統を祭るべき兄と弟とを有せざる爲めに、彼は族人によりて其一家を支配さる、斯くの如き狀況は王宮の母として好個の適例たるを失はず、幸なる媒酌は大院君府大夫人によりて成立す、彼は均しく閔族の出にして、其温良貞淑なる性情は、痛く雲峴宮及王族一同に敬慕せらる、彼は其兒の爲めに尤も良き配偶を撰ばんことに注意し、遂に閔致祿の女を見立てて推舉しぬ、父なくして兄弟なし、況んや族閔の系統なき

閔族より王妃を冊立することは王宮に於ても、又雲峴宮に於ても、他日軋轢争闘の憂なしと爲し、遂に意を決し、迎へて王妃の賀禮を舉行しぬ。

當時王は十四歳の少年なり、翼宗以來三朝の外戚は各戚に割據し、積年黨禍の弊は僅かに攝政大院君によりて變革せられつつありき、大院君の威望と勢力は、古今無比の人望を以て統合せられつつあり、内外の諸政悉く此人によりて決斷せらる。王は其母たる府大夫人の媒妁によりて王妃を迎へたるも、彼は尙ほ政事を了解せず、又家庭を知らず、悽婉なる其配偶者に對して全く他人と均しき情交に過ぎざりき、王の無邪氣と攝政舅父の勢力と相對し、彼の世話好きなる沈黙すれども敏捷なる神經は動けり、看過すれども腹の一物は躍れる王妃に取つては、新しき王宮の生涯は只だ忍耐のみ、不調和なる沈黙なるのみ。

彼は其親類よりしては無能なる木偶として見られ、世間は王宮に於ける此薄運者に同情を表し、彼の族人中偶ま仕官するものもあるも、攝政太公の指揮に甘從し、甚しきは閔升鎬の如きは不幸なる、寂寞なる王妃の下に行かずして雲峴宮の奴隸の如く使役せらるるの光景に過ぎざりき。

王妃の入興ありしは實に丙寅三月にして、王と和合成りしは王子誕辰の年則甲戌年なり、慶應二年冊立より明治七年に至る九年間は大院君攝政にして内外の政務全く攝政によりて執行せられたり、此九年間王宮内に於ける王妃は實に眠れる狗の如く、彼は王宮内に於て何事も忍耐したり、其宮人季氏の腹に完和君誕生し、王ただ之を愛し、大院君亦た完和君を以て王世子に立てんと欲するの意明かなるや沈黙なるものは活躍し來れり、宮殿に於ける仁惠の人、靜肅の妃は、猛獒なる虎の如くに動きたり、如何に女性なりとは云へ、彼の如き柔和なる女流が、虎豹の群を歴しつゝある巨象に向つて格闘を挑む勇氣を發せんとは何人も想像せざる處なりき。

女性の變化は其半ばヘステリの也、王妃をして彼の智慮と勇氣を盡くして攝政太公と相戦ふに至りしは實に此間の變化に外ならず。

王と和合し、王子誕辰の年に至るまで、彼は王宮の深殿に埋没し、彼の性格を發表したる大事件を見ざりき、然れども其親戚に對する彼の注意配置、警戒を想見すれば、其謀略の深遠なる、其打算の周密なる、流石に一代を通じて比儔稀なる政

事家なるを知るに足るものなり。

大院君の如き人物、攝政の位にありと云ひ乍ら、彼の一族一門は容易すく王妃の手によつて顯要の官職に就かず、閔升鎬、閔奎鎬、閔臺鎬の如きは王妃の下に集らずして雲峴宮に阿附佞從し、少しも王妃の外族勢力を張るが如きを爲さしめざりき、外族を一丸として一大勢力を作るには共同一致を要す、故に彼は族人に對する唯一の要求は同族の結合なりし、後年王妃政權を左右するに至つて此同族の勢力は殆んど大院君をして嘆賞せしめたり。

彼は其寂寥たる宮中生活中に於て、王の冷刻なる情交に就て何等の不平を漏さず、又王の無能にして攝政の壓抑に就ても何等の不快をも示さず、屢恩惠を宮人に施こし、私恩を宮中に蒔き、清逸にして閑雅なる行狀は、次第に宮中に於て謳歌せられたり、斯くして人望を集め、同情を作り、加ふるに讀書に耽ける珍らしき嗜好は、寧ろ女性として餘りに高潔に、餘りに淡泊なりしが如く想はしめたり、然れども是皆な彼の虚偽也、政事的表情也、深慮ある謀計なりき、彼の忍耐と行動は甚しき險惡を包める偽善なりき、其容貌の清新なるは其血管の少量なるが爲

めなり、其沈黙なるは謀略に耽けるが爲めなり、彼は後の二十年間の尤も慘刻なる、尤も危険なる政事生活に於て發表したる源泉を作りつつありたるなり。

彼は虫も殺さぬが如き靜逸なる生活に於て、年少なる王が宮人李氏を愛すること甚しく、遂に其腹に王子誕生するに至りて、嫉妬の情抑へ難く、其王子を毒殺し、併せて其母を慘殺せしめたり、王の宮女に情交あるもの殆んど生命を保つもの少く、就中凶烈を極めたりしもの宮女金尙宮の身上なりき、彼女は王の愛寵を被むり、王其乳房を手を以て撫したりしと云ふの故を以て、彼は金宮女の乳房を切斷し、其鮮血の淋漓として迸出するを宮女の面前に目撃せしめ、其血脈の衰滅と其痛苦の餘り沈滅するまで極悪なる惨行を敢てしたりき、彼は自ら其罪惡の報酬として最悪なる最後を遂ぐる迄、宮中に於ける悲惨の蠻行は實に清麗逸黙なる王妃によりて行はれたり、而かも彼は未だ政事生涯に入らざるに當つて斯も行爲を犯したりき。

王妃は王の愛情を得ざりし時に於て、王宮に於ける彼の性情は柔和なりき、宮殿に侍せる數多の女官は妃の恩惠を謳歌し、彼が何事にも同情を表し、微細なる

事柄まで注意し下情に通じて且つ臣僚の不遇を憐み其舅父たる雲峴宮に對しては外戚を擧げて追従伺候の禮を執らしめたりしに拘らず一旦王宮の家庭に變化を起こすや彼は直に其攝政の權威に反抗し進むで一世の英雄と權勢を爭ふの手段を講ずるに至れり。

彼は王に勸むるに大院君の執權を王の手に回復すべく彼は其族戚たる閔族を懲慝し使用して大院君の權勢に反抗すべく或は間諜を放つて雲峴宮の家庭を攪亂し或は宮人を利用して大院君の内行を探情し刻々に對抗の行動を遂行せり當時大院君は外は佛米艦隊の來襲を防止し其重望一國を壓し内は兩班名門の黨閥を制し猛斷果行一世をして畏怖せしめたり國王あれども名實の大權攝政の掌裏に在り若し王にして王妃の如く銳敏ならしめば又王妃をして攝政の壓迫に忍ぶ能はざらしめば王宮内の變亂は後代の外交事件の發生を待たずして發表せられたりしならん又前後二十年間の年月を要せずして決定せられしならん李氏王朝の御殿騒動は前代に於て必しも珍異なる出來事に非ず光海君の謀叛燕山君の廢嫡は其顯著なる事件なり王妃が異常の忍耐と多大の痛苦

を支へて大院君をして遂に暴風の壓抑を試みることに無からしめたりしは彼の忍耐なりと謂はざる可らず。

王妃及大院君の反目は寧ろ大院君の王妃を見る餘り重大ならざりし爲め又王妃の忍耐が餘り沈靜なりしたため速急に暴發せざりき然れども此間に處して王妃が如何に大院君の執權を打破せんが爲めに戰鬥を準備し努力したりしかを推想するに足るものあり。

王妃は世子誕生あり宮女李氏の腹に完和君誕生あり稍もすれば攝政が完和君を以て太子に擬するの狀あるを見て彼は端無くも彼の性格を一變する程の決斷と奮發を以て之を破壊すべく力め歴代の慣例により北京朝廷に密使を送りて王位繼承の正統を内請し北京朝廷の力を利用して以て完和君を排して正統の血統を立つべく哀願せしめたり。

此密使の重任を荷ふて北京に入るものは李裕元なりき彼は春秋入貢の交修を名として北京に到り北京の大官李鴻章に厚く禮し説くに大院君の權威專横を極め王室の危機を論じ完和君の庶腹にして王妃の賢明良淑なるを盛に讚賞

し、王位繼承の正統なる血脉は完和君に非ずして王妃の腹より誕生せる王子にあるべきを推奨したりき、當時北京政府は外交の難局屢發生し、世界の強大南北より迫り來り、東洋の平和殆んど支へ難きの形勢なりし際、朝鮮王の攝政が江華戰役以來頑然として鎖國の政策を牢守せるを見て、深く危懼を懷き、此王位繼承の認可を利用して以て清韓の藩屬關係を維持し、且つ王妃を援けて大院君の權威を制せんと企てたり、故に李裕元の要求は容易に成功し、彼は王世子の誕生を祝し、並せて其世子たるべき承認書を携へて歸りぬ。

北京政府の此援助は王妃に取つては最大有力たり、彼は已に此後援を得たるが故に何事をも隱忍したる昔日の態度を一變し、李裕元をして大院君執政を彈劾せしめたり、則ち東萊府使鄭顯徳の罪惡を劾疏せしめて以て大院君の鎖國政策を打破すべく企てたりしが如きは頗る機先を制したの觀あり、彼は之によりて北京政府後援の存在を測知し、又之によりて大院君が全國の人心を支配したる對外政策の權威を破壊せんとしたるものなり、其智慮ある計劃と深謀ある行動は、遂に大院君をして憤然起つて城外に退かしめたり、彼は若し大院君によつ

て王宮内に巨大の變亂を見るが如きとあらば、北京政府の後援を借つて之を鎮制し得べしと自信したり、而して、大院君が飄然として揚州に去りしは實に此二者の奮闘を開きたる最初の序幕とはなりぬ。

大院君攝政を棄てて揚州に去るや、漢城の政界は紛擾を極めたり、權威の高大なる前古未だ見ざるの形勢を以て城外に出で行く、市民は早くも王宮の變亂起るべきを豫想し、一面に於ては大院君の還宮を疏請するものあり、攝政の還宮を絶叫して以て自家の利達を謀るものあり、儒生王宮に伏して父子の人倫を説く儒生あり、又一面に於ては大院君の出去に乗じて王妃の盛徳を歌ふものあり、外族諸國は、此時機會失ふ可らずと爲し、樞要の官職に配置せらるるもの漸く多く、攝政の還宮と否とは大院君自ら好むで爲す處にして王宮は進んで攝政の復權を請ふに及ばずと爲せり、二者の間争闘の間隔次第に遠かり、王宮と雲岷宮との間に於ける橋梁は全く中斷せられたり、若し王妃にして普通の女性ならしめば、賢明なる徳操によりて王室の平和を回復するに努力せしめば、彼は雲岷宮大夫人(即舅母)に頼つて以て攝政の還宮を求むるを以て順當とす、然かも王妃の爲す

(308)

こと事毎に相反したり、彼は最初よりして攝政の退去を迫り少くとも自ら退去すべく餘儀無くならしめたり、而かも天下擾然として二者の成敗を觀望し、鼓吹し、喧争しつゝあるに際して彼は尤も冷静なる決意を以て奮闘すべく用意せり。彼は大院君の施政中尤も重要な日本との修交杜絶を回復し、日本の要求に従ひ、通商條約を締結すべく、日本使節を迎へしめたり、外交を閉鎖し、外人を攘驅するは、大院君の威信なり、權力なり、又一貫せる政策なり、大院君の權勢と威望の大半は、實に此對外政策の外形によりて支へ來りしものなり、然るを彼は之を排斥して先づ日本との修交を約せんが爲めに黒田全權大使を引導し、其應接交渉の重任を以て金綺秀に與へたりき、大院君の憤怒は尋常ならざりき、彼は此憤怒を見て中心欣悦を禁じ能はざるもの如く、益鎖國の結を解き、世界との修交條約を締結すべく思考せり。

黒田全權大使の要求は、實に永宗嶋砲臺より砲撃に對する問罪的使命なりき、彼は大使の要求を容るるのみならず、進んで日本に修信使節を送致すべく宣明しぬ、大院君は此状態に憤るの餘、楊州より徳山に去り、徳山より石坡山莊に移り、

(309)

煩悶幽情遣る漸無く、爆函を閔升鎬邸に送くるの悪戯を行へり、此悪戯は成功して閔升鎬父子爆火のために落命せり。

閔升鎬は王妃の近族なり、弟なり、王妃黨の首領なり、王妃の股肱なり、才敏機略ある外族の首腦は、實に二個政事家の争闘場裏に於て犠牲となれる最初の生命なりき、彼は此企を以て大院君の使嗾なりと信じ、誓つて其復讐を行ふべく決心し、其還宮の成べく遷延し、其遷延せる間に於て深刻なる反撃を試たり、若し尋常の婦人ならしめば、其族長の横死に畏怖し、退て一身一家の平和を保つのに歸るを以て正當とす、然かも彼は何等の反省無く、恐怖無く、復讐、反撃を遂行するに至つては、彼の心血は實に野心、虚榮、權勢を以て充塞せりと謂ふも不可なきなり。大院君の庶子に李載先と云ふあり、才略あり、大院君深く愛す、偶彼が伴友中安東、趙某等叛逆の陰謀ありと密告するものあり、王妃は奇貨措くべしと爲し、直に糾問して死刑に處し、以て閔升鎬の横死に答へたり、朝鮮近世史は實に這般の光景を縮圖としたる一幅の畫なり、近世朋黨史は斯くの如き事實を撮影したる寫眞なり。

是より王妃と大院君との競争は次第に激烈を極め、次第に因果相累なりぬ。彼は已に大敵に向つて辛練なる戦闘を開始したり、彼の下に集まる味方の内に於て最大勢力は兩班なりき、彼等は祖先より以來、兩班の位置を濫用して官位職祿を得て生活とし、榮養としたり、然るに大院君は自己の權勢を張らんが爲めに、國權の統一を期するが爲めに攝政以來兩班の祿を失ひ、位爵を得ざるもの多く、落魄浪遊して何時かな回勢の機會を待ちつつありき、今や此状勢を看取せるものは王妃なり、彼は其政敵たる大院君の事業を破壊するは今日にありと爲し、其王世子の爲めに慶科を設けて兩班の子弟を登用し、或は事に托し、物に委ねて名門舊家を興こし、甚しきは金錢に代ふるに官位を以て縉紳を招致したり、之が爲めに久しく屈服せる兩班の不平は洪水の如くに流決し、王妃の下に集り、王妃の勢力俄然として膨大となり、王妃の賢明を賞讃するもの益増加せり、大院君の朋黨絶滅の政策は王權擴張の基なりし、王妃は之を自家權勢の伸張に利用し、累ねて朋黨の弊を大ならしめたり、黄金を散らして黨與の羽翼を張り、人才を濫殺して勢力の擴充を謀り、宴遊に耽けつて面目を壯大と爲す、政敵は之によりて

一旦能く之を倒したりしと雖も、後の朝鮮政事家は滔々として利達をのみ是一生の願と爲し、國際の利害をも利用して一國の精華と本領をも棄てて顧みる無き迄に腐敗し、後の王宮は前代未曾有の慘劇に際會し、後に二十年間に於て一國を擧げて兩班に蹂躪せらるるの惡政を見るに至りしは、實に王妃の失徳に歸せずんばあらず。

### 中の十年

歲月夢の如く走り、權勢の消長眞に測り難し、大院君は楊州に退去したれども、還宮の使者未だ來らざるなり、更らに徳山祖先の陵を拜せんとて去りぬ、王宮に對しては絶縁的旅行の如の思はしめ、祖先に對しては訣別的奠拜の如く奉告せらる、王にして涙あり、血あるものならしめば、親ら來つて還奉を勸むべしと豫期せられたりき、而かも王宮は傍視するのみ、寧ろ之を懲誼するの狀あり、彼は徳山旅行を以てすら且つ王宮の反省を惹き起さざるを見て、纖弱なる一女子のため、に斯くの如き冷刻なる侮蔑を受くることを豫想せざりしなるべし。



大院君攝政の位地を空ふること五年間、城北の石坡山莊は、花咲き、鳥歌ひ、危壁天を摩し、風雲を招くが如し、山莊は寂寥として塵到らず、謀士日に散して文墨の客亦稀なり、此間に於て政堂に立つものは閔氏に非ざれば外族の引援によつて登用せられたるものなり。

明治九年日本使節花房義質來つて通商修交の約を要請し、次て朝鮮は修信使金綺秀を送くりて、金宏集を派し、日韓の間漸く親善となり、開國の議初めて決定す、是に至つて大院君の鎖國政策は破壊せられ亦痕跡を留めざるに至れり、今よりして當時の形勢を推想すれば大院君の鎖國は假令政權統一の上に一夫威信を加へたる莊嚴なりしと雖も、又江華前後の戦鬪は朝鮮有史以來稀なる成功なりしと雖も、世界的勢力の波及は到底之を防ぐ能はず、彼は只だ國際競争の間隙を利用し、天祐の如き倖僥を得て朝鮮獨り國を鎖さずを得たりとせり、然れども大院君の偉大を以て尙且つ避く可らざるは近世的大勢なり、故に當時若し王妃の開國政策無かりせば、朝鮮半島は世界強大の壓迫によつて或は分割の運命となりしやも知る可らざるなり。

王妃は初よりして世界の形勢を洞察して開國の大計を定めたるに非ず、又近世の文物を用ゐんが爲めに外人との交際を聞きたるに非ず、彼は大院君の政權を破んが爲めに北京朝廷の後援を借り、北京政府の指揮に従ひ、日本との修交を斷行したるのみ、彼は朝鮮人を教訓し磨鍊し、殆んど朝鮮外交の元則たる事、外交を善く運用したるに過ぎず、強大なる邦國を利して以て國の平和を保つは朝鮮古來の慣用外交なり、彼は巧みに此政略を運用したるため、流石一代の英雄も空しく手を撰して反撃を試みる能はざりき、爾來王宮の諸政、政堂の大權を擧げて自己及び自己の族戚に收合するに至りぬ、喩へば大院君は朋黨を制し、兩班を壓し、權勢皆な一人の所有と爲したるに反して、王妃は外族並に黨與の手を経過して收攬せり。

外族及び黨與は興られたるものに満足せざるなり、大院君の回勢を防禦するの手段方法は益多般となれり、王妃の勢力盛なれば従つて榮華を飾り、尊榮を更張するの慾望は益多大となれり、一人顯要の地位を占むれば一家顯要ならんとす、外族及其黨與が王妃の野心と自己の慾望を充たさんが爲めに前後八年間、明

(314)

治八年より明治十五年まで國力を消耗したるもの實に驚く可き巨額に達したり。王宮の内裏に於ては王は木偶の如く沈黙して何事にも干與せず、宴遊、祈禱、祭禮、是れ宮殿の日課なり、歌舞に長したる李範晋、卜筮に巧みなる李裕寅、祈禱に靈驗ある神靈君、王宮舞踊せる宴席場と化し、經を讀み、祭文を語り、咀文を叫ぶ寺院に變せり、僞れる豫言者は郡守參奉の仲買人となり、盛粧せる貴公子は宮人の情交を争ふ男娼となり、淫穢なる空氣は宮殿の太平を腦殺し、狡猾なる大官は賢明なる王妃の盛徳を讚美し、佞奸なる雜輩も殿上の英雄となる、斯くの如くにして官爵を賣つて其費を誅求すれども官爵に限りありて虚榮には限り無し、民の膏血を絞つて尊袴の資に充つるも人生慾望の下には膏血も亦た永續せず、天下の倉廩より徴して以て王妃黨の勝利と勢力を謳歌するものあれども倉廩已に空虚となれり、王妃は榮華權勢の爲めに殆んど醉殺せられたるが如し、彼は其處女たりし安洞郎の小叔子たる當時を追憶したらんには、彼は必しも徒跳して國望山中に奔亡せざりしを得しなるべし、又或は三角山の麓に於て敵人の刃の下に血を無かりしなるべし。

(315)

壬午の兵亂は極めて奇抜なりき、給米を要求せる多數の軍隊は武装して王宮に亂入し、王妃黨の邸宅を焼き、大官を殺害し、日本公使館を焼打ち、數日間漢城市は兵火の巷に變じたり、此兵亂は大院君の指揮によつて起り、大院君の指揮によつて鎮定せり、其疾風の如くにして始り、疾風の如くにして静まり、一舉して王妃黨が顛覆せられたるよりして見れば、王妃及其一族が如何奢侈虚誇を極め一般人民よりの怨府たりしやを知るべく、若し當時清國軍隊來る無くんば大院君は王を廢し、王妃を滅ぼし、李氏王室に一大變革を發生したるなるべし、王妃は此亂民の襲撃により、又大院君其巨魁なることを知るや、危険の迫り來るを覺り、宮女に變裝して王宮より逃れて尹泰駿の家に入れり、一説に曰く沈相薰自ら王妃を背負うて門を出でて尹宅に入り、僅かに常人の輜輿を借り、花開洞、閔應植邸に達するを得たりと、彼は市民の避亂するもの續次たるに乗じ、閔應植、沈相薰等を伴ひ、恰も避亂者の如く群衆の間より逃れて驪州、閔泳韶の邸宅に到着せり、七月の炎暑、燒くが如し、避難者漢江を溯るもの漸次驪州に來るあり、大院君の物色を怖れて閔族皆な色を失ふ、漢城より追手の搜索急なるを聞き、寓留すること數日にし

(316)

て忠州忠湖院に向へり、忠湖院は沈相黨の別荘あり、郷民沈相黨を崇拜するもの多し、一行先づ居を閔炯植邸にトし無名の珍客團は時勢の推移を待つ可く定めたり、適ま忠湖院の亂民往年閔炯植の虐政を怨むもの鄭文五なるものを推して首領と爲し亂民來りて閔邸を襲ふ依つて彼等は茲處に久しく滯るの不利なるを慮り亦去つて六里の北方を尋ね、艸を分け、山を登り、溪谷を涉り、漸くにして山間の一村に着せり、幽谷の山村茅屋十餘あり、村は瘦せて民窮す、村を繞くる一水を隔て、高山あり、圓平にして樹林少からず、村民に就て其名を問けば曰く國望山なりと、從者曰く山名太だ好因縁あり、回天の望此村に在りと叫ぶ、珍客の一行茲に馬を繋ぎ、輿を止め、行李を下ろし、民家の稍大なるものを借るべく村老に謀る、村民等驚訝して容易に答へず、沈相黨説くに都城に變亂起りしたため暫らく村老の寛懷と斡旋によつて身を置くの寸地を願ふ、村老沈相黨の風姿堂々、自ら尊貴の風あるを見て心大に敬服し、導いて獵民の李時榮の家に入る、村を警し、むる聲は鷄鳴なり、山を繞くるの溪水は宮殿の古樂よりも其響清曉たり、朝夕伺候して遠來の客を慰むの親情を表す、只だ市を去る十數里、白雲と碧嵐とは彼等の枕

(317)

席に侍し、彼等の食卓に来るあるも日夕の食料殆んど口にするに堪へず、王妃は善く之を忍び、日々都城の消息を俟ちつつありき。

此奔亡中に於て彼は村民等に屢恩惠を施こしぬ、村中の婦女子は清婉なる貴婦人を見んとて押しかけ來り、始めは朋友の如く、交はり、次て一行の尊敬特異なるを見て漸く尊敬しぬ、一行は寂寞を破らんが爲めに村丁を集めて雜歌を唱へしめ、錢を投じて童兒に舞踏せしめたり、國望山中に入りし其跡を追うて尋ね來れるものは大院君の追手に非ずして珍客團の一味同類なり、輿丁日々幾人群を作し、驛馬絡繹として相續く、閑村俄かに變じて市邑の如くに變ず、朴々たる僻村の民も此光景の奇異なるに驚き、其壯大なるに喜び、一團の客増加して幾十人となりぬ、酒旗の風茅屋に翻り、驛鈴の聲村巷に湧く、村老遂に村の祝福を感謝せんが爲めに國望山を祭りぬ、村民朴某罵つて曰く國望は國亡なり、珍客之を聞いて太た怒る。

彼は王宮の形勢を探くらんが爲めに、尹泰駿を密使として漢城に送くり、其在

所と安息を王の許に内報し、且つ策を進むるに王親ら使者を北京政府に送くり

清國の保護を求めらるべし、大院君は李鴻章の尤も畏怖し且つ好まざる人物なれば、若し速かに清國の出兵を請はば王宮の回復容易にして亂民直に解散すべし、然らざれば日本は昔時の如く大軍を動かし壬辰の亂を再出するに至るべし、王若し此計を容るらるれば使者の任に當るものは魚允中に如くはなし、王の喜びは回復の日來るに非ずして、其愛せる妃が無事存在せるが爲也、王は其父の再來を好まず、其妻の再來を願へり、最愛なる妻の願の如く王は魚允中をして北京に急行せしめ、兵亂の顛末を報告し、善後の處置を請へり、此計略は王妃の智慮によつて決行せられたりしと雖も、蓋し之を企てたるものは沈相黨なりしとならん。

清國政府は朝鮮王の使者を引接し、其請求の如く直ちに北洋艦隊に陸兵五營を載せて急行せしめ、丁汝昌、吳大澂、黃士林等をして兵亂鎮定の任に當らしめ、且つ其首魁たる大院君を拘致して北京に送らしめ、一面は大院君一派の黨與を驅逐し、亂民の巨魁を刑戮したり、十五年の兵亂は直に鎮定し、大院君の執權は忽ちに喪失し、漢城の王宮と政府は重ねて王妃を迎ふる可くなりぬ、黃龍旗は漢城の

(318)

東南に翻へり、清國の威勢は一兵を失はず、期せずして藩屬の關係を實現せり、王は大院君拘送せられ南陽灣を發したりと聞き、直に使者を國望山に馳せ行かしめたり、此任務を遂げたるものは李容翊なり、彼は咸鏡道出身の出稼き賣水商民なりき、其健脚なる元氣の旺盛なる晝夜兼行して迅速に報告したり。

山中生活に奉侍せるものに對する王宮の報酬は甚だ行届きたるものなりき、王妃は其一生涯中尤も奇抜なりし山中生活を忘ること能はず、還宮後に於て彼等村民に多大の惠澤を施して謝意を表したり。

王は妃を黃泉より迎へたるが如き欣悦を以て、其還宮を迎へしめたり、蓋し妃及其一行が山村の珍客として待遇せられつつある間、大院君は天下に發布して妃の死を宣告し、萬民をして哀服を着せしめたり、大院君は其復勢久しからざるが故に其亡命を搜索する暇あらざりし、若し其落ち行先が國望山中に存在せしを知りしならんには、彼は其政敵を追窮するに少しも假借せざりしならん、然るに今や幸運なる王妃は宣告せられたる黃泉より復活して王宮に歸り來るに際し、漢城市民は其無事安寧を祝せんとて幾萬の群集は南大門外に集まり、或は慶

(319)

賀の詞を上り、或は頌徳の文を進上し、恰かも活如來を迎ふるが如き歡喜と崇拜を以て奉迎しぬ。二ヶ月前に於ては彼等群集は昌徳宮敦化門前に於て王妃を殺害せんと欲し誤つて宮女を曳來つて冷罵を逞ふしたり、彼等若し王室に忠良なる市民ならしめば、二ヶ月前に於ける行動は叛逆なり、彼等は其冷罵の聲未だ消へ失せ去らざるに早くも頌徳の聲に和せり、彼等は幾回の政變に際しても、如何なる性質の變亂に際しても、直ちに傍觀者より變じて運動者となれり、鮮血を好み、變亂を愛する先天的革命徒なれども、其強者に柔順にして敗者に冷刻なる伶俐なる革命徒なり、されば攝政大院君が強者となりて市民を指揮しつある間は、彼等は如何なる殘刻手段をも撰ぶ無くして大院君徒の群集となり、王妃が權勢に回へるに至れば、如何なる讚美をも呈して之を歡迎せり、彼等は其國家が教訓せる事大政略をば個人の上にも實行す。

王妃は奉迎使洪淳穆に擁せられて宮殿に還御あり、歸來中外の光景を見れば、全く空虚なり、王は只だ清國軍隊の爲すが儘に委せてあり、大院君は拘送せられ、政府大官は刑せられ、退去せられ、亂民の重なるものは殺戮せられ、内外の諸政清

國官憲の任意に指揮せらる、故に彼は還宮の後先づ閔族を擧げて政務に當らしめたり。

彼は閔族中閔臺鎬、閔應植等を以て政務の樞路に立たしめ、前堂上官たりし鄭顯徳、李景夏等を死刑に處したり、是時に當つて趙寧夏を以て謝恩使として北京に抵らしめ、清國をして出來得る限り大院君を拘束せしむべく稟議し、又清國をして多大の干渉を爲すと俱に朝鮮に對する列國との外交案件に對する責任及保證の地位に立たしめんと謀りぬ、然れども是れ彼に於ての本旨に非ず、彼は清國の國力及其の地位は果して獨力を以て朝鮮を保護し得るや否やを探情するにありき、次で成岐運、朴齋純、魚允中等は清國留學生として王宮より特派せらる、蓋し王妃より與へられたる特別命令は大院君の動靜を探ぐるにありき、大院君及び李鴻章との間に如何なる默約、提携の成立するやも料り難きを慮りて留學生を送くりたる也。

是より先き兩班子弟中金玉均、朴泳孝、洪英植、徐光範等俊才子弟を率ゐて日本に留學せるもの多くは歸來して要職に就くあり、彼等は王妃の撰拔を被ひり、近

世文明の學を習はしめんが爲めに日本に留學せしものなり。其近世文明に對する王妃の先見は之を大院君の鎖國主義に比して卓拔せるものありき。彼等は日本に滯留し、日本に於ける近世的變革の狀況を目撃し、日本が勇往果斷世界の文明を用ゆるの變化を見て、心中革新の企を起し、歸來政府に勸めて郵便、電信、税關、新聞、軍隊教育等々改革を企てたり。而かも之を王妃よりして見れば、彼等の革新は必しも不可ならずと雖も、日本政事家と結托し、日本の勢力を利用せんとするは大なる危険なりとせざるを得ず。彼等は本來近世文明の術を習はしめんが爲めに派遣したるものなりしと雖も、王妃の特別なる使命は日本の國力を探情し、他日列國との外交關係發生することあらば、其利害と輕重強弱を打算して以て自己の利益に利用せんと志に外ならず。然るに彼等年少政事家が得々として政權競争場裏に出動するに至つては遂に衝突を免れざる也。

甲申事變即十七年金玉均の變亂(大院君記事に詳説せり)は斯る動機より發生し、斯る人物によりて企てられたるなり。

此事變の前後顛末に關係せる外交狀態を概説すれば、清國は大院君の執權を

破壊し、王妃の勢力を回復するに多大の援助を與へたりしが、故に王宮に對する清國の干涉は極めて廣大なりき。是れ其著しき外交狀態の事實なり。又日本は壬午兵亂以來稍勢力を得、漢城に於ては若干の軍隊を駐在し、日本留學生等も歸國夫れそれ有力の官職に在り、各種進歩的の事業に着手し、王宮に於ける親善なる關係次第に開展せられつつありき。又日韓兩國間に締結したる通商條約は、江華砲臺以來各國が企圖したる修交の目的を遂行したるものにして、英米露佛獨何れも其代表官吏を駐在せしめたり。今まで殆んど王宮の外邦交際は清國のみに限られたる有様なりしが、十七年事變に及んで七ヶ國代表者漢城に駐劄するに至り、其外交利害關係も漸く多般となりぬ。

此事變の目的は表面上事大黨を破ぶり、王妃の勢力を制限し、清國の勢力を排斥し、舊政を革新すと云ふにありしが、如し然れども王宮に於ては彼等企劃者をして要路に薦用して以て清國の干涉を牽制せんとしたる痕蹟あり、聰明なる王妃は彼等急進黨を或程度に利用して清國の干涉を禦くの打算ありしなり。此主義と均しく露國の使節を優待し、露國の強大を利用すべく謀りぬ。ツェベル公使

夫人が王宮に出入したるは實に此事變の前後より始まりぬ事變は餘りに演劇的に行はれし爲めに甚だ憐むべき失敗を以て終り、數日間改革黨内閣を維持したるのみ、清國の援護は急速に成功し、金玉均一派の首領多くは反つて殺害せられ、金玉均、朴泳孝等は日本公使と俱に辛ふじて身を重圍より脱して日本に亡命したり。

事變の最初に於て、清國軍隊は優勢なる兵力を以て日本軍隊との間に戦火を交へしも、王は變亂の局を支ゆることを欲せず、遂に改革黨の手より離脱して事大黨政府を組織せらる。王妃は彼等急激徒よりして廢妃庶人の宣告を受けたれば、彼は辛ふじて脱がれ、神貞后を伴ひ、王世子を携へて東門外覺心寺に潜匿せり。京畿監司沈相薰は其護衛の任に當り、自ら王世子を負ひ、洪泰允は王妃を負ひ、宮門を出でて漸く輜輿を得て脱れるを得たり、彼は僅か一年有餘の間に於て二回の變亂に際會し、二度の奔亡を企てねばならぬ薄運に接したり、而して彼は常に其變亂の目的となり、中心となれり。

彼は覺心寺より還宮せり、事變の結末は、日本大使井上馨及交渉督辦趙秉鎬と

の間に談判協定せらる。北京政府より招聘せる外交顧問モルレンドルフ(獨乙人)は此談判に尤も盡力せり。

顧みれば大院君楊州に退去してより約十年、王妃黨の政變に殺害せられたるもの前後幾十人、就中閔升鎬は前十年間王妃唯一の謀士を以て王妃黨の勢力を創建したる第一の功勞者なりき、彼先づ殺され、次て閔謙鎬、閔臺鎬、金輔鉉、閔斗鎬、趙寧夏皆な王妃幕中の首領なりき、何れも政變の際慘殺せられたるものなり、而も壬午の亂以來甲申の變を経て天津條約締結せられるまで漢城市民は全く變亂の間に在り、國事の多端なる、時勢の險惡なる前古稀有の光景なりき、此時に於て朝鮮と各國との修交條約も亦た締約せられ、大院君が確執したる攘夷鎖國の政策全く廢亡するに至りしも、亦世界近世の文明始めて半嶋に遷播するに至りしも、王宮の政治は之を大院君時代に比すれば著大なる墮落を來たし、私黨の弊、誅求の禍も亦に前代に稀なる状態を爲すに至りぬ、堂上顯要の官は皆王妃の私惠と私門とを以て充たされ、俗惡なる風習は宮殿に侵入し、卑下なる雜流は王宮の尊榮を潤色し、古來朋黨の間にすら擯斥輕侮したる祈禱、卜筮の迷信を以て私

勢私門の禍福とするに至つて、所謂士林の風全く頽敗せり、苟くも女流の欲する最大なる虚榮、愛憎、淫習、迷信は王妃の政權を包圍したるなり。

甲申事變の翌年一月(明治十八年)天津條約日清の間に締結し、其結果として日清兩國は漢城より軍隊を撤去したり、日本政事家は該條約が金玉均等の企圖を進んで保護し能はざるものとして非難せしもの少からざりしと雖も、王妃當時の境遇よりして見れば、北京政府の後援獨力の保護なるものは此條約によつて著しく減殺せられ、北京政府は日本を對手として大なる制限を被むれるものと、觀測を下したりしならん、則ち王妃の地位を將來に確立するに當つて最早北京政府の裏書を信頼すること能はざるの感念發したりしならん、利害に敏なる彼豈に之を知らざらんや。

此觀測は直ちに發現せり、彼は北京政府が屢警告したる露國の勢力を利用すべく、其代表者ウエベル及其夫人との間に親交し、ウエベル夫人に對して感愾優遇を極めたり、彼は露國の力を借らんが爲めにウエベル公使の友人韓圭稷を登用して顯職を授けたり、彼は清國が露國を恐怖するに相反して露國の強大を利

用せんと欲せり、袁世凱及外交顧問として北京政府より推薦したるモルレンドルフは、寧ろ王妃の親露主義を阻止せしむるむること能はざりき、蓋し王宮の外交は只だ事大に在るのみ、事大外交とは實に強大を利用する尤も巧慧なる外交なり、王妃は清國と對等の勢力ある日本の利害を尊重せり、清國よりも強大なる露國の利害に對して更らに大なる尊敬を拂はんと欲す、彼は斯くの如き政略を慣用して自己の政權を保持すれば足れるのみ。

果然露國の要求に係る豆滿江貿易條約に乙酉年三月を以て調印せらる、李鴻章が極力防止せしめんとせし該條約は造作も無く成立したり、此締約は實に王妃の果斷と卓見とを示して餘りあり、北京政府が二年前多數の軍隊を動かして彼の危急を保護したりしも、十餘年前彼の哀求を容れて王世子問題を解決したりしも、日本の要求を容れて天津條約を締結したりしも、世界各國の修交を阻害せずして平和の局面を支へ來りしも、要言すれば外交關係を善用して事實的藩屬の實權を獲得すべく努力したる所以は、王妃をして露國の如き侵略的行動を取るの邦國を阻害するに在りしなり、曾て李鴻章より大院君に警告したる開國



論實は日本修交勸告書甲申年モルレンドルフ並に袁世凱に托して北境警備を戒告したる問答記に依るも、王妃對ウニベルの關係は李鴻章をして甚大の憤怒を發せしめたるなり、彼は遂に會寧を以て露韓陸上貿易地に定め、袁世凱をして王宮に無斷に入謁し、有らゆる惡罵を放たしめたりしも偶然ならず。

王妃にして國望山中の日記を讀ましめば、彼は李鴻章の面目を幾何か存在するに力めざる可らず、況んや覺心寺の陀住に至つては危險目眚の間より救出されたるの恩誼あり、彼は之を忘れ、此誼を擲ち去つて露國との親善を力めたり、由來朝鮮人の外交術は一として此軌道を歩まざるものなし、彼は實に朝鮮人の外交手段を最大に發揮し、最妙に運用したるなり。

### 後の十年

清國駐劄大臣袁世凱の專横なる行動は、王宮の感情を損すること甚しく、王妃は流石に之を忍耐したり、其往々極端なるに至つて、彼は金玉均、朴泳孝等を薦用し、履ウニベル夫人を引見し、暗に袁世凱の行動を警束するの狀ありき、王妃の位

置は最早一人の情夫に満足せざるに至れり、彼は其情夫の干涉拘束に不快の念制し難く、日本及露國の二人を相手とせり、會寧陸上貿易條約の調印は其情交の發表なりき、モルレンドルフ、デニエー等の外交顧問は、干涉の補佐者より一變して其反抗者となれり、彼等は情交の妨害者たるべく引聘せられて今や一轉して其媒酌人となれり。

陸上貿易條約の成立は、李鴻章對王妃の外交競争の決勝點なりしが、遂に王妃の成功となり、李鴻章の失敗に歸せり、而して李鴻章の怨恨、憎惡、嫉妬は甚しく、必ず何等の復讐をか試みる可く、又何等の壓迫をか斷行せずんあらず。

果然大院君還國の議は袁世凱の口より勸告せられたり、李鴻章及大院君との間には俄かに親善となり、其還國に就て何等の默契成立したるもの如し、王は其國父を奉還せんが爲めに閔種默を使として北京朝廷に請はしめぬ、大院君の歸國は實に突然たり、彼は其歸るや飄然として來歸し、國王は已むを得ず其父に對する禮として南門外に出て迎へぬ、彼は王宮を訪問し、王と對座するや、父子對面の情懷に堪へ難く、流石の英雄も流涕を禁する能はざりしと、而かも彼は王妃

を見る無く、其政敵と相對するを好まずして雲峴宮に入りぬ。

大院君の歸國、是れ政權争鬭の開幕なり、王妃の警眼豈に此歸國の背後を看過せんや、只だ幾年に亘る變亂は、痛く漢城市民をして變亂に飽かしめたり、市民は國太公の歸國を見て、猛虎の危嶋に嘯くの思を爲し、戦々兢々として安せざるが如し。

然れども朝鮮の形勢は壬午以來大に變遷せり、漢城の外交状態は此數年間著大の變化を爲せり、若し漢城を以て十年前ならしめば、二個の猛獸は直に搏撃したるなるべし、若し又三年前ならしめば、北京政府の指揮は直ちに彼等の勝敗を決定せしめ得たるべし、然れども今や弱邦の英雄も強大の小臣によつて制肘せられ、小國の巨人も亦大國の平凡に干渉せらる、是れ國際の強弱也、漢城市には七國旗翻へりてあり、王宮には三國の使臣包擁せり、大院君の歸國に付帶せる北京政事家の打算も、大院君自らの豫算も意外の違算となりぬ、是れ王妃の力に非ず、王妃の下に存在せる外交の利害關係に外ならず、大院君の歸國を以て王宮の反省を促かしたる李鴻章の諷刺も、警示も何等の效無く、王妃は列國の間に介在し、

能く列強の利害を利用し、國際の勢力を利用し、安全なる地位を保つに至れり、彼の一生を通じて此時代程平安なるはなく、王妃の一門一黨の隆盛なる前代未曾有なりとす、閔族が其富と權勢を獲たりしも、此時なり、爾來閔族は幾回の政變に遭遇し、流離顛沛の間に彷徨せしことありしに拘らず、後年に至つても、其一門の富他族に比して優れるあるは、蓋し此時代に於て横領したる富なり、吾人は王妃の最大得意時代に於ける王宮の光景を叙して彼の人物性情を讀まんを欲す。

此時に於て閔族の姓あるものは、其血統の遠近を論せず、悉く顯門に表證せられたり、故に時人歌ふて曰く、王妃の四寸たらんとを願ふ、國王の八寸たる勿れ、と

一寸は父子、二寸は兄弟、三寸四寸次第あり、時代歸向斯くの如し、閔泳韶は閔族中尤も遠族なり、然るに王妃避難の際一時閔泳韶の家を潜居せるの故を以て、其徳に酬ゆるために授くるに判書の位を以てせり、閔應植は避難の保護者なりし故を以て、彼は判書の官に上ほり、其權勢堂上を壓せり、閔焜植は忠湖院驛避難の寓家たりし故を以て、彼は暴戾殘虐の勢道者たるに至れり、閔族の一統は恰も我藤原氏の專横を極めたる時代と相似たり、惜らくは朝鮮に於ては王權の衰頽を悲

歌せる清原氏無く、血統の式微に熱涙を漉く高山彦九郎無し、國王は木偶の如く、王族は閔氏の私臣に非ざれば追従僅かに生命を保つの有様なり、殿上の太陽は女性にして其軌道を回轉するものは外族なり、祈禱者なり、巫女なり、僧尼なり、卜筮者なり、鄭聲を歌ふ遊人なり、歌樂に巧みなる公子なり、雜伎に長ずる惡漢なり、美貌佞便なる遊治郎なり、誅求奸惡なる用人なり、彼は此群魔出沒の間に擁せられて以て太平となし、權勢の壯大を誇る、道徳の腐敗茲に至れば古來城傾き國亡びざるもの稀なり。

然れども王妃は飽くまで活氣あり、彼は其敏慧の性格に加ふるに一代の英雄と相争ふの霸氣充溢せるが故に其大膽なる計劃、慧敏なる行爲尙能く時代を動かすものあり、大院君歸國するや、雲峴宮邸門に紅木を立てて禁衛の標木を立つ、其名は大院君に對する敬意を表するが如くにして其實は政敵の門に出入するを禁じたるものなり、大院君は此標木を以て其閔居を侮蔑したるものとし、大に怒つて直ちに伐去したるに拘らず、彼は雲峴宮訪問者をして制限し、時人に諷示する雲峴宮出入を戒告したり、王妃の權威を怖るるものは自ら警戒し、雲峴宮は

益寂寥となりぬ。

王妃或一夜遊宴を設け、女樂を張り、夜寒うして殿閣の守直するもの夜半に至つて或は潜逃し或は寢臥し、守衛の地寂然たり、往十里住金戊戌なるもの當夜守直の任に當り、衆卒の潜逃するを見て、獨り屹立し、鷄鳴に至りて任處を離れ去らず、適ま王妃燭を秉り窓を開いて殿閣を見るに、一人の兵卒階下にありて禁衛せず、四邊夜尙暗うして寒風淋烈たり、加ふるに雨雪交至り、窓外の風色凄然の感あり、王妃近く招いて姓名を問ふに、曰く扈衛營兒兵金戊戌なるものなり、顔色已に飢寒に迫り、言語能く奉答するを得ざるもの如し、王妃憐然の情に堪へず又問ふて曰く汝何故に獨り歸り去らざる乎、對へて曰く諸兵皆な歸り去つて餘卒無く、小臣若し去らば守衛全く空しきが故に飢寒を忍むで守れるなりと、之を聞き、王妃は大に賞揚し、其願ふものを以て與へんと、守兵欣然として曰く小卒の大望は把摠なり、把摠とは伍長の資格に過ぎず、王妃笑つて松坡鎮別將の官を授く、蓋し金兒に取つては望外の顯職なり、是宮殿の一小事に過ぎずと雖も、其惠澤を施こし、仁慈を盡くすに慧敏なるものなり。

王妃全盛の時、宮中の風儀全く壊亂す、其起因を聞くに蓋し妃の迷信より起りしなり、彼は王世子冊立以來今日に至るまで、前後二十年間幾多の危険を経過し、幾群の政敵及敵手と奮闘し、内は一代の英傑と戦ひ、外は強大の使節と争ひ、以て今日の盛大を獲たり、斯くの如き勞苦と努力を以て償ひ得たる政權の裏には、震慄すべき秘密、悲惨なる暗黒を以て充塞す、彼の精神を慰むべき高尚なる信仰は、其心血に存在せず、彼の安眠を興ふべき慰安なく、彼は到處の宮殿に於て毒手に倒れたる政敵の面影と愛寵せる黨與の慘劇を追念せざるを得ざりき、彼は一代の政事家なりと雖も、亦女性也、婦人也、其意滿ち、心安んじ、王と相對し、群臣と相對すれば、交々來り犯すものは、精神的不安なり、過去の慘劇也。

ト者來つて宮殿の凶事を語れば、彼は喜んで之を祭れり、巫女來つて怨恨惡鬼を談すれば、彼は楽しんで之を祭つて之を攘はんことを願へり、僧尼來つて幽魂を説けば、彼は欣悦して之を去らんことを祈れり、彼は自己の罪惡を償ひ自己の奮闘を慰めんが爲めに、殆んど神經病人の如くなりぬ。

此迷信を去らんが爲めに、神靈君と稱せる巫女を宮廷に引聘せり、此巫女は極

めて淺薄なる教を受け、身分賤しきものの寡婦なりき、彼は天理教祖の事蹟を有し、神經過敏にして直覺に富ある鋭敏なる婦人なり、蒼白にして眼孔鋭く、其沈痛にして權威ある辯説は、豫言者の如き口調を以て愚者を感激せしむるに足れり、彼女は王妃の不安と迷信の根機を轉回せんが爲めに、斷案して、曰く昌德宮は惡鬼の襲群にあり、甲申年の慘禍に倒れたるもの、鬼哭と怨恨は王妃の傍より去らずと、大膽なる斷言は、痛く王妃の心を動かし、彼は直ちに天啓の暗示を語り、何者よりも權威あるものとして、敬重せられ、一躍して神靈君の尊稱を受くるに至れり、君とは貴族中の最高貴の尊稱なり、彼女は一巫女の身を以て其最高貴の身分となれり。

是に於て神靈君の勢力は大臣宰相よりも高く、彼は王妃の第一の顧問となりぬ、彼の手引によりて各種の官職は賣買せらる、彼の引援によつて大小の祈禱は行はれたり、彼は豫言者の權威を以て現實の權勢を動かせる宮廷政事家となりぬ、彼を評するもの、曰く當時に於て王妃は國家の最大權勢者なれども、宮殿の權勢者は寧ろ神靈君なりしと、恐らく此二人の婦人は不思議なる神經病に罹れる

朝鮮婦人の代表者なりしならん。

神靈君一たび宮殿に出入してより雜流の勢力宮殿を壓倒するの光景あり、就中其著明なるものを舉ぐれば李裕寅の卜易に於ける、李範晋の歌舞に於けるが如きは雜流の巨魁とも謂ふべし。

李裕寅なるものは慶尙道の出身なり、其神靈君が王妃に尊重せらるるを聞き又屢王妃親ら神靈君邸に臨幸せらるるを知り、神靈君に頼つて王宮に接近すべく謀りぬ、彼は神靈君邸近き道傍の民家に寓居し、毎夜夜半に至つて燭を秉り、燈を明かし、經文を誦讀し、時々奇聲を發して后妃殿下萬々歳を唱へり、其奇異なる行爲は隣保皆な以爲狂人來れりと彼は蓋し深く謀る處ありたるなり。

王妃神靈君邸潛幸の途次、其奇異なる讀經の聲を耳にし、又萬々歳の祈禱を聞き、甚だ忠愛なる奇行者なるべしと爲し、神靈君に其人たるを探問せしむ、神靈君答ふるに天下の奇傑なり、易斷神の如しと、直に彼を王宮に召して諸事を卜筮せしむるに多くは適中す、王妃之を信ずること神靈君の如く、爾來彼は卜者を以て王宮に出入して位大臣を極むるに至れり、彼は幾十日の祈禱を以て大臣の位を

獲たるものなり。

李範晋は最近日露戰役の開始までペテルブルクに駐在せる朝鮮公使たりき、彼は其家系よりせば公使以上に採用せらる可き名門の子なり、彼の父は大院君の參謀長とも云ふ可き李景夏の子なり、父李景夏横死後家敗れ産を失ひ、市井の間に落伍せり、其亂暴なる性格、武術に長せる評判は、早くも遊蕩公子間に推重せらる、狹斜の巷に戯れ、娼婦妓生の幫間となり、歌舞に長せる技能は、宮殿の宴遊に於て屢評判せらる、彼も亦神靈君の朋友となり、其推舉によつて王宮の宴席に侍するを得たり、歌舞燕樂の間に能く歌ひ、能く戯れ、其色彩ある容具と其便巧なる姿樣は、王妃の寵愛を被りぬ、王妃の愛幸せる狎親者中に於て、彼は尤も王妃の眷寵を受けたりき、王或夕王妃の寢殿を訪問せらる、孤燈影暗ふして隅に佇立せる人影の動くを認め、怪んで其何人たるを問ふ、王妃曰く、恐らく夜鬼の變を認められたるべしと、人を馬鹿にし、王を木偶とせり、李範晋の寵遇は宮殿の神聖を滅ぼし、王宮の腐敗其極度に達したるものなり。

是より政務は閔族に委して顧みる無く、宮殿の日課は淫習奢侈を極め、雜輩は

王宮に満ちて朝臣次第に遠かる、尹泰駿、洪啓勳、鄭泰好、洪永禹等其雜輩の長たり、或は盲人募選して宮中に集め、黄片紙を以て兩眼を隠掩し、奇装せしめて以て齊に讀經せしむ、其勢に酬るためには隠掩せる群盲の前に金錢を投じ、其競争の奇劇なるを觀て樂しむとせり。

宮殿に使役せる最下級の胥吏を稱して武監と云ふ、其兵卒中美貌にして美聲あるものを撰んで俚歌雜語を習はしむ、之を稱して男四黨と云ふ、年少美貌あるものにして善く歌舞するものを愛賞し、甚しきは女粧して近習と爲すに至る、市井の美少年一躍して宮廷に出入するを得るもの少からず、其習漸く増長し、滿廷の宮女蕩然として風俗濫るるに至る。

一夜黃昏女轎王宮を出でて東門外に去るものあり、捕吏追索して東門外山寺に入るを見る、探問すれば曰く宮人命を奉じ此山門を拜せるなりと、更らに女轎より出で去るものを見れば光頭圓黃の大和尚なりき、當時王宮に僧侶の出入するもの頻々たり。

王妃は其權勢に飽き、其形容に飽き、其精神の煩悶を慰するを得ず、菩提の寺院

を建立し、八道の寺刹に功德を祈り、天下の迷信者を招いて以て其煩惱を救はんと欲せり、國庫常に空ふして誅求益刻となれる、王宮は之を政府に誅求し、政府は之を人民に誅求す、權勢ある外族も遂に其要求を充たすを得ずして逃げ去るものあり、政府は恰かも王妃の迷信を償はんが爲めに誅求の仲買人たるの觀ありき、然れども彼は迷信すれども政權の存在を喪失し、棄却する程の愚物に非ず、故に彼に代るべき權勢者は必ず閔氏なりき、曰く閔泳煥、閔泳韶、閔應植皆な交代累次して王閔の代理權を執行したる誅求なりき、其最後に至つて閔泳駿なるもの貪虐にして財理に長じ、曾て平安道監司たるの日、暴政を極め平安の富を横領して漢城に歸る、王妃之を用ゐて勢道と爲せり、彼は前後四年間、王妃の誅求に能く堪ゆるの才能あつて其勢力一時天下を風靡したりき、彼は王妃の代理權者なりき、只だ事の是非曲直を問はず、閔族を庇護し、其力一致して以て李族の回復を防制せんとしたる一念は常に忘ること無かりき、其裏若かき王宮の且、其影ともなり、形ともなりて終始王妃の參謀たりし閔升鎬未亡人を近づけ、厚く禮遇したるが如き、又大院君の爲めに横死したる遺族を慰恤せるが如き、其間隙なき打算、

周到なる政略は事の大小を論せず、普ねて恩惠を以て人意を繋ぐの妙手に至つて、後世王妃の多智深謀に感服せしむるもの少からず。

若し夫れ王妃の私行を説かんと欲すれば、寧ろ其罪惡を數へるに止り、小國の宮廷を侮蔑するに過ぎず、是れ豈に吾人の本志ならんや。

爾來大院君は鬱々として雲峴宮に蟄居して起つ可きの機會は歲月流光と俱に移り去りぬ、袁世凱は大院君を要して外交の變化を捉へんと企てたるも、王宮は群魔の間に覆没し、列強の環視に徒らに企謀の機會を逸するのみ、王を廢立するの陰謀はデニエーをして絶叫せしめ、兵亂の謀略は金玉均等に制せられ、王妃は實に日清交戦に至る迄、最大の權威と快樂を盡くしたるなり、人生貴賤を論せず、斯る榮華を永續するを得ば、人生の禍福は甚だ不公平なり。

一面に於ては王宮の榮華久しく、一面に於ては閔族の勢道漸く驕暴となり、八道の百姓天下の變を希ふあり、閔族を頌讚せる愛民碑は古昔の賢人仁人に劣らずして八道の都市に羅列しあり、誅求を賣買せる狡猾なるものは到處に愛民碑を建立する城塞を築くが如くに累立せり、李王朝以來惡虐無道の君主も少しと

せず、暴政を極めたる宰相も亦多かりき、然れども閔族政治の如く其形式を飾るに仁政の色を以てし、天下の百姓を苦ましめたる惡政の巧妙なるもの前古未聞なりき、艸莽の英雄起る無きも革命の來るは是に到つて殆んど天の宣示なり。

果せるかな東學徒なるものあり、慶尙全羅の間に黨を聚め、教を傳へ、次第其勢力増大となりぬ、彼等は百姓塗炭に苦しめるの状を見て、説くに天命の理を以てし、仁義の道を説けり、當時に於ては一粒の米、巨大の惠澤也、一滴の水、絶大の甘露也、彼等教徒の舌に集り、彼等の手足に走しり、彼等の反亂に加はり、一舉して全羅の南半を占領するの勢ありき、所謂東學黨の内亂是なり。

此内亂は王妃及王妃黨政府を顛覆するを目的として起りしものなり、閔族征伐は彼等の重なる目的なりき、故に其反面に於ては大院君は彼等の推尊せる處にして、大院君は亦彼等を煽動して王妃の王宮と政府を覆滅せんと企てたるなり、而して之を鎮壓せんが爲めに王妃黨政府が清兵を借るに至つて、事態は意外に擴大となり、局面は期外に變化し、遂に日清戰役を發生するに至つて、大院君の企圖も、王妃の政略も、意想外の結果を見ざる可らざるに至れり。

(342)

日清戦役及其後に於ける王妃の對大院君策は頗る巧妙を極めたり、日本黨より毒手向けられたる其毒手を以て大院君を打ちたるが如き満座皆敵手の間に圍まれ乍ら其逸脱して却つて善く之を包圍するの地位を獲たるが如き彼の着眼の敏銳なる其行動の大膽なる眞に有韓政事家をして顔色無からしめたり、日本公使の改革と新法に對しては叩頭三拜して文明進歩を賞讃し、大院君に對して朴泳孝金鶴羽の如き日本黨を以て當らしめ、其漸く王宮の勢力を固め、日本勢力を制し得る他の勢力を利用し得るに至るや、反噬を放ち、離間を試み、其盛粧せる大宴を開いて日本公使を頌徳し、外族の子弟を送くつては日本の反感を慰めたるが如き、彼は一人の謀臣無く、一個の味方無く、僅に一年間に於て大院君に勝ち、日本勢力を排斥し、日本黨を破りぬ、是れ恰かも先年露國と提携して以て北京政府の干渉を排斥したりしと同一の政略を復演したるものなり、試に當時漢城の局面に現はれたる此演劇を形様すれば、大院君は偏すら昔時の攝政を回復せんとのみ念願し、井上公使は朝鮮獨立の神に日本干渉の文物を飾るに急燥し、王妃は表情せる美婦の遊蕩兒を待つが如く、彼は其來れるものを擒縦し、招致し

(343)

て以て其勢力を回復したるなり、獨立紀念祭典を舉行して以て井上公使の送別の宴に代ふるが如き、何ぞ其れ險惡なる手段なるぞ、彼は其腹中に蓄へたる惡罵冷笑を日本の顔面に擲つたり、其外族の子弟を東京に送つて以て臨時の典物と爲しつつ、彼は満倉の黄金を散して典物を取り返へしたり、曾て王妃のために一死を脱れざらんとしたる朴泳孝が彼の一舌火に熱着して日本と戦ひ、大院君と戦ひつつ自ら懺悔の餘り又もや一生命を失はん迄の危険に陥りしが如きは、寧ろ甚しき滑稽視せられたかの觀ありき。

此戦闘中に於て王宮は次第に繁榮となりぬ、昔時の雜流も漸やく加はりの然れども彼は其面前に於て大院君の生存を知れり、日本勢力の存立を知れり、閔族の敗殘を救はんことを期せり、故に孔德里を以て國太公の臨終地に定めんと謀り、露國の力を借りて日本勢力を打破せんと企てたりき、是れ彼に取つては一代の不幸なりき、彼は其悲運を滿載せる天命が、日夜彼の身邊に迫まりつつあるを知らざりしなり、如何なる階級にあるを論せず、人類の生命は本性を保ち、本能を盡くし、天分を開らくを以て最大の幸福とす、彼の一生は秘密の裏に罪惡を以て



築き上げられたり、李王朝の最後を代表し、李氏王朝の亡滅を作成したるものは、彼なり、彼の政治也、彼の性格也。

悲しむべき日は十月八日なりき、彼は其前夜政敵蹶起を知り、直ちに使を日本公使館に馳せしめて、王宮の護衛を要求したり、孔德里の囚檻を破れる猛獸は群を作して西大門に向へり、彼は鐵面皮にも重ねて日本公使の來援を利用すべく、第二次の急使を立てたり、刻々に寄せ來る激浪は既に王宮を壓するが如くに、王宮の正面に押寄せたり、彼が最後の使者を讀經公使の許に送りし頃には、長蛇の陣は已に王宮に侵入し、つつあり、彼の忠勇なる平壤兵も、愛寵せる將卒も、最早や、嗚然として死命を制せられたり、彼は井上公使を瞞着し得たる魔術を以て、其最後に至るまで三浦公使の保護を受くべく考へたり、彼の近臣なる鄭秉夏は假令王宮は大院君に占領せられるも、王妃の生命は安全なるべく保證し、彼自ら亦た最大なる危険は來らざるべしと想念し、看々大院君軍の來襲を待ちたりしも、遂にそれは運命の逆行なりしなり、彼は自己の寢室に於て奔亡の仕度を爲し、つつある間に於て、凶刃は其胸部を刺し、了はりぬ、鮮血は乾清宮の殿宇に班痕たり、彼は

(344)

遂に一代の驕慢を抱いて靜かに永く眠れり。

(345)

韓國最近  
外交史

# 大院君傳附王妃の一生終

王妃の一生

明治四十三年十月廿五日印刷  
明治四十三年十月廿五日發行

大院君傳典附

定價金壹圓五拾錢

著者 菊池謙讓

發行者 森山美夫  
京城本町二丁目四十番地

印刷者 中野鏞太郎  
東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷所 東洋印刷株式會社  
東京市芝區愛宕町三丁目二番地



發兌元

朝鮮京城本町二丁目電一四五番  
朝鮮振替口座番號一一一五番

日韓書房

東京大  
賣捌元

東京市神田區表神保町二番地  
振替貯金口座第一三三五番  
電話本局特一五三九・四三七番

同文館

# 日韓書房藏版書類

|             |              |                      |                |                                      |                 |                |                |
|-------------|--------------|----------------------|----------------|--------------------------------------|-----------------|----------------|----------------|
| 度支部編纂       | 朝鮮雜誌社編纂      | 京城日報主筆法學士<br>原田豐次郎編著 | 菊池謙肇校閱<br>細井肇著 | 菊地謙讓著                                | 京城日報記者<br>奧田鯨洋著 | 幣原坦序文<br>奧田鯨洋著 | 帝國新聞社長<br>鄭雲復著 |
| 現行          | 改訂最近         | 伊藤公と韓國               | 漢城の風雲と名士       | 韓國最近外交史<br>大院君傳 <small>附王妃一生</small> | 日韓古蹟            | 續日韓古蹟          | 韓日英新會話         |
| 法典          | 覽            | 國                    | 士              | 傳                                    | 蹟               | 蹟              | 話              |
| 定價金七<br>十錢圓 | 定價金一<br>十二錢圓 | 定價金五<br>十錢           | 定價金八<br>十錢     | 定價金一<br>圓五十錢                         | 定價金四<br>十錢      | 定價金六<br>十錢     | 定價金一<br>圓二十錢   |

|                     |                 |         |
|---------------------|-----------------|---------|
| 帝國新聞社長<br>鄭雲復著      | 獨習<br>日韓尺牘      | 定價金十二錢  |
| 平壤控訴院書記長<br>村上唯吉著   | ポケット日韓會話        | 定價金六十錢  |
| 漢城高等學校學監<br>文學士高橋亨著 | 朝鮮の物語集附俚諺       | 定價金十二錢  |
| 前京城日報記者<br>海田斬雲著    | 暗黒なる朝鮮          | 定價金六十錢  |
| 前京城日報記者<br>海田斬雲著    | ヨボ記             | 定價金六十錢  |
| 海田斬雲 共著             | 朝鮮漫畫            | 定價金四十錢  |
| 朝鮮雜誌社編纂             | 朝鮮地理            | 定價金十二錢  |
| 編輯部書房               | 韓國風景寫真帖<br>全五冊  | 定價各金二十錢 |
| 編輯部書房               | 高尚美韓國寫真帖<br>全二冊 | 定價各金六十錢 |

|                    |            |                     |
|--------------------|------------|---------------------|
| 今村柳警視校閱<br>細谷淺吉著   | 韓國巡查志願者必携  | 定價金三十五錢             |
| 韓國總理大臣秘書官<br>上邨正巳著 | 京城案内記      | 定價金三十錢              |
| 編輯部書房              | 實測踏查最新韓國全圖 | 定價金十五錢              |
| 同                  | 實測詳密韓國全圖   | 定價金二十錢              |
| 同                  | 京城龍山街市全圖   | 定價金三十錢              |
| <b>日韓書房特約販賣書類</b>  |            |                     |
| 國書刊行會編纂            | 高麗史<br>全三冊 | 特價金七圓五十錢<br>郵税金三十五錢 |
| 久保天隨著              | 朝鮮史        | 定價金四十錢<br>郵税金六錢     |